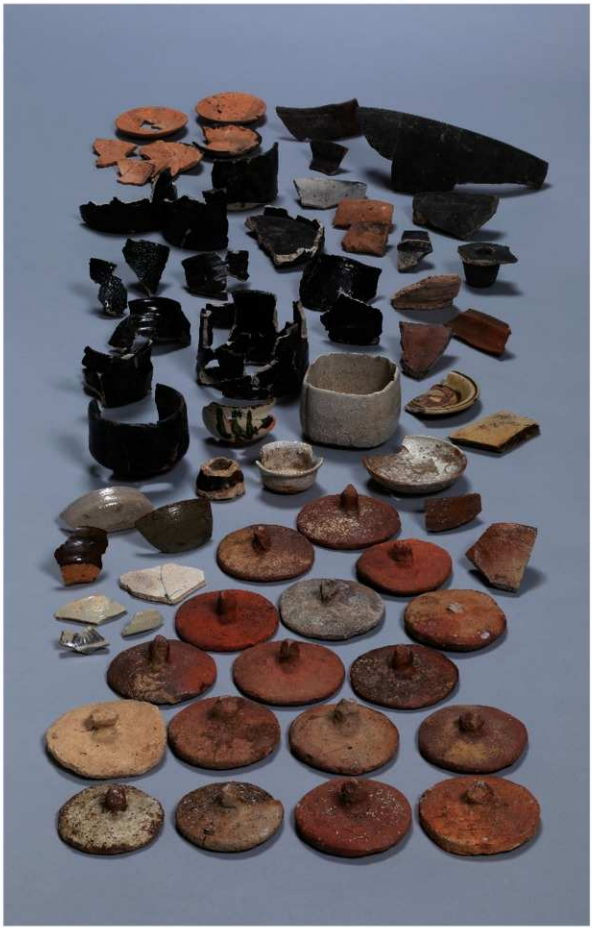
京都市内遺跡発掘調査報告

令和３年度

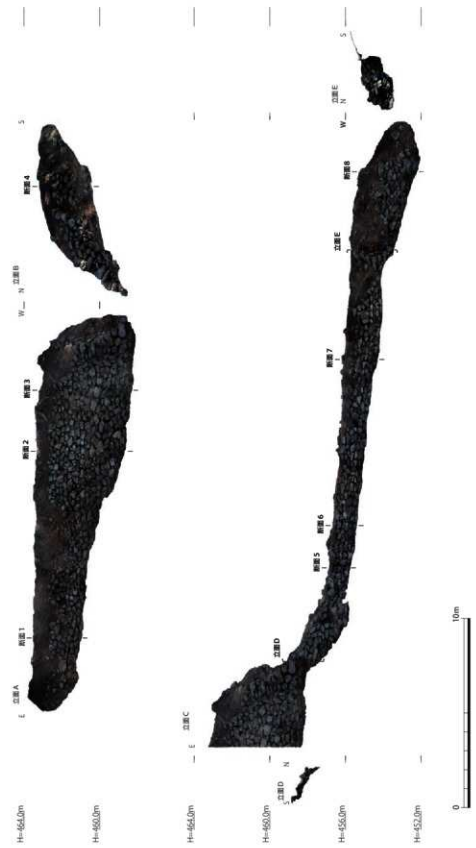
２０２２年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

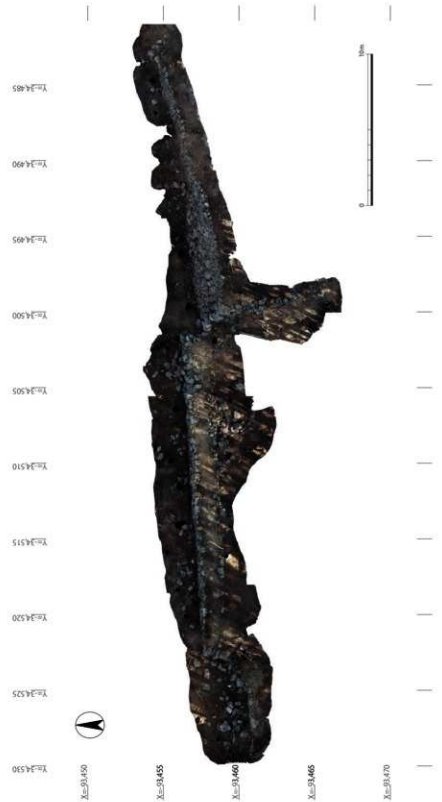


1　安土桃山時代～江戸時代の出土遺物

1　郭５北面・西面石垣（北西から）



1　石垣立面オルソ測量写真（1：200）



1　石垣平面オルソ測量写真（1：250）

例　言

1　本書は，京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した，令和３年度の京都市内発掘調査報告書である。本書では令和３年度に実施した発掘調査成果を報告する。

2　調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が主体となり，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の支援を受けた。

3　調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は，下記のとおりである。

Ⅰ　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡　（受付番号　21K279）
京都市上京区中務町486-9
2021年９月３日～10月６日　88㎡　　鈴木　久史

Ⅱ　平安京左京三条四坊十三町跡・三条せと物や町跡　（受付番号　21H029）
京都市中京区弁慶石町55
2021年６月16日～８月４日　48㎡　　熊井　亮介

Ⅲ　白河街区跡　（受付番号　21S115）
京都市左京区聖護院山王町１
2021年10月４日～11月16日　200㎡　　新田　和央

Ⅳ　山科本願寺南殿跡（第９次・第10次）
京都市山科区音羽伊勢宿町26-5（受付番号　20S464）
《９次》2021年１月25日～２月15日　240㎡　　黒須　亜希子
《10次》2021年４月27日～５月14日　24㎡　　黒須　亜希子

Ⅴ　下三栖城跡　（受付番号　20S561）
京都市伏見区横大路下三栖梶原町65
2021年７月７日～８月６日　140㎡　　赤松　佳奈

Ⅵ　周山城跡　（受付番号　20A008）
京都市右京区京北下熊田大迫４，6-2
2020年11月24日～12月12日　199㎡　　熊谷　舞子

4　本書の執筆分担は，本文の末尾に記している。

5　本書に使用した写真の撮影は，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し，遺構・遺物の一部は調査担当者が行った。

6　本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は，一部を除き，平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号　（公財）京都市埋蔵文化財研究所2019年 に準拠する。

7　本書で使用した土色名は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

8　本書中で使用した方位および座標の数値は，世界測地系　平面直角座標系Ⅵによる（ただし，単位（m）を省略した）。また，標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。なお，調査における測量基準点の設置は，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

9　本書で使用した地図は，本市都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）などを調整したものである。

10　本書の作成及び編集は，京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課で行った。

本 文 目 次

Ⅰ　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡

1．調査経過 …… 1
2．遺　跡 …… 2
3．遺　構 …… 12
4．遺　物 …… 16
5．まとめ …… 17

Ⅱ　平安京左京三条四坊十三町跡・三条せと物や町跡

1．調査経過 …… 21
2．位置と環境 …… 22
3．１区の成果 …… 25
4．２区の成果 …… 32
5．遺　物 …… 37
6．まとめ …… 45

Ⅲ　白河街区跡

1．調査の経緯と経過 …… 46
2．遺　跡 …… 46
3．遺　構 …… 50
4．遺　物 …… 58
5．まとめ …… 65

Ⅳ　山科本願寺南殿跡（第９次・第10次）

1．調査に至る経緯と経過 …… 67
2．位置と環境 …… 69
3．調査成果 …… 72
4．まとめ …… 81

Ⅴ　下三栖城跡

1．調査経過 …… 83
2．遺　跡 …… 84
3．遺　構 …… 85
4．遺　物 …… 90
5．まとめ …… 90

Ⅵ　周山城跡
1．調査経過 …… 93
2．遺　跡 …… 94
3．遺　構 …… 98
4．遺　物 …… 110
5．石垣崩落防止対策 …… 111
6．まとめ …… 112
報告書抄録 …… 115

図　版　目　次

巻頭図版１　平安京左京三条四坊十三町跡・三条せと物や町跡　遺物
1　安土桃山時代～江戸時代の出土遺物
巻頭図版２　周山城跡　遺構
1　郭５北面・西面石垣（北西から）
巻頭図版３　周山城跡　測量写真
1　石垣立面オルソ測量写真
巻頭図版４　周山城跡　測量写真
1　石垣平面オルソ測量写真

図版１　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡　遺構
1　１区全景（東から）
2　２区全景（東から）
図版２　平安京左京三条四坊十三町跡・三条せと物や町跡　遺構
1　１区北壁断面（南から）
2　２区北壁断面（南から）
図版３　平安京左京三条四坊十三町跡・三条せと物や町跡　遺構
1　２区第１面全景（南から）
2　２区拡張部落込み45遺物出土状況（北西から）
図版４　平安京左京三条四坊十三町跡・三条せと物や町跡　遺物
1　１・２区出土瀬戸黒茶碗
2　２区落込み45出土信楽焼水指（蓋）
図版５　平安京左京三条四坊十三町跡・三条せと物や町跡　遺物
1　２区落込45出土遺物
図版６　白河街区跡　遺構

1　第１面全景（北から）
2　第２面全景（北から）
図版７　白河街区跡　遺構・遺物
1　第３面全景（北から）
2　土取り底及びSK140・141（北東から）
3　SX134出土遺物
4　第２面掘り下げ時出土遺物
図版８　山科本願寺南殿跡（第９次・第10次）　遺構
1　２区第１面全景（北から）
2　２区第１面溝21・柱列（東から）
図版９　山科本願寺南殿跡（第９次・第10次）　遺構
1　１区第２面全景（南から）
2　１区第２面土坑検出状況（北西から）
図版10　下三栖城跡　遺構
1　調査区全景（北から）
図版11　下三栖城跡　遺構
1　堀４・造成盛６全景（南東から）
2　SX２断面（南西から）
3　SX２断面（南から）
4　２区東辺段差断ち割り状況（北東から）
図版12　周山城跡　遺構
1　郭５北面・西面石垣（北西から）
2　郭５西面石垣・郭６石塁（西から）
図版13　周山城跡　遺構
1　郭５北面石垣（北東から）
2　郭６北側石塁上面（西から）
3　郭６北側石塁（西から）
図版14　周山城跡　遺構
1　郭６北側石塁西面と北面石垣（西から）
2　郭６北面石垣折れ部分（北西から）

挿 図 目 次

Ⅰ　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡

図1　調査位置図 …… 1
図2　調査区位置図 …… 1
図3　調査前全景（南から） …… 2
図4　作業風景（東から） …… 2
図5　1区埋戻し及び2区重機掘削（南東から） …… 2
図6　2区埋戻し（南から） …… 2
図7　周辺の調査位置図 …… 4
図8　調査区平面図 …… 13
図9　調査区断面図 …… 14
図10　2区南壁断面図 …… 15
図11　遺物実測図・拓影 …… 17
図12　「享保六年丑十二月所司代千本屋舗絵図正扣」一部加筆（京都大学付属図書館蔵） …… 18
図13　調査地周辺変遷図（17世紀～19世紀） …… 19

Ⅱ　平安京左京三条四坊十三町跡・三条せと物や町跡

図1　調査位置図 …… 21
図2　重機搬入状況（北から） …… 22
図3　人力掘削作業状況（南東から） …… 22
図4　器材搬出状況（南西から） …… 22
図5　埋戻し風景（南西から） …… 22
図6　条坊復元・四行八門と調査位置関係・調査位置図 …… 23
図7　周辺の主要な調査事例 …… 24
図8　1区北壁断面図 …… 26
図9　1区第4面平面・各遺構断面図 …… 27
図10　1区第3面平面・各遺構断面図 …… 28
図11　1区第2面平面・各遺構断面図 …… 29
図12　1区第1面平面・各遺構断面図 …… 30
図13　2区北壁断面図 …… 31
図14　2区第5面平面・各遺構断面図 …… 32
図15　2区第4面平面・各遺構断面図 …… 33
図16　2区第3面平面図 …… 34
図17　2区第2面平面・各遺構断面図 …… 34

図18　2区第1面平面・各遺構断面図 …… 35
図19　2区第1面落込み45出土状況・拡張部東壁断面図 …… 36
図20　1区出土遺物実測図1 …… 38
図21　1区出土遺物実測図2 …… 39
図22　2区出土遺物実測図 …… 40
図23　2区落込み45出土遺物実測図1 …… 41
図24　2区落込み45出土遺物実測図2 …… 43
図25　2区落込み45出土遺物実測図3 …… 44

III　白河街区

図1　調査位置図 …… 46
図2　調査前全景（北東から） …… 47
図3　作業風景（北西から） …… 47
図4　「京町絵図細見大成」 …… 47
図5　「改正京町御絵図細見大成」 …… 47
図6　周辺の調査地点 …… 48
図7　調査区位置図 …… 50
図8　調査区北壁断面図 …… 50
図9　調査区東壁断面図 …… 51
図10　第1面平面図 …… 53
図11　第2面平面・SE139断面図 …… 54
図12　SX127・128東西断面図 …… 55
図13　第3面平面・Pit146平・断面図 …… 56
図14　SX140・141平・断面図 …… 57
図15　出土土器・陶磁器実測図1 …… 59
図16　出土土器・陶磁器実測図2 …… 60
図17　菊御紋付染付椀 …… 61
図18　出土土器・陶磁器実測図3 …… 61
図19　出土瓦実測図・拓影1 …… 63
図20　出土瓦実測図・拓影2 …… 64
図21　京都大学病院構内AJ19区平面図 …… 66

IV　山科本願寺南殿跡（第9次・第10次）

図1　調査位置図 …… 67
図2　調査区位置図 …… 68
図3　機械掘削状況（第9次）（北西から） …… 68
図4　遺構面検出状況（第9次）（北東から） …… 68

図５　既往の調査位置図 …… 71
図６　基本層序模式図 …… 72
図７　１区東壁断面図 …… 73
図８　２区東壁断面図 …… 74
図９　中央壁断面図 …… 75
図10　第１遺構面全体図 …… 76
図11　第１面遺構面遺構平・断面図 …… 77
図12　第２遺構面全体図 …… 78
図13　第２遺構面遺構平・断面図１ …… 79
図14　第２遺構面遺構平・断面図２ …… 80
図15　周辺調査遺構面接合図（室町時代後期） …… 81
図16　周辺調査遺構面接合図（近世） …… 81

Ⅴ　下三栖城跡

図１　明治時代の下三栖村 …… 83
図２　調査位置図 …… 83
図３　三栖神社（東から） …… 84
図４　三栖神社北に残る堀跡（南東から） …… 84
図５　隣地建物（南東から） …… 84
図６　調査前風景（南から） …… 84
図７　調査区位置図 …… 85
図８　埋戻し風景（北東から） …… 85
図９　調査区断面図 …… 86
図10　調査区平面図 …… 87
図11　建物１平面・エレベーション図 …… 88
図12　SX２平・断面図 …… 89
図13　出土遺物実測図 …… 91
図14　当該地における堀の推定線 …… 92

Ⅵ　周山城跡

図１　周山城跡と周辺城郭関係遺跡位置図 …… 93
図２　調査前全景（北西から） …… 94
図３　調査前全景（北西から） …… 94
図４　石垣清掃作業風景（北西から） …… 94
図５　石垣清掃作業風景（北から） …… 94
図６　周山城跡縄張図 …… 95
図７　石材採寸図 …… 98

図８　遺構位置図 …… 99
図９　宝篋印塔検出（北から） …… 99
図10　測量石垣・石塁平・立面図 …… 100
図11　郭５北面石垣Ａ－Ｂ平・立面図 …… 101
図12　郭５北面石垣Ｂ－Ｃ立面図 …… 102
図13　郭５北面石垣Ｂ－Ｃ平面図 …… 103
図14　郭５西面石垣Ｃ－Ｄ平・立面図 …… 104
図15　郭６北側石塁Ｃ－Ｅ・Ｅ－Ｆ平・立面図 …… 105
図16　郭６北側石塁Ｆ－Ｇ平・立面図 …… 106
図17　郭６北側石塁Ｇ－Ｈ・Ｈ－Ｉ平・立面図 …… 107
図18　郭６北面石垣Ｉ－Ｊ平・立面図 …… 108
図19　断面図 …… 109
図20　軒平瓦実測図 …… 110
図21　宝篋印塔基礎部分実測図 …… 110
図22　補修箇所立面図（郭５西面石垣Ｃ－Ｄ間） …… 111
図23　補修箇所１（補修前）（北西から） …… 111
図24　補修箇所１（補修後）（西から） …… 111
図25　補修箇所２（補修前）（西から） …… 111
図26　補修箇所２（補修後）（西から） …… 111
図27　Ｅ－Ｃ－Ｄ間立面概念図 …… 112

表　目　次

Ⅰ　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡
表１　周辺調査一覧表 …… 5
表２　遺構概要表 …… 15
表３　遺物概要表 …… 16
Ⅱ　平安京左京三条四坊十三町跡・三条せと物や町跡
表１　調査事例一覧 …… 24
表２　遺構概要表 …… 37
表３　遺物概要表 …… 38
Ⅲ　白河街区跡
表１　遺構概要表 …… 52
表２　遺物概要表 …… 58

Ⅳ　山科本願寺南殿跡（第９次・第 10 次）

表１　既往の調査一覧 …… 70
表２　遺構概要表 …… 80
表３　遺物概要表 …… 80

Ⅴ　下三栖城跡

表１　遺構概要表 …… 85
表２　遺物概要表 …… 90

Ⅵ　周山城跡

表１　周山城跡及び丹波国関連年表 …… 96
表２　遺構概要表 …… 99
表３　遺物概要表 …… 110

Ⅰ　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡

図１　調査位置図（１：5,000）

１．調査経過

（１）調査に至る経緯

調査地は上京区中務町486-9にあたり，周知の埋蔵文化財包蔵地である，平安宮跡及び聚楽遺跡に該当する。ここに個人住宅兼共同住宅建設が計画され，令和３年７月30日に文化財保護法第93条第１項に基づく届出が行われた。これに対し文化財保護課は，計画敷地が内裏内郭南面回廊の推定地にあたることから，遺構の遺存状況を把握する必要があると判断し，国庫補助による発掘調査を指導した。

（２）調査の経緯

調査区は廃土置き場などを確保するために南北に分けた（１・２区）。敷地中央から北側に東西約８m，南北約６mの１区，中央から南側に東西約８m，南北約4.6mの２区を設定した。また，調査の進展に合わせて１区と２区の間に拡張区を設けた。調査面積は合計で約88㎡である。なお，１区は回廊から外郭にかけて，２区は外郭までの空閑地にあたる（図２）。

調査は2021年９月３日より機材搬入などの準備を開始し，６日から機械掘削により現代盛土を除去した。調査区北西隅で地山を確認し遺構面と認識したが，ほぼ全域が土取りであることが明らかになった。９月14日に１区の埋め戻し及び２区を機械掘削により現代盛土の除去を行ったところ，地山ブロックを含む非常に硬く締まった面を確認した。この面を整地面と認識して調査を進めたが，１区と同様に土取りであることが明らかになった。土取穴の堆積状況を把握するために２区南端を断割った。また，１区と２区の土取りの関係を把握するため１区南東から２区北東にかけて拡張した（拡張区）。９月30日から10月１日にかけて２区を埋め戻し，同月６日に調査を終えた。

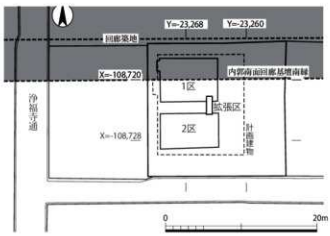


図２　調査区位置図（１：500）

2．遺　跡

（1）地理的環境

内裏は京都盆地北部に位置し，船岡山から南へ張り出す丘陵地の先端部に置かれている。調査地周辺は粘土やシルトが基盤となり，特に黄色から黄褐色を呈す精良なシルト混じりの細砂層（聚楽土）が分厚く堆積していることから，洪水の被害を受けにくい土地であったとされている[1]。

当該地は北側及び西側隣接地より一段低く，最大で約２mの高低差がある。この高低差は北側の下立売通が近世以降の主要道路であり，道路に面した土地が繰り返し利用されることによって厚く造成されたためと考えられる。下立売通に面した調査51では，現況地表下約0.7ｍで中世耕作土，1.1ｍ（標高46.4ｍ）で平安時代の遺構面を検出しており，中世以降の造成を裏付ける。

（2）歴史的環境

内裏は平安宮中央やや東よりに位置する。宮内の諸施設の中で最も早く造営が進み，桓武天皇が遷御した延暦13年（794）10月22日には完成していたとされる。陽明文庫などに伝わる「内裏図」によれば，内裏は外郭築地と内郭回廊の二重構造で区画され，内郭には紫宸殿や仁寿殿，常寧殿などが置かれた。外郭は東西73丈（約219ｍ），南北100丈（約300ｍ）あり，内郭はひと回り小さい東西57丈（約171ｍ），南北72丈（約216ｍ）と考えられている[2]。

天徳４年（960）９月23日に宣陽門からの出火により，内郭の建物がほぼ全焼する。直ぐに新造工事が開始され，翌年（961）には再建された。以後，内裏は安貞元年（1227）の焼失までに

図３　調査前全景（南から）

図４　作業風景（東から）

図５　１区埋戻し及び２区重機掘削（南東から）

図６　２区埋戻し（南から）

十数回の罹災と再建を繰り返す。内裏の再建は火災後からおおよそ２年以内には行われていたが，天喜６年（1058）の焼亡後の再建には13年もの月日を要し（延久３年（1071）再建），康和２年（1100）の再建は焼亡から18年経過している。また，保元２年（1157）に藤原通憲（信西）によって内裏・大極殿院・朝堂院などの宮内の主要施設が再建され，後白河天皇が75年ぶりに還幸した。翌年に即位した二条天皇も一旦内裏に入るが，平治の乱により里内裏に遷る。文治５年（1189）３月13日には，後白河法皇が源頼朝に内裏の修造を命じ，同年12月３日には完成するが，後鳥羽天皇は内裏に還幸せずに，平安京内の里内裏に常住する。内裏には儀式などが行われる際にのみ赴き，徐々に内裏が儀式・儀礼の場としての意味を強めていく。

承久元年（1219）７月13日には後鳥羽上皇が内裏の昭陽舎を住居としていた源頼茂を討ち，その際に仁寿殿が放火された。翌年（1220）には再建が開始し，殿舎門廊の上棟を行うが，承久の乱により中断する。その６年後の安貞元年に京内で出火した火災が造営途中の内裏に及び，以後再建されることなく廃絶する。

『吾妻鏡』には「在京御家人、令乗車往反洛中事、又不憚大内舊蹟以内野用馬場事、傍依有其恐可停止之由、今日被仰下」（『吾妻鏡』天福元年（1233）五月十九日条）とあり，宮内（大内）が「内野」と呼ばれ，馬場として使用される野原となっていたことが記録されている。ただし，朱雀門や太政官・真言院などでは儀礼などが執り行われており，一部の施設は維持されている。多くの施設が再建されず荒廃した平安宮内（内野）であったが，中世を通して国家的儀式祭礼の重要な場として認識され続けている。

天正14年（1586），豊臣秀吉が「内野」に聚楽第を築城すると，その周辺に大名屋敷や町家が集められ，「内野」の再開発が始まる。文禄４年（1595）に聚楽第が破却されるが，慶長８年（1603）に徳川家康によって二条城が築城されると，その北側に西国支配の最高機関である京都所司代が置かれる。なかでも内裏の一部は，京都所司代下屋敷（以下，下屋敷と称す。）地となる。また，17世紀初頭の京都の様相を描いたとされる「京都図屏風」には，下立売通・出水通が内野に延長され，道路に面して町家が建ち並んでいる。その後の絵図には「内野」の至る所に道路が敷設され町家が建ち並ぶ様相が描かれており，都市化が進んでいく様相が分かる。

（３）既往の調査（図７・表１）

これまでに内裏跡及びその周辺で実施された調査成果については図７・表１にまとめた。本節では，回廊跡に関わる調査について述べる。

これまでに回廊跡及び諸門跡に関する調査は30箇所（2-1～3，3，12，13，17-1・2，37，42，57，67-1～3・12～14，73，78，92，101，105，107，108，132，136，133，159，170，172）で実施されている。初めて回廊に関する遺構が確認されたのは，1963年に下立売通で行われた下水道工事に伴う立会調査である（調査2-2・3）。２地点で凝灰岩列（基壇化粧）と凝灰岩列に並走する溝（雨落溝），基壇土などを検出するとともに，これらの遺構が隣接地に展開していることが明らかにされた。この成果を受け，1969年に凝灰岩列を確認した地点の南側敷地に

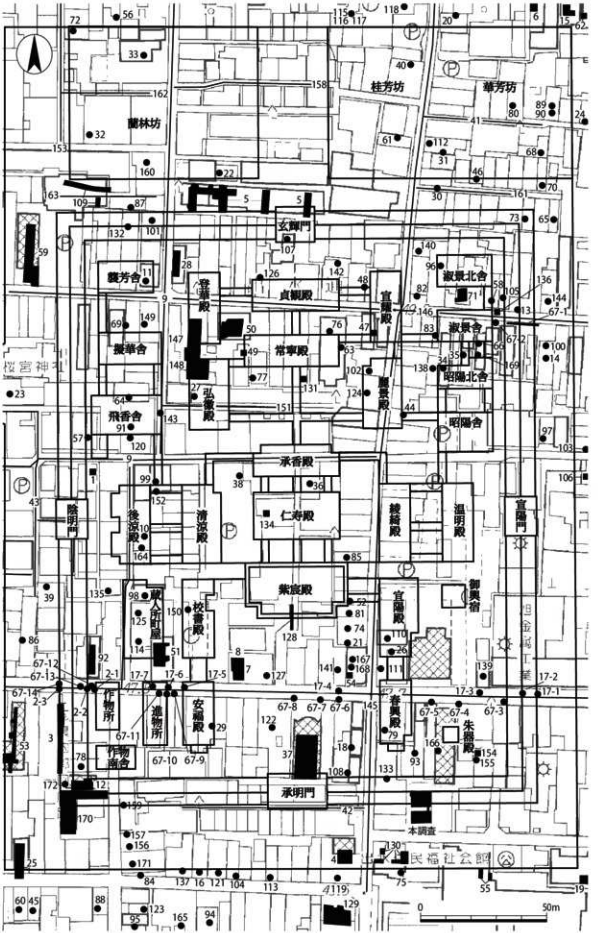


図7　周辺の調査位置図（1：1,500）

表1　周辺調査一覧表

調査番号	推定地	方法記号	調査期間・(機関)	主要遺構・遺物	備考	文献
1	飛香舎（南）	試掘	1960/8/20 (古協)	平安の整地層		1
2	西面回廊	立会	1963/9～64/3 (古協)	平安前期の基壇・雨落溝，集石遺構	基壇西縁・東縁，作物所西雨落溝？	1
3		発掘	1969/2/10～20, 1973/8/4～9/2 (古協)	平安後期の基壇・雨落溝，中世の敷石列	西面回廊基壇西縁，基壇幅が 10.5m と推定	2
4	南外郭	発掘	1974/7 (市保護課)	GL-1.35m まで土取穴		3
5	蘭林坊（南）	発掘	1974/7/25～9/10 （平博）	平安前期の東西溝	蘭林坊南側溝	4
6	北外郭（外）	試掘	1976/11/9～20	GL-0.8m まで盛土，中近世の土器類		31
7・8	南庭	発掘	1977/10/13～20, 1978/1/17～2/15	平安後期の集石遺構，江戸後期の井戸・土坑 奈良時代の遺物		5・31
9	外郭－内郭	立会 HKQQ	1978/6/7～8/24	平安時代遺物包含層		31
10	後涼殿	立会 HQ013	1979/4/7	－		6
11	襲芳舎	立会 HQ031	1979/4/17・18	GL-1.02m で平安の柱穴・土坑・凝灰岩 平安前期～中期の土器類・瓦		6
12	南面回廊	発掘	1980/1/5～14	GL-0.7 m で平安後期の基壇・石組溝，-0.96 m で柱穴	南面回廊暗渠	7
13	東面回廊	立会 HQ533	1980/2/23	－		6
14	東外郭	立会 HQ556	1980/3/4	－		6
15	北外郭（外）	発掘 HKZO	1980/4/14～26	GL-1.2m で近世から現代にかけての井戸・土坑		8
16	南外郭築地	立会 HQ6	1980/4/18	－		9
17	東面回廊－進物所	立会	1980/11/12～1981/2/6	瓦敷き遺構 (17-1)，凝灰岩 (17-2・3・4)，石組溝 (17-5・6)，溝状遺構 (17-7)	内郭東面回廊基壇・整地，進物所と安福殿の間の溝，安福殿西溝	31
18	春興殿（西）	立会 HQ002	1981/4/7	盛土のみ		10
19	南外郭（外）	試掘 HQ017	1981/5/25	GL-0.9m で平安中期の土坑 1 基		10
20	北外郭（外）	立会 HQ020	1981/5/28	盛土のみ		10
21	南庭	立会 HQ030	1981/7/13	盛土のみ		10
22	蘭林坊	立会 HQ032	1981/7/28	検出なし		10
23	西外郭	立会 HQ078	1982/3/11	盛土のみ		10
24	東外郭（外）	立会 HQ081	1982/3/24	盛土のみ		10
25	南外郭築地	発掘	1982/8/4～12	GL-0.1～0.4 mで平安の遺物包含層，-0.3～0.6 mで地山，平安前期・後期の土坑，近世の土取穴	奈良～平安の土器類，平安土馬出土	11
26	宣陽殿	立会 HQ047	1982/8/27・30	盛土のみ		12
27	弘徽殿	立会 HQ068	1983/1/10	盛土のみ		12
28	登華殿（北西）	試掘	1983/3/7～18	平安前期の溝（幅 0.8，深さ 0.15 m），平安の土坑	白土を塗った土師器が出土	13
29	安福殿	立会 HQ087	1983/3/30	盛土のみ		12
30	桂芳坊（南）	立会 HQ010	1983/5/28	盛土のみ		14
31	桂芳坊	立会 HQ029	1983/8/30	盛土のみ		14

32	蘭林坊	立会 HQ056	1983/12/12	盛土のみ		14
33		立会 HQ062	1984/1/26・27	盛土のみ		15
34	昭陽北舎	立会 HQ014	1984/7/14	盛土のみ		15
35		立会 HQ016	1984/7/23	巡回時工事終了		15
36	承香殿（南）	立会 HQ045	1984/11/6	巡回時工事終了		15
37	承明門	発掘	1984/12/14～1985/1/21	奈良の堅穴建物，平安の門・地鎮遺構・白砂の敷土，安土桃山の門，江戸の井戸・土坑	承明門関連遺構・武家屋敷の門	17
38	承香殿（西）	立会 HQ070	1984/12/24	盛土のみ		15
39	西外郭	立会 HQ039	1985/8/5	盛土のみ		16
40	桂芳坊	立会 HQ059	1985/10/18	巡回時工事終了		16
41	華芳坊	立会 HQ065	1985/11/6・7・14	検出できず		16
42	南面回廊	立会 HQ087	1986/1/24・25・30	GL-0.3 m以下江戸・時期不明の包含層，-0.55mで凝灰岩４個		18
43	西外郭	立会 HQ090	1986/1/31～2/4	掘乱のみ		18
44	麗景殿	立会 HQ016	1986/6/10	盛土のみ		18
45	南外郭（外）	立会 HQ034	1986/9/5	盛土のみ		18
46	華芳坊	立会 HQ046	1986/10/21	盛土のみ		18
47	宣耀殿	試掘 HQ009	1987/5/15	GL-0.24mで江戸の整地層		19
48	宣耀殿（西）	立会 HQ028	1987/7/9	盛土のみ		19
49	常寧殿	試掘 HQ034	1987/8/4	GL-0.5mで平安後期の遺物包含層，-1.1m以下で平安中期の遺物包含層，-1.5m以下で凝灰岩残欠を多量に含む層		19
50	登華殿（東）	発掘	1987/8/12～9/12	GL-0.2 mで江戸の柱穴・井戸など，中世の土坑（H=47.72 m），平安中期の溝・土坑（H=46.76 m）	天徳４年の火災処理土坑	20-1
51	蔵人所町屋	発掘	1987/8/24～9/30	GL-0.3 mで江戸の土坑・柱穴，-0.7 mで中世耕作土（H=46.8 m），-1.1 mで平安中期の礎石建物，前期の基壇状の高まり，石敷雨落溝，溝	蔵人町屋関係遺構（H＝46.4～46.5）	20-2
52	紫宸殿	立会 HQ054	1987/9/29	検出できず		19
53	西外郭築地	試掘 HQ089	1987/10/30～11/11	GL-1.0m で南北溝２条及び築地状整地層，（溝幅 1.8-2.0 m，深さ 0.4 m），平安の土器類・瓦		19
54	南庭	試掘 HQ066	1987/11/9	GL-0.7m で江戸の整地層・土坑		19
55	南外郭築地	試掘 HQ069	1987/12/7	GL-0.5m 以下，江戸の遺物包含層		19
56	北外郭（外）	立会 HQ078	1988/1/21	検出できず		21
57	西面回廊	立会 HQ088	1988/2/26	盛土のみ		21
58	淑景北舎（南）	立会 HQ096	1988/3/25	検出できず		21
59	西外郭	発掘	1988/5/12～6/2	GL-0.2-0.3 mで平安の土坑５基を検出，平安の土器・瓦		22
60	南外郭（外）	立会 HQ043	1988/8/6	GL-0. 15m 以下，平安・江戸の遺物包含層各１，平安の整地層		21
61	桂芳坊	立会 HQ047	1988/8/22	盛土のみ		21
62	北外郭（外）	試掘 HQ057	1988/9/21	検出できず		21
63	常寧殿（東）	立会 HQ088	1989/2/27	盛土のみ		23
64	飛香舎	立会 HQ090	1989/3/23	掘削なし		23

65	東外郭	立会 HQ015	1989/5/31	盛土のみ		23
66	淑景舎（南）	立会 HQ019	1989/6/7	GL-0.3m 以下，江戸の遺物包含層		23
67	東面・西面回廊・作物所・遺物所	立会	1989/8/3 ～ 9/30	基壇状遺構（67-3・12），石敷遺構（67-2），雨落溝状遺構（67-5），火災処理土坑（67-4），白砂の化粧土（67-6 ～8），土器溜り（67-9・13），暗渠（67-10），石敷雨落溝（67-1），凝灰岩抜取穴（67-12），凝灰岩（67-14），整地層（67-1）	遺構検出地点については，文 55 を参照	24・55
68	華芳坊	立会 HQ045	1989/9/25	盛土のみ		23
69	擬華舎（北）	立会 HQ048	1989/10/4	盛土のみ		23
70	華芳坊（南）	立会 HQ052	1989/10/19	盛土のみ		23
71	淑景北舎（南）	試掘・発掘 HQ073	1990/1/31・2/13 ～ 26	GL-1.4 mで平安の土坑・集石遺構		25-1
72	北外郭	立会 HQ004	1990/4/9	盛土のみ		25-2
73	北面回廊	立会 HQ021	1990/5/28	盛土のみ		25-2
74	南庭	立会 HQ056	1990/9/5	検出できず		25-2
75	南外郭築地	立会 HQ057	1990/9/7	盛土のみ		25-2
76	常寧殿（北）	立会 HQ069	1990/10/22	GL-0.53m 以下，時期不明の遺物包含層		25-2
77	常寧殿（南）	立会 HQ078	1990/11/15	盛土のみ		25-2
78	西面回廊	立会 HQ014	1991/4/16	検出できず		26
79	春興殿	立会 HQ082	1991/6/4	盛土のみ		26
80	華芳坊	立会 HQ150	1991/7/31	盛土のみ		26
81	南庭	立会 HQ232	1991/10/15	盛土のみ		26
82	宣耀殿（東）	立会 HQ061	1992/5/15・19	盛土のみ		27
83	淑景舎（西）	立会 HQ178	1992/8/26・27	盛土のみ		27
84	南外郭（外）	立会 HQ321	1992/12/24	盛土のみ		27
85	襲芳殿北東	立会 HQ412	1993/3/19	盛土のみ		28
86	西外郭	立会 HQ160	1993/8/2	巡回時工事終了		28
87	麗林坊（南）	立会 HQ230	1993/9/24・10/5	検出できず		28
88	南外郭（外）	立会 HQ246	1993/10/5・12	GL-0.34m にて平安の遺物包含層		28
89	華芳坊	立会 HQ264	1993/10/20・21	盛土のみ		28
90		立会 HQ302	1993/11/17・19	盛土のみ		28
91	飛香舎	立会 HQ327	1993/12/2	盛土のみ		28
92	西面回廊	発掘	1994/6/1 ～ 7/4	GL-0.55 mで平安後期の遺物包含層，-0.9 mで平安中期の基壇・石列・雨落溝・焼土層，平安前期の基壇・雨落溝（H=46.7 m）	回廊基壇と内側の溝 2 時期の変遷と埋没状態を確認	30
93	春興殿（南）	立会 HQ283	1994/10/5 ～ 14	GL-1.13m で平安初頭～後期の遺物包含層		29
94	南外郭（外）	立会 HQ394	1994/12/12	盛土のみ		29
95		立会 HQ393	1994/12/13・14・26, 1995/1/5	GL-0.25m 以下，平安前期の遺物包含層，整地層，土坑，平安前期～中期の遺物包含層		32
96	淑景北舎	立会 HQ494	1995/3/8・24	GL-1.28m で江戸の遺物包含層		32

97	西外郭	立会 HQ185	1995/8/1・2	盛土のみ		32
98	蔵人所町屋	立会 HQ251	1995/9/19・20	盛土のみ		32
99	後涼殿（北）	立会 HQ271	1995/10/6・9	盛土のみ		32
100	東外郭	立会 HQ156	1996/7/5	GL-0.35m まで盛土		33
101	北面回廊	立会 HQ179	1996/7/29・31	GL-0.3m で時期不明の遺物包含層		33
102	朝堂殿	立会 HQ288	1996/10/9	GL-0.2m まで盛土		33
103	東外郭（外）	立会 HQ495	1997/3/5・6	GL-0.3m まで盛土		34
104	南外郭（外）	立会 HQ533	1997/3/27・28	GL-0.9m まで褐色泥砂礫混り層の無遺物層か		34
105	東面回廊	立会 HQ205	1997/8/11	巡回時工事終了		34
106	東外郭（外）	試掘 HQ27	1997/12/8	聚楽第堀跡か？，平安の軒瓦，近世の土器		35
107	玄輝門	立会 HQ433	1998/2/3	GL-0.2m まで盛土		36
108	南面回廊	HQ451	1998/2/16	GL-0.4m まで盛土		36
109	蘭林坊（南）	試掘	1999/3/26（市保護課）	深さ 1.5m 以上，幅 2.7m 以上の南北方向の堀状遺構，一部，GL-1.0 m で聚楽土（地山）	聚楽第西堀	38
110	宣陽殿	立会 HQ072	1999/5/28	GL-0.34m で近世の遺物包含層		37
111	春興殿（北西）	立会 HQ084	1999/6/8 ～ 11	GL-0.35 m で地山，GL-0.92m で近世の遺物包含層		37
112	桂芳坊	立会 HQ088	1999/6/14・15	巡回時工事終了		37
113	南外郭（外）	立会 HQ335	1999/12/15	GL-0.25m で褐色砂礫		37
114	蔵人所町家	立会 HQ263	2000/12/1	GL-0.2m まで盛土		39
115	北外郭（外）	立会 HQ108	2001/7/2 ～ 23	巡回時工事終了		40
116		立会 HQ109	2001/7/2 ～ 23	巡回時工事終了		40
117		立会 HQ110	2001/7/2 ～ 23	巡回時工事終了		40
118		立会 HQ147	2001/8/3	GL-0.2m まで現代盛土		40
119	南外郭（外）	立会 HQ260	2001/11/13 ～ 16	巡回時工事終了		40
120	飛香舎	立会 HQ387	2002/3/12	GL-0.26m で時期不明の遺物包含層		41
121	南外郭築地	立会 HQ106	2002/7/2・3，15・16	GL-0.3m で時期不明の整地層		41
122	南庭	立会 HQ373	2005/3/4，7 ～ 9	GL-0.55m まで盛土		42
123	南外郭（外）	立会 HQ409	2006/2/22	GL-0.36m まで盛土		43
124	朝堂殿	立会 HQ245	2006/9/1	GL-0.3m まで盛土		43
125	蔵人所町屋	立会 HQ260	2006/9/8・11	GL-0.14m で江戸後期の遺物包含層		43
126	貞観殿（北）	立会 HQ417	2006/12/11	GL-0.37m まで盛土		43
127	南庭	立会 HQ068	2008/6/2 ～ 5	GL-1.22m まで盛土		44
128	紫宸殿	試掘 № 33	2008/6/30（市保護課）	GL-2.3m まで江戸～現代盛土		45
129	南外郭（外）	発掘	2009/1/27 ～ 2/26	GL-0.1 ～ 0.5m で平安中・後半から鎌倉時代の整地層（H=45.5 m）		48-1
130	南外郭	発掘	2009/6/22 ～ 7/3	GL-2.4m 以上土取穴		48-2
131	常寧殿（南）	試掘 No.29	2009/7/10（市保護課）	GL-2m まで掘削，近世以降の撹乱		47

132	北面回廊	立会 HQ295	2009/11/2	巡回時工事終了		46
133	南面回廊	立会 HQ409	2010/2/9	GL-0.24m まで盛土		49
134	仁寿殿	試掘 No.1	2010/3/5 (市保護課)	GL-0.95m で平安の整地層		50
135	蔵人所町屋（西）	立会 HQ028	2010/4/21	GL-0.3m で近代以降の遺物包含層		49
136	淑景舎（東）	試掘 No.31	2011/12/8 (市保護課)	GL-2.0-2.3m まで盛土		51
137	南外郭築地	立会 HQ406	2012/3/13	GL-0.27m で褐色砂泥		52
138	昭陽北舎（西）	立会 HQ040	2012/5/10	GL-0.35m まで盛土		52
139	朱雀殿（北東）	立会 HQ116	2012/6/29	巡回時工事終了		52
140	宣耀殿（北東）	立会 HQ224	2012/9/19	GL-0.4m まで盛土		52
141	南庭	立会 HQ024	2014/4/17 (市保護課)	GL-0.2m まで盛土		53
142	貞観殿（北）	立会 HQ123	2014/7/4 (市保護課)	GL-0.2m まで盛土		53
143	飛香舎	立会 HQ332	2014/12/3 ～ 5・8 (市保護課)	GL-1.0m まで盛土		53
144	東外郭	立会 HQ027	2015/4/14 (市保護課)	GL-0.4m まで盛土		54
145	南北－東西横断	立会 HQ092	2015/5/19・20・22・28 (市保護課)	GL-1.0m まで盛土		54
146	東外郭－西外郭	立会 HQ120	2015/6/9・16・18・22・26 (市保護課)	GL-1.2m まで盛土，-1.3 mまで褐色シルト		54
147	登華殿・弘徽殿	発掘	2015/6/29 ～ 8/17	GL-0.6 mで近世の整地層，-0.7 mで近世初頭の整地層，-0.85 mで鎌倉の整地層，-0.95 mで平安後期の整地層，-1.05 mで基盤層，平安前期の建物跡，平安中期以降の雨落溝，平安後期の基壇状高まり	登華殿雨落溝 (H=47.8 m)	55
148		立会 HQ356	2015/11/24・25, 12/11・14 ～ 18・21・24 (市保護課)	GL-1.04 mまで盛土		54
149	襲華舎（北）	立会 HQ032	2016/4/21 (市保護課)	GL-0.2m まで盛土		56
150	校書殿	立会 Q281	2016/9/12・14 (市保護課)	GL-0.58m まで盛土		56
151	弘徽殿	立会 HQ405	2016/11/22 ～ 28 (市保護課)	巡回時工事終了		56
152	後涼殿（北東）	立会 HQ406	2016/11/24 (市保護課)	GL-0.17m まで盛土		56
153	麗林坊（西）	立会 HQ416	2016/11/29 ～ 12/1 (市保護課)	GL-0.8m まで盛土		56
154	朱雀殿（南）	試掘 No 1	2017/2/10 (市保護課)	GL-0.5m で平安の遺物包含層 (整地層か)		58
155		立会 HQ007	2017/4/5 (市保護課)	GL-0.2m まで盛土		57
156	南外郭	立会 Q463	2017/12/4 (市保護課)	GL-0.45m まで盛土		57
157	南外郭	立会 HQ011	2018/4/9 (市保護課)	GL-0.15m ～ 0.26m で暗褐色泥砂		59
158	麗林坊	立会 HQ017	2018/4/10 ～ 20 (市保護課)	GL-0.7m まで盛土		59
159	南面回廊	立会 HQ080	2018/5/14 (市保護課)	GL-0.4m まで盛土		59
160	麗林坊	立会 HQ097	2018/5/22 (市保護課)	巡回時工事終了		59
161	華芳坊（南）	立会 HQ344	2018/10/17 (市保護課)	GL-0.5m まで盛土		59
162	麗林坊	立会 HQ357	2018/10/24 ～ 11/7 (市保護課)	GL-0.6m まで盛土		59
163	麗林坊（南）	立会 HQ383	2018/11/7・8 (市保護課)	GL-0.4m まで盛土		59

164	後涼殿	立会 HQ413	2018/11/28・29（市保護課）	GL-0.4m まで盛土		59
165	南外郭（外）	立会 HQ425	2018/12/6・7（市保護課）	GL-0.42m でにぶい黄褐色泥砂		59
166	朱器殿（南）	立会 HQ590	2019/3/22（市保護課）	GL-0.5m まで盛土		60
167	南庭	立会 HQ067	2019/5/22・23（市保護課）	GL-0.5m まで盛土		60
168		立会 HQ068	2019/5/22～27（市保護課）	GL-0.4m まで盛土		60
169	昭陽北舎（北）	立会 HQ080	2019/5/27（市保護課）	GL-0.2m まで盛土		60
170	南面回廊	発掘	2019/7/29～11/14（市保護課）	平安後期の石組溝（H=46.2 m）	南面回廊暗渠	61
171	南外郭	立会 HQ386	2019/11/6（市保護課）	GL-0.2m まで盛土		60
172	西面回廊	立会 HQ579	2020/2/19（市保護課）	GL-0.65m まで盛土		62

推定地（　）は隣接地からの方角を示す。
機関　無記入：(財) 京都市埋蔵文化財研究所　市保護課：京都市文化財保護課　古協：(財) 古代学協会　平博：平安博物館

文献（表１　内裏跡発掘調査一覧表の文献番号に対応）

1　大石良材「平安宮内裏址の調査」『平安博物館研究紀要』第３輯 (財) 古代學協會 1971 年

2　伊藤玄三ほか「平安宮内裏内郭回廊推定地の調査」『平安博物館研究紀要』第３輯 (財) 古代學協會 1971 年、甲元真之ほか「平安宮内裏内郭回廊跡第２次調査」『平安博物館研究紀要』第６輯 (財) 古代學協會1976 年

3　梶川敏夫『平安宮跡』京都市埋蔵文化財年次報告 1974-１京都市文化観光局文化財保護課 1975 年

4　寺島孝一ほか「平安宮推定内裏藺林坊跡発掘調査の概要」『古代文化』第 27 巻第 11 号　(財) 古代學協會1975 年

5　平田泰『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978－Ⅱ (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1978 年

6　京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告 昭和 54 年度』1980 年

7　上村和直「Ｘ平安宮内裏内郭回廊跡」『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 』京都市文化観光局 1980 年

8　磯辺勝「平安宮梨木院跡」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981 年

9　(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財センター 1981 年

10　(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982 年

11　大矢義明ほか「第１章内裏外郭跡」『平安京跡発掘調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983 年

12　(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983 年

13　平尾政幸「２内裏内郭回廊跡」『昭和57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1984 年

14　(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984 年

15　(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985 年

16　(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986 年

17　梅川光隆『Ⅳ平安宮内裏』『平安京跡発掘調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986 年

18　(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987 年

19　(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』京都市文化観光局 1988 年

20-1　丸川義広・鈴木久男「Ⅳ平安宮内裏（1）」『昭和62年度 平安京跡発掘調査概報』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1998 年

20-2　梅川光隆「Ⅴ 平安宮内裏（2）」『昭和62年度 平安京跡発掘調査概報』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1998 年

21　(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989 年

22　網伸也・鈴木久男「Ⅲ平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989 年

23　(財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990 年

24　河村雅章ほか「Ⅱ平安宮跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994 年

25-1　家崎孝治「Ⅲ 平安宮内裏跡（元年度HQ73）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成２年度』京都市文化観光局 1991 年

25-2　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成２年度』京都市文化観光局 1991 年
26　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成３年度』京都市文化観光局 1992 年
27　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成４年度』京都市文化観光局 1993 年
28　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成５年度』京都市文化観光局 1994 年
29　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成６年度』京都市文化観光局 1995 年
30　山本雅和「Ⅰ平安宮内裏内郭回廊」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成６年度』京都市文化観光局 1995 年
31　(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 13 冊 1995 年
32　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成７年度』京都市文化市民局 1996 年
33　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成８年度』京都市文化市民局 1997 年
34　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成９年度』京都市文化市民局 1998 年
35　馬瀬智光「Ⅱ平安宮跡・聚楽第跡 №27，60」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成９年度』京都市文化市民局 1998 年
36　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』京都市文化市民局 1999 年
37　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成 11 年度』京都市文化市民局 2000 年
38　馬瀬智光「Ⅱ平安宮跡・聚楽第跡 №１」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 11 年度』京都市文化市民局 2000 年
39　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成 12 年度』京都市文化市民局 2001 年
40　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成 13 年度』京都市文化市民局 2002 年
41　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査概報 平成 14 年度』京都市文化市民局 2003 年
42　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査報告 平成 17 年度』京都市文化市民局 2006 年
43　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査報告 平成 18 年度』京都市文化市民局 2007 年
44　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡立会調査報告 平成 20 年度』京都市文化市民局 2009 年
45　堀大輔「Ⅱ-2 平安宮築宸殿跡・聚楽遺跡№33」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 20 年度』京都市文化市民局 2009 年
46　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡詳細分布調査報 平成 21 年度』京都市文化市民局　2010 年
47　京都市文化市民局文化財保護課『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 21 年度』2010 年
48-1　布川豊治・辻裕司「Ⅰ平安宮内裏跡・聚楽遺跡１」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 21 年度』京都市文化市民局 2010 年
48-2　柏田有香「Ⅱ平安宮内裏跡・聚楽遺跡２」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 21 年度』京都市文化市民局 2010 年
49　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 22 年度』京都市文化市民局 2011 年
50　京都市文化市民局文化財保護課『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 22 年度』2011 年
51　京都市文化市民局文化財保護課『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 23 年度』2012 年
52　(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 24 年度』京都市文化市民局 2013 年
53　京都市文化市民局文化財保護課『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 26 年度』2015 年
54　京都市文化市民局文化財保護課『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 27 年度』2016 年
55　近藤奈央『平安宮内裏跡・聚楽第跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-6（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2015 年
56　京都市文化市民局文化財保護課『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 28 年度』2017 年
57　京都市文化市民局文化財保護課『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 29 年度』2018 年
58　京都市文化市民局文化財保護課『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 29 年度』2012 年
59　京都市文化市民局文化財保護課『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 30 年度』2019 年
60　京都市文化市民局文化財保護課『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和元年度』2020 年
61　黒須亜希子「Ⅰ平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 2020 年
62　京都市文化市民局文化財保護課『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和２年度』2020 年

おいて発掘調査が行われ，道路から連続する凝灰岩列と基壇，雨落溝を検出した（調査３）。凝灰岩列は地覆石と羽目石からなる基壇化粧で，地覆石が３個，羽目石が７個残されていた。地覆石にある羽目石用の欠き込みと羽目石の位置が一致しないこと，基壇土に焼土と土器・瓦片が含まれていることから，基壇が創建期のものではないと推測している。また，調査２-１・３で検出した凝灰岩列（基壇化粧）が基壇西縁に，調査２-２で検出した凝灰岩列が基壇東縁にあたるとし，基壇幅が10.5ｍ（≒約3.5丈）であると想定した。西面回廊は調査92でも良好な状態の基壇東縁と雨落溝を検出し，調査２と同様に基壇が修築されていること，天徳４年に火災の被害にあっていることが確認された。また，西面回廊の内郭側の雨落溝が，側面と底部に河原石を敷いた構造であることも明らかになった。さらに，調査12において南面回廊を横断するための暗渠となることが明らかにされている。東面回廊は調査17-1，67-3で基壇東西両縁（凝灰岩），67-2で雨落溝，67-1，17-2で基壇整地土と瓦敷遺構，南面回廊は調査42において基壇化粧と推測される凝灰岩列を確認している。北面回廊はこれまでに玄輝門を含めて，明確な遺構は確認されていない。

回廊中央に設けられた門のうち，南門にあたる承明門は発掘調査によって基壇北縁雨落溝と地鎮遺構が確認されている（調査37）。雨落溝は新旧２時期あり，旧時期の溝が凝灰岩の切石を並べたもので，平安宮創建期に比定されている。新時期は旧時期よりも北側に0.6ｍ移動しており平安時代中期後半に修造されたと考えられている。また，雨落溝の北側で時期の異なる４基の地鎮遺構が確認されている。遺構は南北一直線に並び，密教法具などが出土した。なお，内郭回廊は平城宮と同じく棟筋に築地をもつ複廊で，築地の基底幅４尺（≒1.2ｍ），両柱間８尺（≒2.4ｍ），合計20尺（≒６ｍ）で復元されている[3)]

3．遺　構（図８～11・図版１）

（１）基本層序

現地表は南側で標高45.18ｍ，北側で標高45.6ｍと北から南へ緩やかに傾斜する。また，駐車場であったことから敷地全域に厚さ0.3ｍの砕石が敷かれている。基本層序は１区が北壁，２区が南壁を代表として述べる。

１区は地表下0.7ｍで近世整地層，1.0ｍで土取穴２埋土，1.45ｍで明黄褐色シルトの地山となる。また，調査区北西端のみ現代盛土直下の地表下0.56ｍで地山となる（図９-１区西壁6-1層）。地山は灰黄褐色，にぶい黄橙色，明黄褐色シルトと下位に向かって徐々に土色が変化する。

２区は地表下0.25ｍで近世整地層，0.75ｍで土取穴５埋土上層，1.6ｍで土取穴５埋土下層，1.1～2.4ｍで地山となる。なお，土取穴については，掘削深度が深く安全面を考慮して完掘していない。

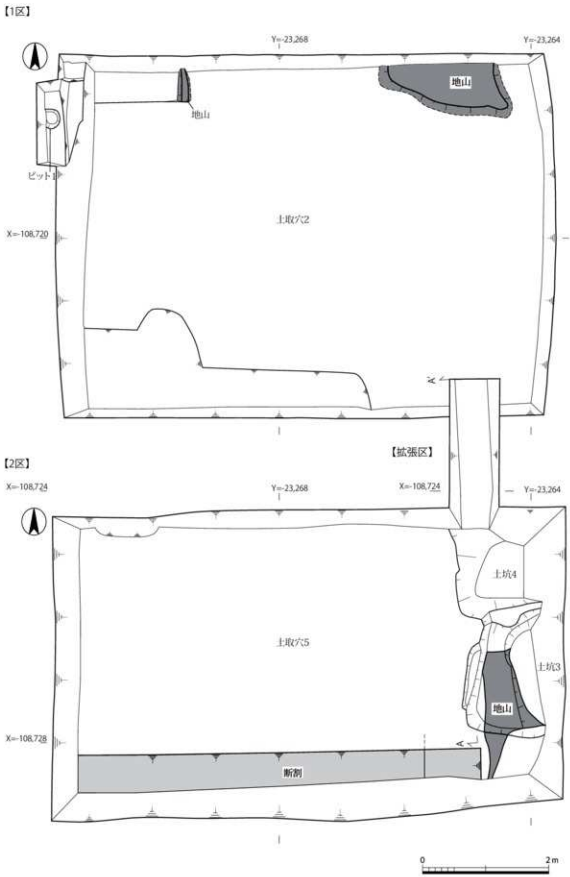


図８　調査区平面図（1：60）

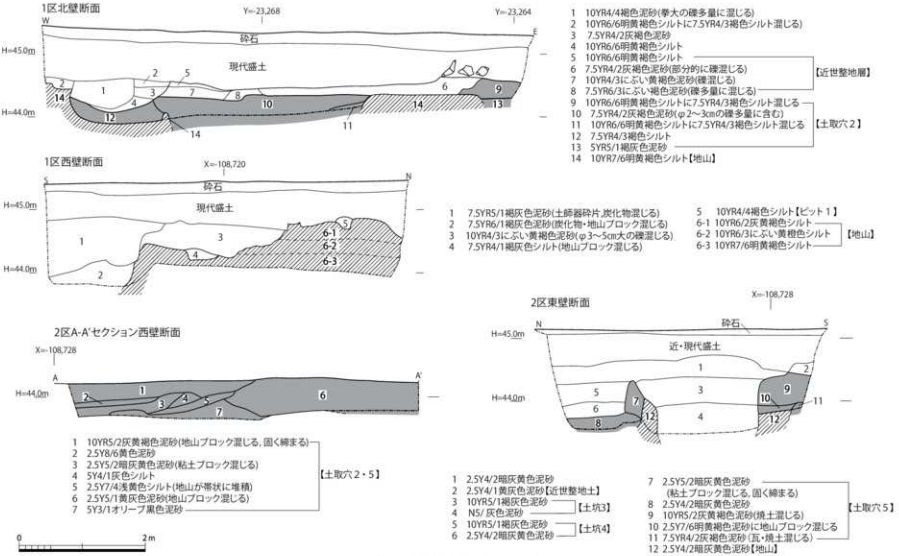


図9　調査区断面図（1：60）

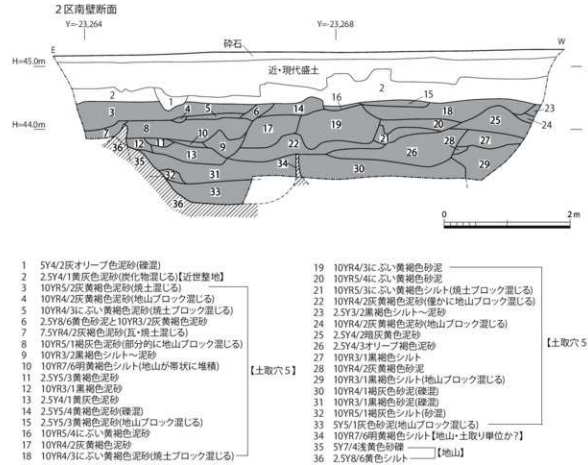


図10　2区南壁断面図（1：60）

（2）遺構

1区

近世整地層　1区全域で検出した整地層である。土取穴2・5を覆うように堆積する。18～19世紀頃の遺物が出土した。

ピット1　1区北西で検出したピットである。径0.18m，深さ0.1mで地山を掘り込む。遺物が出土しなかったことから時期は不明であるが，南面回廊基壇上に位置していることから，回廊に関わる遺構の可能性がある。

土取穴2　1区のほぼ全域で検出した土取穴である。平面形は不定形で，調査区北西隅と北東隅の一部で地山を確認した。埋土に地山ブロックが含まれている。1区西壁の地山（図9-1区西壁6層）が当該地周辺に分布するいわゆる「聚楽土」であることから，「聚楽土」を採取するための土取穴と判断した。なお，北側隣地と約2mの高低差があるため，安全面を考慮して部分的な掘削に留めた。また，拡張区を設けて，土取穴5との関係を検討しところ土取穴5上層との連続性を確認できたことから，土取穴2と5は同一の遺構である可能性が高い。

表2　遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代	整地層，土坑3・4，土取穴2・5	

2区

近世整地層　1区から連続する整地層である。層厚約0.5m以上である。

土坑3　調査区中央東端で検出した土坑である。土取穴5を掘り込む。規模は南北2m，東西1.5m以上で調査区外に展開する。埋土は2層に分層でき，18～19世紀頃の陶磁器などが出土した。

土坑4　調査区北東隅で検出した土坑である。土取穴5を掘り込む。規模は南北1.4m以上，東西1.0m以上で，調査区外に展開する。18～19世紀頃の陶磁器などが出土した。

土取穴5　調査区全域で検出した土取穴である。調査区南東端から土坑3の底部にかけて砂礫層の地山を帯状に確認した。34層（図10）が1区の地山（聚楽土）に類似していること，砂礫の地山を避けて掘削していることから，1区と同様に「聚楽土」の採取を目的とした土取穴と判断した。埋土の堆積状況を観察するために，調査区南端に断割区を設けた。土取穴の深さは埋土上場から1.6m（42.85m）で，途中（43.6m）に地山の立ち上がり（34層）が確認でき，堆積状況が34層を境にして異なる。上層（図10-3～28層）は西から東に向けて斜めに堆積しているのに対し，下層（図10-29～33層）は水平堆積となる。また，両層ともに固く締まり，上層は地山ブロックや焼土，平安時代の土師器片・瓦片・凝灰岩片が多く混在するのに対して，下層は遺物が少なく礫が混じる。飛鳥～奈良時代の須恵器，平安時代の土師器・瓦類，中世陶磁器などが出土した。

4．遺　物

（1）遺物の概要（図11　表3）

出土した遺物は整理箱にして5箱である。内訳は，土師器，須恵器，陶磁器，瓦類，金属製品，骨角器などがある。1・2区ともに9～11世紀と18～19世紀代が中心で，前者の遺物は後者に比べて小片が多い。また，土坑3・4は18～19世紀代が中心であるのに対し，土取穴2・5は平安時代の遺物が9割以上を占める。

近世整地層　1は土師器皿Sである。口径は9.2cmで14段階に属する。

土坑3・4　2は土師器皿Aで3段階に属する。3は施釉陶器の燭台である。底面に糸切痕が残されている。4は染付の皿で高台に「福」銘が書かれている。

土取穴2・5　5は須恵器甕である。把手が付き，内外面に叩きの痕跡がある。飛鳥～奈良時代

表3　遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
飛鳥～奈良時代	須恵器		須恵器1点		
平安時代	土師器・須恵器・瓦類・石製品・土製品		土師器1点		
安土桃山～江戸時代後半	陶磁器・骨角器・金属製品		土師器1点，国産施釉陶器2点・陶磁器1点		
合計		9箱	6点（1箱）	1箱	7箱

※コンテナ箱数の合計は整理後，Aランク遺物の抽出，詰め直しのため，出土時よりも4箱多くなっている。

に属する。6は天目茶碗の底部である。

5．まとめ

最後に土取穴の特徴と時期を確認し，当該地周辺の土地利用状況について検討する。

調査区の全域で検出した土取穴の底部の標高は42.85ｍである。周辺では45.5ｍで平安時代後期から鎌倉時代の整地層（調査129），46.2ｍで南面回廊を横断する暗渠を確認しており（調査170），土取りによって内裏の遺構面が掘削されたと推測できる。

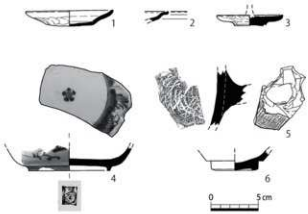


図11　遺物実測図・拓影（1：4）

時期　両調査区で確認した土取穴2・5は近世整地層に覆われ，土坑3・4によって掘り込まれている。近世整地層と土坑3・4からは18～19世紀代の遺物が出土していることから，遅くとも土取りが19世紀以前に行われたことになる。また，1区北壁や2区南壁を見る限り，土取穴埋土と近世整地層との間に土壌化層はなく，土取りから整地までに時間的隔たりはほとんど無いと考えられる。したがって，土取りは整地が施される少し前の18～19世紀にかけて行われたと推測される。また，土取穴埋土は非常に固く締まり，土層と下層で埋め戻しの工法を変えるなど，土取り後の土地利用に配慮している可能性がある。同様の事例は平安宮中和院跡の発掘調査においても確認することができ，土取りとその後の土地利用が一連で行われていたことが分かる[4]。

畔状の地山の高まり　2区南壁34層で確認した畔状の地山の高まりは，以下の2通りが推測できる。

①複数の作業班が同時に土取りする際に掘削範囲が接する場所に生じた掘り残し。

②1回の土取り作業範囲[5]。

当該地周辺の発掘調査（調査4・130）で大規模な土取穴を確認していること，現地形が周辺より一段低くなっていることなどを勘案すれば，土取りが広範囲に及んでいた可能性が高い。土取り作業の詳細な工程は不明であるが，土が商品として扱われていた近世では土の採掘には専門業者があたったとされる[6]。このようなことから，広範囲の土取りに対して同時に複数の作業班が投入された可能性があり，各作業班に対して作業範囲（掘削量）が明示され，同時に掘削を進めていくなか作業範囲が接する場所に掘り残しが生じ地山が畝状に残されたと想定する。

一方，後者（②）は1班による土取り作業範囲が地山の畔として残されたと推測する。この場合，偶然に地山が掘り残されたとも考えられるが，土取り作業中に隣接した土取穴埋土が流入することを防ぐ効果を期待した可能性もある。

また，土取穴埋土に大量の平安時代の遺物と焼土，凝灰岩片が混在していることから，回廊と外郭築地の空閑地に内裏の火災時に生じた廃材などが廃棄された土坑が成立していた可能性が高い。回廊外の空閑地に成立していた内裏火災の廃棄土坑が，土取りの際に掘り起こされ，埋め戻し時に

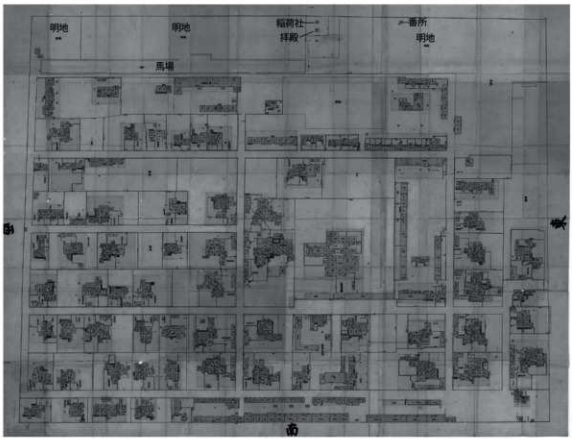


図12 「享保六年丑十二月所司代千本屋舗絵図正扣」一部加筆（京都大学附属図書館蔵）

再び投棄されたと想定できる。なお，調査50で内裏の火災時に生じた廃材が，殿舎付近の空閑地に廃棄されていたことを確認している。

土地利用の変遷　17世紀初頭の京都の様相を描いたとされる「京都図屏風」には，日暮通と下立売通の南西側に「板倉周防守屋敷」と記載されている（図13-①）。板倉周防守は板倉重宗のことで，この場所が所司代下屋敷地（以下，下屋敷と称す）であったされている[7]。また，元禄４年（1691）に下屋敷と周辺町家境にあった竹垣を塀に造り替える際の町家住人とのやり取りを記録した文書に「（略）下立売通に而は、松葉屋平吉持家之裏行拾五間三尺壱寸之並、同心屋敷迄西へ見通シ、間数之御定杭為御打被成候段、乍慮外御尤成義、町中より申分少も無御座候（略）。」とあり[8]，下屋敷の北限が下立売通の南側の町家の境であったことが分かる[9]。このようなことから，調査地点が下屋敷の北端中央であったことが判明する（図13）。下屋敷内の建物を描いた，享保６年（1721）「京都所司代千本屋敷絵図」には約70戸の所司代配下の武家住宅や長屋などが描かれているが，北側は僅かに番所や社殿などが建てられている程度でほとんどが明（空）地となる（図12）。したがって，調査地が18世紀中頃までほとんど利用されることがなかったと推測でき，本調査において17～18世紀前半の出土遺物が極めて少ないことと符合する。その後，天明６年（1786）「洛中洛外絵図」には下屋敷の北側半分が「御用地」となり（図13-③），慶応４年（1868）「改正京町御絵図細見大成」には御用地の東側に「郡山屋舗」が建てられる（図13-④）。「御用地」・「郡山屋舗」がどのようなものであったのかは定かではないが，下屋敷北側の変化と土取穴の年代が符合することは注目でき，土地利用の変化が契機となり土取りが行われたと推測できる。

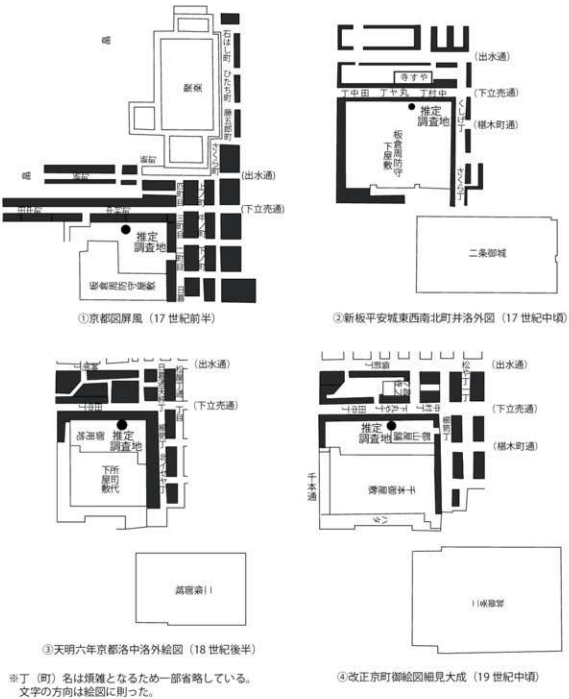


図13　調査地周辺変遷図（17 世紀～19 世紀）

近世内裏の開発　聚楽第の縄張り復元案の一つに，文禄元年（1592）に内裏北西側（西外堀二）と北東側（西外堀三）に堀を開削したとするものがある[10]。調査109で堀跡を確認していることから，復元案通り堀が開削された可能性が高い。したがって，堀の推定地と重なる西面回廊の北側や襲芳含跡，桂芳坊跡・華芳坊跡などが聚楽第期（1586～1592年）に破壊されたと推測できる。一方，内裏に関わる遺構は下立売通，出水通及びそれに面した敷地の境で検出されている（調査2・7・8・37・50・53・59・67・71・147）。「京都図屏風」には聚楽第とともに下立売通と出水通が「内野」に延長されている（図13-①）。道路が敷設された場所は，隣接地の土地利用に合わせて造成されることがあっても，建物や土取りの影響を直接受けることが少なく，道路部分に内裏

関連遺構が残されることになったと推測できる（調査67[11]）。また，両道路に面した敷地には早くから町家が建設されたため，町家建設にともなう遺構の破壊が認められる。しかし，近代まで町家の区画が踏襲されていることから小規模な土地利用しか行えず，掘削し難い敷地境に遺構が残されてたと推測できる。さらに，２章でも述べた通り，道路に面した宅地部分は近世以降に厚い造成がなされているため，土地利用が希薄な場所も残されている可能性が高い。このように，内裏関連遺構の削平は聚楽第築城を契機とするが，その範囲は限定的であり，むしろ本調査で明らかになった通り，江戸時代後半以降の大規模な土地利用の際に広範囲にわたって遺構が破壊されたと考えられる。

（鈴木　久史）

註

1）横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』，角川書店，1994年。

2）「内裏図」は鎌倉時代の古写図であることから，時代を異にする官衙の建物がそのまま同一画面に書き込まれており，遷都当初の様相を忠実に描いていない。

3）甲元真之・伊東玄三「平安宮内裏内郭回廊跡第２次調査」『平安博物館研究紀要』第６輯，(財)古代学協会，1976年。

4）南孝雄・中谷俊哉『平安宮中和院・聚楽遺跡』『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-3』，(公財)京都市埋蔵文化財研究所，2021年。

5）京都大学構内遺跡では，近世初頭の土取穴の規模に規格が認められないが，近世中頃の土取りの規模には一定のまとまりがあるとする。また，土取りは先に掘った土取穴を埋めてから，新たな土取穴が開削されている（五十川伸矢「第６章土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告第４冊』，京都大学埋蔵文化財センター，1991年，五十川伸也・浜崎一志・伊東隆夫「第２章京都大学病院構内AJ18・AJ19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1986年度』，京都大学埋蔵文化財研究センター，1989年。

6）前註５五十川報告

7）大上直樹・高橋みずほ・谷直樹「中井家絵図より見た京都所司代の上屋敷，中屋敷，下屋敷の建築について」『大阪市立大学生活科学部紀要』第49巻，大阪市立大学生活科学部，2001年。なお，下屋敷の範囲は東限を日暮通，西限を千本通，南限を城の馬場，北限を丸太町通とするが，「京都図屏風」などの絵図や史料を見る限り北限は下立売通の南側に建ち並ぶ町家の南限となる。

8）『史料京都の歴史 ７上京区』，平凡社，1972年。〔中井家文書〕元禄四年四月

9）「寛永十四年洛中絵図」にも下立売通の南側には町家が描かれている。

10）古川匠・釜井俊孝・坂本俊・中塚良「研究ノート　中近世城郭研究における表面波探査法の活用」『日本考古学第45号』，一般社団法人日本考古学協会，2018年。なお，西外堀二カ所幅約45ｍの南北方向の堀として復元されているが，調査１・11・147で平安時代の遺構を確認していることから，堀幅は復元案より狭いもしくは直線的ではなっかったと推測する。

11）下立売通では凝灰岩の直上に層厚約0.86ｍの近世盛土が堆積している（調査67）。

Ⅱ　平安京左京三条四坊十三町跡・三条せと物や町跡

1．調査経過（図1～5）

調査地は中京区弁慶石町55番地に所在し，周知の埋蔵文化財包蔵地の「平安京左京三条四坊十三町跡」及び「三条せと物や町跡」に該当する。

当該地で店舗兼住宅の建設が計画され，令和3年6月1日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。これに対して京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下，保護課）は，近隣の調査で『三条せと物や町界隈出土の「桃山茶陶」』として本市指定文化財となっている遺物が多量に出土している事を踏まえ，本調査地でも重要な遺構・遺物が確認される可能性が高いことから，記録保存のための発掘調査を指導した。

調査期間は6月16日～8月4日までで，実働日数は30日間である。調査区は計画範囲に2箇所設けた。まず，6月17日～7月9日にかけて北側の1区で調査を行った。その後，反転して7月12日～8月2日に南側の2区で調査を実施し，8月4日に現地での作業を完了した。2区では調査区の北東部で一部拡張を行い，調査面積は合計48㎡である。なお，新型コロナウィルス感染症や安全管理上の理由から，現地説明会等は実施していない。

調査では，江戸時代～平安時代の各遺構面で調査を実施し，各時期の遺構・遺物を確認した。特に2区では，三条せと物や町跡に関わる桃山茶陶が一定数まとまって出土した。

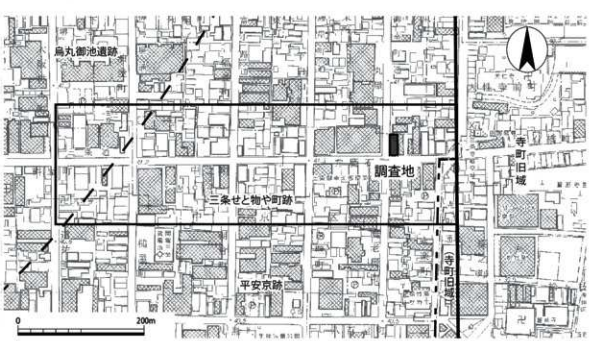


図1　調査位置図（1：6,000）

図２　重機搬入状況（北から）

図３　人力掘削作業状況（南東から）

図４　器材搬出状況（南西から）

図５　埋戻し風景（南西から）

２．位置と環境

（１）立地と歴史的環境（図６）

当該地は平安京左京三条四坊十三町跡にあたり，北は姉小路，東は東京極大路，西は富小路，南は三条大路に囲まれ，平安京の中でも東縁辺部に位置する。調査地は本町域の東南隅に位置し，北八行西四門に該当する。史料等によると本町域については，平安時代中期に大内記藤原敦基邸や頼尊律師の宿坊があったことが知られる程度である。しかし西側に隣接する同十二町跡は，平安時代中期に陽明門院禎子内親王の『三条万里小路第』，鎌倉時代には安嘉門院邦子内親王領であったことが分かる。また，南側の四条四坊十六町跡には平安時代後期に崇徳天皇や鳥羽上皇などの『三条京極第』があったことが知られ，この付近は比較的良好な宅地として認識されていたことが窺える。

平安時代以降，天災や戦乱などを経て平安京は徐々に変化してきた。その中で，本調査付近に多大な影響を与えたのは豊臣秀吉である。秀吉は，平安京以来の一町120m四方の町割りに対し，新たに南北街路を設けたいわゆる「天正地割」を生み出した。本調査地の西側に接する御幸町通もその一例である。併せて，御土居の構築，神社仏閣の集約（寺町）なども行った。また，「天正地割」と並行して三条河原における石橋の架橋を行った。そして御土居の出入口として三条口を設け，ここを東国への交通網の基点として整備した。当該地は新たに設けられた寺町との接点ともなり，当時，都で最も繁栄した場所となった。さらに慶長十六年（1611）には，角倉了以によって高瀬川が掘削され，舟入が設けられたことで物流の要としての役割をも担うようになる。この秀吉による

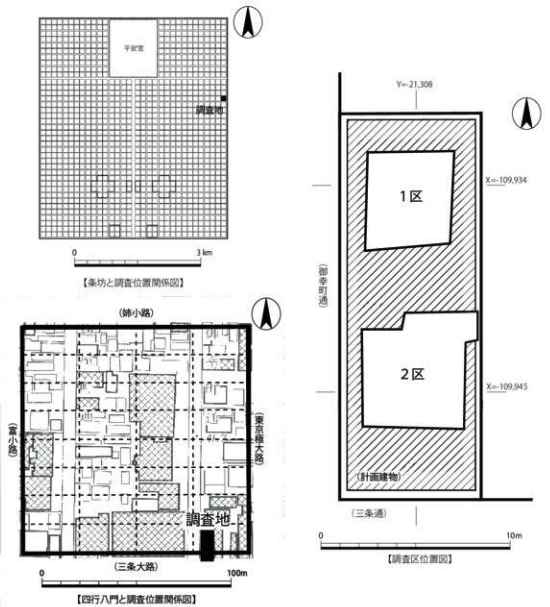


図6　条坊（１：90,000）・四行八門と調査位置関係（１：2,000）・調査区位置図（１：200）

一連の京都大改造を背景として，三条せと物や町は成立したと考えられる。

（2）既往の調査（図7・表1）

調査地付近は，現在でも活発な土地利用が行われており，多くの調査が実施されてきた。これらのうち，主要な調査事例を示したのが24頁の図7と表1である。

三条せと物や町跡の調査の嚆矢となったのは，本調査地から御幸町通を挟んだ西側で行われた弁慶石町での発掘調査である（図7-2）。この調査では，間口約15mの大規模な町家と裏手の建物群，そして庭が確認された。庭に掘られた３つの大型土坑から大量の桃山茶陶の出土した。その後，中之町（図7-3）や下白山町（図7-4）等で大量の桃山茶陶の出土が相次ぎ，文献・絵画等の研究から「せと物や町」の存在が指摘されるに至った[1]。その後も，福永町（図7-5）や油屋町

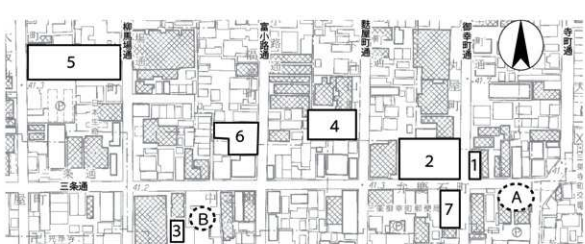


図7　周辺の主要な調査事例（１：2,500）

表1　調査事例一覧

地点	調査種別	概　要	報告書
A	—	「洛中洛外図屏風」に描かれた地点	—
B	—	「有来 新兵衛」邸跡、享保年間（1716～1736）に大量の桃山茶陶が出土。	—
1	発掘	本報告	本　書
2	発掘	平安～江戸時代の遺構・遺物を確認。安土桃山時代の遺構としては、三条通に面した間口約15mの大規模な町家、その裏手の建物群と庭を確認。庭に掘られた３つの大型土坑より大量の桃山茶陶出土。	『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
3	立会	共同住宅建設に伴う立会調査で安土桃山時代の遺構・遺物を確認。三条通南側に面した宅地の裏側に当たる場所で井戸、方形石組み遺構、土坑等から桃山茶陶が大量に出土。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局
4	立会	共同住宅建設に伴う立会調査で安土桃山時代の遺構・遺物を確認。天正地割以前の富小路路面を掘り込んで成立する複数の土坑大量の桃山茶陶が出土。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成７年度』京都市文化市民局
5	発掘	平安～江戸時代にかけての遺構・遺物を確認。宅地の裏側に所在する３基の大型土坑より大量の桃山茶陶が出土。	『平安京跡発掘調査報告　平安京左京三条四防六町』関西文化財調査会
6	立会	事務所兼共同住宅建設に伴う立会調査で安土桃山時代の遺構・遺物を確認。宅地の裏側に位置する２基の土坑から大量の桃山茶陶が出土。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
7	試掘	事務所建設に伴う試掘調査。GL－1.5mで安土桃山時代の遺構面、以下－2.0mまで中世遺物包含層を確認。桃山茶陶が少量出土。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局

（図7-6）でも多量の桃山茶陶の出土が確認されている。

各出土品の内容は，いずれも特徴があり，一軒の店や家が所有する質や量とは考えにくいことから，複数の「瀬戸物屋」の存在が想定されている。また，これらの中には中国・朝鮮・東南アジアからの舶来品も含まれており，当時の活発な商業活動が伺える。出土した桃山茶陶のうち，弁慶石・中之町・下白山町出土品は，『三条せと物や町界隈出土の「桃山茶陶」』として本市指定文化財となっている点は特筆される。

3．1区の成果

（1）層序と遺構の概要（図8）

1区付近の地表面の標高は，42.0～42.1ｍでほぼ平坦である。調査区内には，近世後半の井戸や蔵基礎があるものの，比較的良好に江戸時代前期以前の遺構面が遺存していた。調査では，平安時代～江戸時代前期にかけての５つの遺構面で調査を実施した。掘削深度が想定よりも深かったことから，調査の進展に際しては安全に留意し調査区壁面に可能な限り法面をつけて掘り下げた。調査面積は上端で計測して22㎡である。

調査地は既存建物などの解体後，舗装や砕石などはなく地面が露出した状況であった。解体攪乱や近代～近世後半の整地層などがあり，GL-1.2ｍ程で江戸時代前期の遺構面となる。江戸時代の整地は数層（13・14・17層）ある。その中で，遺存状況の良好であったにぶい黄橙色粘土（14層）の上面を第１面として調査を行った。第１面では江戸時代前期の土坑やピット，礎石，落込み等を10基確認した。その後，-1.3ｍの褐灰色粘質土（22層）等の上面を第２面として調査した。この面では，室町時代の溝や土坑を８基確認した。第３面は-1.55ｍで検出したにぶい黄褐色粗砂（32層）の上面である。ここでは鎌倉時代～室町時代の柱穴や土坑，ピットを11基確認した。第３面目を構成する整地層（32・33層）を除去すると，-2.15mで暗灰黄色細砂（35層）と基盤層の灰オリーブ色細砂（36層）が確認できる。このうち暗灰黄色細砂上面を第４面，灰オリーブ色細砂上面を第５面として調査を実施した。第４面では，平安時代～鎌倉時代の土坑を９基確認したが，第５面では遺構・遺物は確認できなかった。その後，調査区中央に南北方向の断割りを設け，下層の確認を行ったうえで１区の調査を終了した。

（2）第５面の遺構

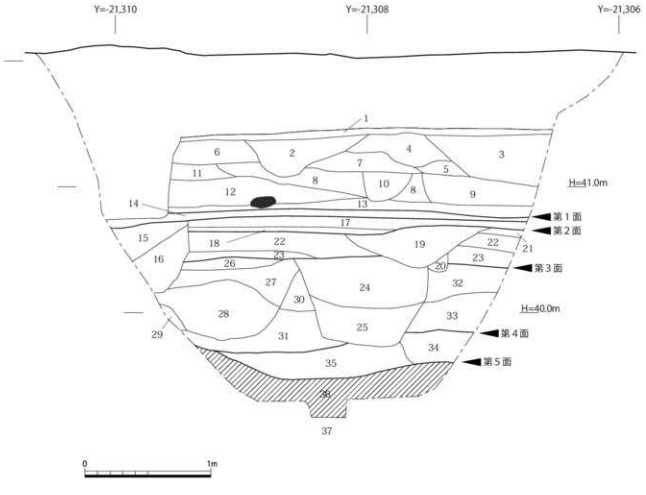
灰オリーブ色細砂の基盤層上面である。この灰オリーブ色細砂上面の高さは場所によって異なり，標高は39.85～39.5ｍである。北西隅付近が最も高く，そこから南東に傾斜する。遺構・遺物は確認できなかった。

（3）第４面の遺構（図９）

整地層と考えられる暗灰黄色細砂上面で遺構検出を実施した。遺構面の標高は，39.85m前後である。この整地層には，小片だが平安時代後期のものと思われる土師器片が含まれる。確認した遺構は，小型の土坑が大半を占める。

土坑54　調査区の南東隅で確認した。調査区内では北西肩口のみの確認に留まることから全体の規模は不明だが，南北1.3m以上，東西１m以上，深さ0.2mとなる。埋土は拳大の礫を含む黒褐色細～粗砂の単一層である。土師器や緑釉陶器，瓦器，白磁などが出土した。鎌倉時代（６B～６C期）の遺構と考えられる。

土坑62　直径0.45mで深さ0.18mの土坑である。埋土は褐灰色粘質土である。出土遺物から鎌



1 2.5Y6/2 灰黄色粗砂（小礫まじる）
2 10YR5/1 褐灰色粘土
3 10YR3/1 黒褐色砂質土（しまり弱い）
4 10YR4/2 灰黄褐色粘土混砂
5 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土（小礫まじる）
6 10YR4/2 灰黄褐色粘土混砂
7 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土（小礫まじる）
8 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
9 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
10 10YR5/1 褐灰色泥砂（小礫まじる）
11 10YR3/1 黒褐色泥砂（粗砂まじる）
12 7.5YR3/2 黒褐色泥
13 10YR3/3 暗褐色泥砂砂
14 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土
15 10YR3/1 黒褐色泥砂【溝45】
16 7.5YR3/1 黒褐色粗質土【土坑70】
17 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
18 10YR4/1 褐灰色シルト（粗砂まじる）
19 10YR5/1 褐灰色粘質土（粗砂まじる）【土坑55】
20 7.5YR4/2 灰褐色泥砂【土坑48】
21 10YR6/2 灰黄褐色粘土
22 10YR4/1 褐灰色粘質土（粗砂まじる））
23 7.5YR3/2 黒褐色砂泥
24 7.5YR3/3 暗褐色泥砂
25 7.5YR2/1 黒色粘質土（粗砂少量含む）
26 7.5YR3/2 黒褐色砂泥
27 10YR3/3 暗褐色シルト
28 10YR2/1 黒色泥砂（しまりゆるい）【土坑51】
29 10YR2/2 黒褐色細砂（拳大の礫含まじる）
30 7.5YR4/1 褐灰色泥砂【溝45】
31 7.5YR3/1 黒褐色泥砂
32 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂（しまり弱い）
32 10YR3/1 黒褐色泥砂
33 10YR4/1 褐灰色粗砂（同色粘質土まじる）
34 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土【土坑67】
35 2.5Y4/2 暗灰黄色細～粗砂【整地層】
36 5Y5/2 灰オリーブ色細砂【基盤層】
37 2.5Y5/1 黄灰色砂礫

図8 第1区北壁断面図（1：30）

倉時代（6B～6C期）遺構と考えられる。

土坑63　土坑64に切られており，規模は直径0.5m以上で深さ0.26mとなる。埋土は褐灰色粘質土で，出土遺物から鎌倉時代（6A～6B期）の遺構と考えられる。

土坑64　規模は直径0.5mで深さ0.18mとなる。埋土は褐灰色砂泥である。重複する土坑63と同じく鎌倉時代（6A～6B期）の遺構と考えられる。

土坑67　調査区の北東隅で確認した土坑であり，北と東肩口は調査区外へと続く。規模は東西0.36m，深さ0.18mである。埋土は灰黄褐色泥砂である。平安時代末期（5B～6A期）の遺構と考えられる。

（4）第3面の遺構（図10）

第3面は，整地層と考えられるにぶい黄褐色粗砂の上面である。にぶい黄褐色粗砂は調査区の四方の壁断面で確認でき，その上面の標高は40.45m前後となる。この面で土坑と柱穴を確認した。ほかの面に比べて柱穴を多く確認できるが，並ぶものはなく建物等の復元はできない。

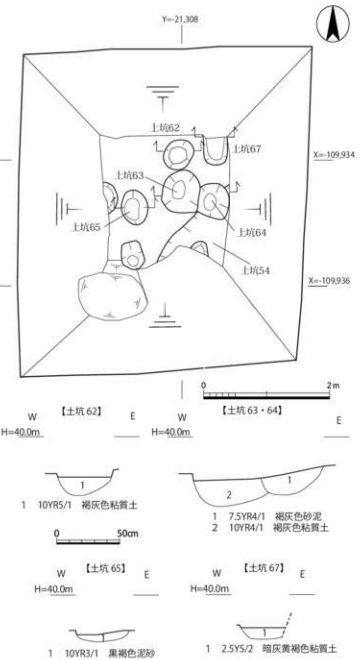


図9　1区第4面平面（1：60）・各遺構断面図（1：30）

土坑48　規模は直径0.15mで深さ0.15m。同一個体と思われる瓦器の羽釜の，大きめの破片が土坑の底面や側面に並べられた状態で出土した。出土した破片を接合しても，全体を復元できるほどの量はなく，また土坑の規模も小さいことから，完形もしくはそれに近いものを据えたのではなく，割れた大きめの破片を転用した可能性が高い。出土遺物は瓦器の羽釜のみであり，詳細な時期の断定はできないが，室町時代の遺構と考えられる。

柱穴49　土坑48に切られており，規模は直径0.32mで深さ0.18m。中央に長さ0.2mで厚さ0.1mの石材が面を上に受けて据えられている。室町時代（9A～9B期）の遺構と考えられる。

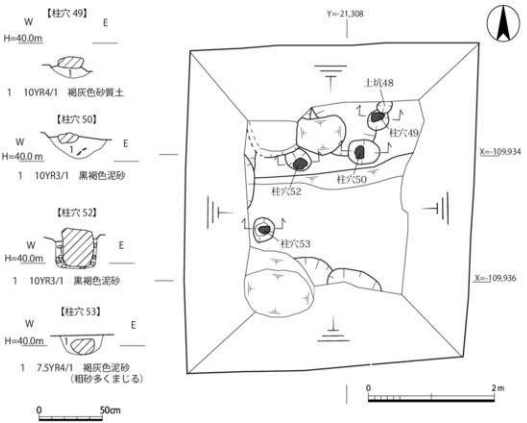


図10　1区第3面平面（1：60）・各遺構断面図（1：30）

柱穴50　規模は直径0.5mで深さ0.2m。長さ0.1mで厚さ0.08mの石材が面を上に向けて据えられている。室町時代（9A～9B期）の遺構と考えられる。

柱穴52　規模は直径0.35mで深さ0.32m。長さ0.25mで厚さ0.3mの石材が面を上に向けて据えられている。

柱穴53　第2面の大型の土坑46の影響を受け，第3面の北側と南側では0.25mほどの比高差があり，柱穴53付近の遺構面の標高は40.2m前後となる。規模は直径0.34mで深さ0.16m。底面に長さ0.22mで厚さ0.12mの石材が面を上に向けて据えられている。出土遺物から鎌倉時代（6B～7A期）の遺構と考えられる。

（5）第2面の遺構（図11）

第2面は褐灰色粘質土等の上面で調査を実施した。遺構面の標高は40.7m前後である。この面では，柱穴などは確認できず溝や大型の土坑などを確認した。

溝45　土坑70を切り込んで成立する。南北方向の溝もしくは土坑と考えられ，東肩口のみ検出した。長さは2.35m以上，幅は0.6m以上，深さは0.3m以上である。なお，南側の2区ではこの遺構の延長で同様の遺構を確認することはできなかった。遺物としては室町時代（9B～9C期）の遺物が多く出土しているが，遺構の重複関係から室町時代～安土桃山時代（10B～10C期）の遺構と考えられる。

土坑46　調査区中央で確認した大型の土坑である。やや不整形ではあるが，平面は方形を呈している。東西2.5mで南北は2.25m，深さ0.32mである。埋土は３層に分けられるが，水分を多く含んでおり，締まりが弱い。土坑の底面には0.08mほどの厚さで，褐灰色粘土が敷かれている。この粘土の上面に貼り付くようにして，１個体分のイシガメの甲羅が出土した。土質やイシガメの甲羅の出土状況を踏まえると，この大型土坑は溜池状遺構である可能性が想定できる。出土遺物から，室町時代～安土桃山時代（10B～10C期）の遺構と考えられる。

溝47　幅は0.64mで深さは0.5mである。底面の標高は40.0m。埋土は３層に分けられる。土坑46に北東隅部に位置しており，土坑46を溜池状の遺構と考えた場合，これにとりつく溝の可能性がある。なお，標高は溝47の底面が40.0mで，土坑46の粘土上面が40.1ｍである。

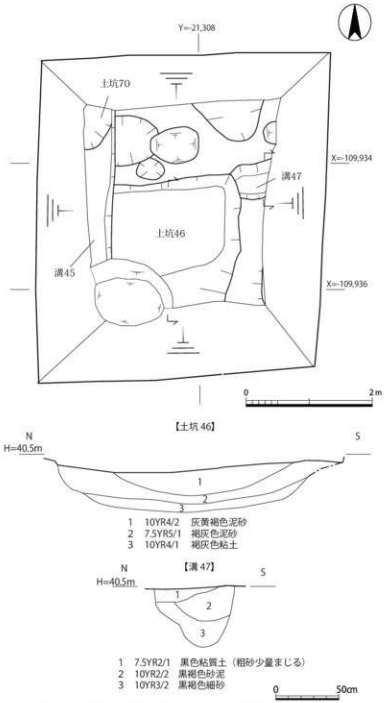


図11　１区第２面平面（１：60）・各遺構断面図（１：30）

（７）第１面の遺構（図12）

整地層と考えられるにぶい黄橙色粘土の上面を第１面として調査を行った。遺構面の標高は40.82m前後である。この面では土坑や礎石，落込み等を確認した。

土坑35　落込み36・礎石41を切り込んで成立する。不定形で，規模は南北は0.7m，深さは

0.22m。江戸時代前期（11A～11B期）と考えられる。

落込み36　調査区の中央に位置する。平面形は不整形だが方形に近い。規模は，南北2.1mで東西2.95m，深さ0.1mである。北端の肩口付近には拳大から人頭大程度の礫を配している。調査時点は，石室の残欠等の可能性も考えたが，石材が小ぶりであり，北側以外でではほとんど石材が確認できない事，そしてこの下層には重複する位置に溜池状遺構と考えられる土坑46が存在することを踏まえると，落込み36は土坑46によって生じた凹みを均すための整地と考えられる。出土遺物から江戸時代前期（11A～11B期）と考えられる。

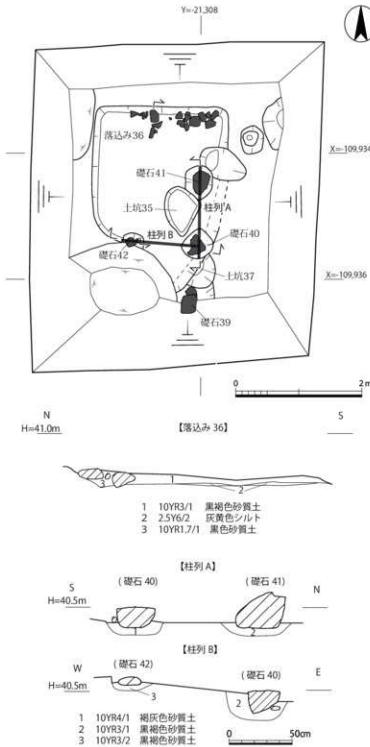
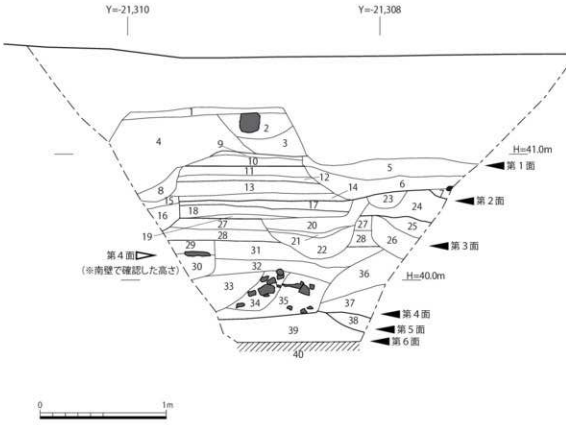


図12　1区第1面平面（1：60）・各遺構断面図（1：30）

柱列A　礫石40と礫石41からなる南北方向の柱列である。礫石40の規模は，直径0.45mで深さ0.12m。中央に長軸0.3m程の石材を据えている。礫石41の規模は直径0.55mで深さ0.1m。中央に長軸0.35mの石材があるが，上面が傾いており，その石材の下には隙間があることから，原位置から多少動いている可能性が高い。礫石間の距離は1mである。なお，礫石40の南延長線上には礫石39が存在するが，壁断面や遺構の切り合いをみる限り，第1面よりも更に上層で成立する遺構である。

柱列B　礫石40と礫石42からなる東西方向の柱列である。礫石42の規模は直径0.3mで深さ0.12m。中央に長軸0.2mで厚さ0.06m程の小ぶりな石材を配する。礫石間の距離は1mとなる。



1 10YR6/2 灰黄褐色シルト
2 2.5Y4/1 黄灰色粘土
3 2.5Y6/2 灰黄色粗砂（小礫まじる）
4 2.5Y7/1 灰白色砂礫2.5Y6/1 黄灰色シルト
5 10YR3/1 黒褐色シルト（小礫多量まじる）
6 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト（灰黄色ブロックまじる） 【落込み 45】
7 10YR3/1 黒褐色泥砂（固くしまる）
8 10YR4/1 褐灰色泥砂（オリーブ褐色シルトブロック含む） 【土坑1】
9 2.5Y6/1 黄灰色シルト
10 10YR4/1 褐灰色シルト
11 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
12 10YR5/1 褐灰色粘土
13 10YR4/1 褐灰色シルト（粗砂、小礫まじる）
14 2.5Y4/1 黄灰色シルト（固くしまる）
15 10YR3/3 暗褐色泥砂 【土坑 12】
16 2.5Y3/1 黒褐色泥砂（炭含む）
17 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
18 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（拳大の礫多くまじる） 【土坑 13】
19 10YR4/1 褐灰色シルト（焼土・炭まじる）
20 10YR4/4 褐色泥砂
21 10YR6/1 褐灰色粗砂 【土坑 11】
22 10YR3/1 黒褐色砂質土
23 10YR4/6 褐色泥砂
24 7.5YR3/1 黒褐色泥砂
25 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
26 10YR3/3 暗褐色泥砂
27 10YR4/4 褐色砂質土
28 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（粗砂まじる）
29 10YR4/2 灰黄褐色シルト
30 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（小礫多くまじる）
31 10YR4/1 褐灰色シルト（炭まじる）
32 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（拳大の礫少量まじる）
33 10YR3/1 黒褐色砂質土（しまり弱い、炭まじる） 【土坑 30】
34 10YR3/2 黒褐色泥砂（拳大の多量にまじる）
35 10YR2/2 黒褐色泥砂（拳大の礫まじる）
36 10YR4/1 褐灰色泥砂
37 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土（拳大の礫まじる）
38 10YR2/2 黒褐色泥砂【土坑38】
39 10YR4/2 灰黄褐色粗～微砂（小礫まじる）【溝49】
40 10YR6/6 明黄褐色砂礫【基盤層】

図13　2区北壁断面図（1：30）

4．2区の成果

（1）層序と遺構の概要（図13）

2区付近の地表面の標高は，41.8～41.9ｍでほぼ平坦である。調査区の南半には幕末の火災処理遺構があるが，北半部は比較的良好に江戸時代前期以前の遺構面が遺存していた。調査では，平安時代～江戸時代にかけての６つの遺構面で調査を実施した。掘削深度が深かったことや，調査区の東・西・南壁面は火災処理遺構に伴う焼け瓦層が広がっており非常に脆弱であったことから，安全に留意して調査区壁面に可能な限り法面をつけた。また，第３面以下の調査に際しては，南壁に犬走を設けた。第６面での調査終了後に調査区北東隅を拡張した。調査面積は計26㎡である。

解体攪乱や火災処理遺構などの影響を受け近代～近世前半にかけての整地層が島状に遺存する。このうち，GL-1.1ｍで確認した江戸時代前期の整地層であるにぶい黄褐色シルト（図13の11層）の遺存状況が良好であったことから，この上面を第１面として調査した。その結果，江戸時代前期の土坑やピット，礎石，落込みを12基確認した。その後，-1.3mで整地層と考えられる黒褐色泥砂（24層）があり，この上面を第２面として調査を行った。ここでは，室町時代の土坑や柱穴を７基確認した。-1.7ｍには大型土坑の埋土と考えられる褐色砂質土（27層）等があり，この上面を第３面とした。ここでは，室町時代の土坑を４基確認した。

第３面の土層を除去すると，南半でのみ-1.8mで黄灰色粗砂層が確認でき，この上面を第４面とした。第５面は，-2.1～2.25ｍで確認した灰黄褐色粗砂（39層）等の上面である。ここでは，溝やピット，柱穴を４基確認した。最後は，-2.5mで確認した明黄褐色砂礫の上面を第６面とし。遺構・遺物は確認できなかった。

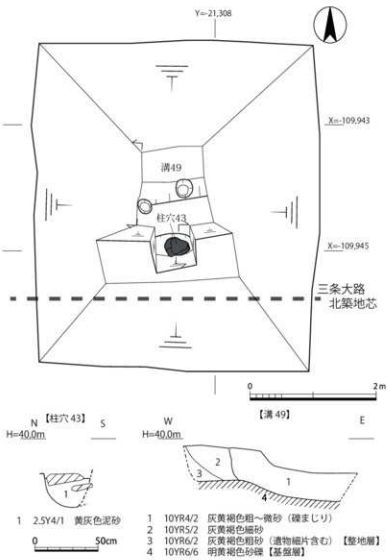


図14　2区第５面平面（１：60）・各遺構断面図（１：30）

（2）第6面の遺構

明黄褐色砂礫の基盤層上面で，遺構面の標高は39.5～39.7ｍである。遺構・遺物は確認できない。

（3）第5面の遺構（図14）

灰黄褐色粗砂の上面で検出を実施した。標高は39.9m～39.75mである。整地層に含まれる遺物は細片が多く詳細な時期を断定することは難しい。しかし，遺構面の標高や土層の特徴が1区の第4面で確認している整地層と一致することから，これも平安時代後期の整地層の可能性が高い。

柱穴43　南北0.36m以上，東西0.6m以上の，深さ0.35mの柱穴である，0.4m程で厚さ0.08ｍ程の石材を面を上にして据えている。時期を判別できる遺物は出土していない。三条大路北築地心に近いことから，塀や柵列などに伴う柱穴の可能性がある。

溝49　東西方向の溝で，南側の肩口のみ確認した。幅は1ｍ以上で，深さは0.42m。位置関係から三条大路の北築地内溝と考えられる。平面検出時は，平面の輪郭が明確であった遺構断面図の1層のみを内溝の埋土と考えていた。しかし，完掘後に壁面を精査した結果，2層が整地層を切り込んでいる様相が確認できたことから，これも内溝埋土の可能性がある。その場合，溝の掘り直し等が想定される。出土遺物は土師器や須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，白磁片などがある。小片が多いものの1層は鎌倉時代と考えられる。

（4）第4面の遺構（図15）

調査区南側にのみ遺存している黄灰色粗砂の上面で成立する遺構と，第3面の土坑30等と重複する下層遺構を第4面として認識した。遺構面の標高は最も高い場所で40.2mである。

柱穴35　規模は長軸0.6m，深さ0.16mである。中央に直径0.3m程の柱当たりが確認できる。出土遺物から鎌倉時代（6B～6C期）のものと考えられる。

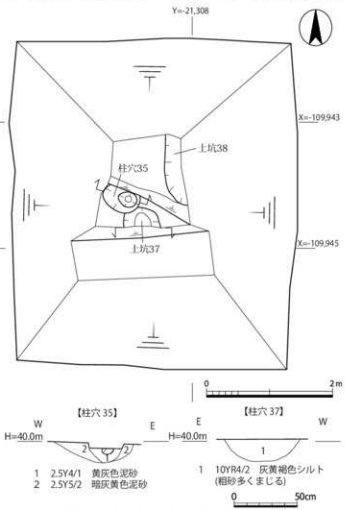


図15　2区第4面平面（1：60）・各遺構断面図（1：30）

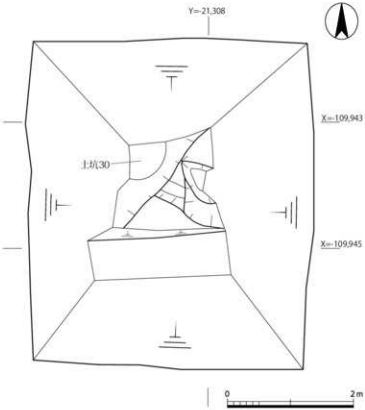


図16　2区第3面平面図（1：60）

土坑37　規模は直径0.6mで深さ0.18mの土坑である。鎌倉時代のものと考えられる。

土坑38　規模は東西0.35m以上，南北1.1m以上となる。出土遺物から鎌倉時代（8A～8B期）のものと考えられる。

（5）第3面の遺構（図16）

大型土坑の埋土と考えられる褐灰色シルト等の上面が第3面である。標高は40.3mである。ただし，遺構の平面形が明瞭でなく，全体を0.2m程掘り下げて検出を行った。

土坑30　南東部のみ確認した。規模は南北1.5m以上，東西1.7m以上，深さは0.6mである。室町時代（8B～9B期）のものと考えられる。

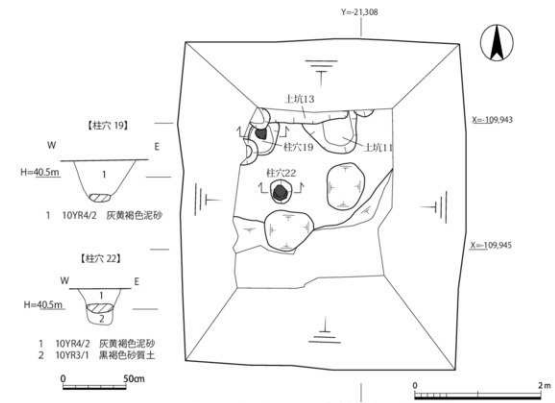


図17　2区第2面平面（1：60）・各遺構断面図（1：30）

（6）第2面の遺構（図17）

整地層と考えられる黒褐色泥砂上面である。遺構面の標高は40.7mである。南半は火災処理遺構や第1面の遺構により削平を受ける。柱穴や土坑等を確認した。

土坑11　南北0.65m，東西は0.85m，深さ0.45mである。室町時代（9A～9B期）の遺物が出土している。

土坑13　南東隅のみ検出した。東西1.4m以上で南北0.1m以上，深さ0.15mとなる。室町時代（9C～10A期）の遺構と考えられる。

柱穴19　直径0.5mで深さ0.32m。底に直径0.18mで厚さ0.06mの石材を据える。室町時代（9C～10A期）の遺構と考えられる。

柱穴22　直径0.34mで深さ0.28m。底に0.1mほどの厚さで黒褐色砂質土を入れ，その上に直径0.22mで厚さ0.08mの石材を据える。室町時代（9C～10A期）の遺構と考えられる。

（7）第1面の遺構（図18・19）

江戸時代の整地層は壁断面で複数確認できるが，遺存状況の良好であったにぶい黄褐色シルト上面を第1面として調査を実施した。遺構面の標高は40.9m前後である。礎石や土坑，ピット，落込

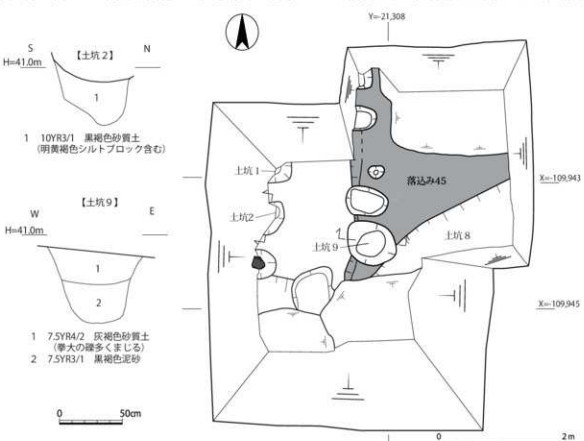


図18　2区第1面平面（1：60）・各遺構断面図（1：30）

みをを確認した。

土坑1　南北0.3m，東西は0.4m，深さ0.45mである。瀬戸黒の椀や櫛払が出土しており，安土桃山時代～江戸時代（10C～11A期）の遺構と考えられる。

土坑2　南北0.5mで東西0.3m以上，深さは0.52mである。瀬戸黒の椀や土師器が出土した。江戸時代（11A～11B期）の遺構と考えられる。

土坑9　直径0.75m，深さ0.6mである。江戸時代（11A～11B期）の遺構と考えられる。

落込み45　調査区東半で検出した遺構である。南北へ直線的にのびる西肩口を確認した。北と東は調査区外へと続き，南側は火災処理遺構によって削平されている。規模は東西2.5m以上で南北は3.35m以上の規模を有する。深さは場所によって若干の差異があるが，0.35m前後である。遺構の埋土は，固く締まった黒褐色や黄色系のシルトや泥砂からなる。

拡張前の段階では，遺構の掘削に伴い少量の遺物が疎らに少量出土した程度であった。しかし，第6面の調査終了後に北東隅付近で拡張を行ったところ，安土桃山時代～江戸時代の遺物がまとまって出土した。出土遺物としては土師器や瓦器の他，信楽焼の水指片及びその蓋，瀬戸黒・黄瀬

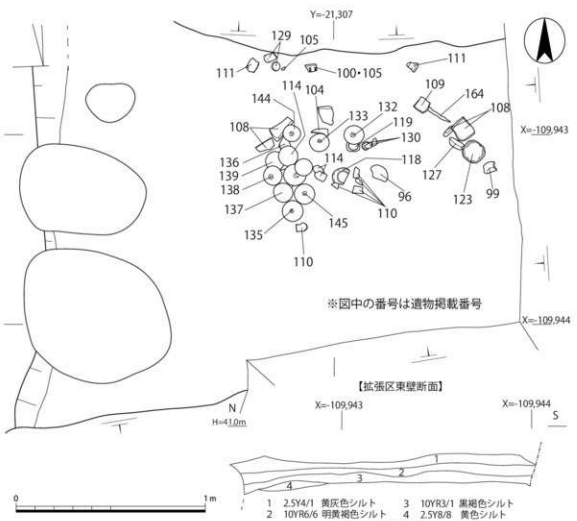


図19　2区第1面落込み45出土状況・拡張部東壁断面図（1：20）

表2　遺構概要表

時　代	遺　構		備　考
	1区	2区	
安土桃山時代 ～ 江戸時代	落込み36, 土坑35, 柱列A・B	土坑1・2・8・9 落込み45	・落込み45から安土桃山～江戸時代の遺物出土
室町時代	溝45, 土坑46, 土坑48, 柱穴49・50・52・53,	土坑11・13, 柱穴19・22 土坑30	
鎌倉時代以前	土坑54・62・63・64・67	柱穴35, 土坑37・38 溝49, 柱穴43	・溝49は三条大路北築地内溝か

戸，志野・鼠志野などの美濃産施釉陶器，唐津焼，軟質施釉陶器，銭貨や金属製品等がある。志野焼の向付と信楽焼の水指の蓋のみがほぼ完形の状態で出土した。特に，信楽焼の水指の蓋は落込み45中央に集中している。

落込み45の底面には，第2面として調査を行った整地層の黒褐色泥砂が面的に確認できる。その上に，上面が平らになるように，厚さ0.1mほどの黒褐色や黄色系の泥砂やシルト（北壁7層，拡張部東壁3・4層）を敷いている。この土層上面に張り付くように多くの遺物が出土した（図19）。これらの遺物の上に黒褐色や黄色系のシルト（北壁5・6層，東壁1・2層）を盛って遺物を埋め込んでいる。この遺構は三条通沿いに位置しており，大型の土坑等とは考えにくい。また，平面形状や掘削深度，埋土の土質を勘案するならば，この落込み45は整地である蓋然性が高い。

5．遺　物（図20～25，表3）

現地調査終了時点において，コンテナ箱にして15箱の遺物が出土した。時期は平安時代前期から～江戸時代までのものが含まれ，種類としては土師器・須恵器・瓦・瓦器・国産施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器・土製品・石製品・金属製品などがある。出土遺物は小片のものが多い。ただし，第2区の落込み45より出土した遺物は，遺存状況が比較的良好であり量もまとまって出土している。

（1）1区の出土遺物（図20・21）

【第4面】

土坑54　1～4は土師器皿Nで，口径は1が8.2㎝，2が9.6㎝，3が10.4㎝。5は高坏の脚部。6は緑釉陶器の皿。7は瓦器椀で，口径は16.6㎝。8・9は白磁の碗である。

土坑63　10～14は土師器皿N，14は同皿Sである。口径が10が8.2㎝，15は9.6㎝。

土坑67　15～17は土師器皿Nで，口径は15が13.8㎝。15・16は土坑67よりも古い遺物であり，他の遺構等に由来する遺物の混入と考えられる。

【第3面】

表３　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
江戸時代	土師器・須恵器・陶磁器・骨製品・石製品など		106点		
室町時代	土師器・須恵器・陶磁器など		38点		
鎌倉時代以前	土師器・須恵器・陶磁器など		26点		
合　計		17箱	167点（４箱）	6箱	7箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランク遺物の抽出、詰め直しのため、出土時より2箱多くなっている。

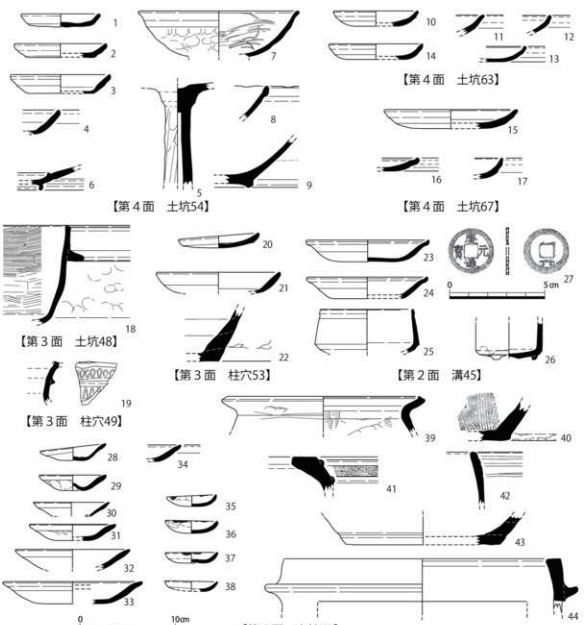


図20　１区出土遺物実測図１（１：４，27のみ１：２）

土坑48　18は瓦器の羽釜である。口径は復元できないが，器高は10.4㎝以上である。

柱穴49　19は灰釉陶器の壺の頸部と考えられる。断面三角形の突帯を貼り付け，上下に沈線で菱形の文様を描く。

柱穴53　20・21は土師器皿Ｎで，口径は20が8.3ｍ，21が12.8㎝。22は備前焼の鉢である。

【第２面】

溝45　23・24は土師器皿Ｓ，25は黄瀬戸の椀か向付で，26は美濃産の香炉である。26は外面に鉄釉がかり，底部には貼り付けた小型の脚がつく。27は南宋の慶元通宝で，初鋳は1195年。

土坑46　28～34は土師器皿Ｓで，口径は28と29は6.8㎝，30は7.8㎝，31は8.8㎝，32は11.8㎝，33は14.4㎝。35～38は土師器皿Ｎで，口径は35が5.1㎝で36～38は5.4㎝である。39は土師器の羽釜，40は信楽焼の擂鉢である。41～44は瓦器である。41・42は火鉢，43は鉢，44は風炉で口径は29.0㎝。

【第１面】

土坑35　45は土師器皿Ｓで，口径は12.4㎝。46は焼塩壺で器高9.7㎝で口径は4.8㎝。

落込み36　47は土師器皿Ｎで，48～50は同Ｓである。口径は47が5.8㎝，48は10.6㎝。51

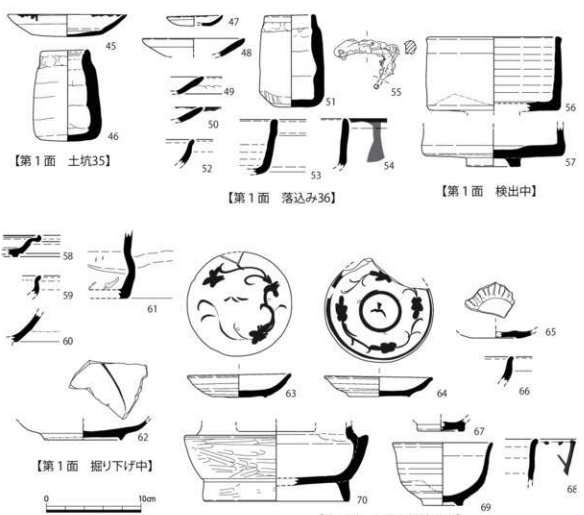


図21　１区出土遺物実測図２（１：４）

は焼塩壺で，器高は9.8㎝，口径は5.2㎝。52は美濃産の鉄釉天目茶碗。53は志野焼の大鉢や大皿と考えられる。54は軟質施釉陶器の碗である。内面は黒色釉，外面は白化粧の上に緑釉で文様を描く。55は鉄製の鏃と考えられる。

検出中　56・57は瀬戸黒の茶碗である。56は口径13.4㎝，57は底径5.6㎝で，高台部は張付けである。いずれも腰部から口縁にかけて垂直に立ち上がる。

掘り下げ中　58～60は美濃産の施釉陶器で鉄釉がかかる。58は折縁皿，59・60は椀。61は瀬戸黒の茶碗である。腰は口縁に向かってほぼ垂直に立ち上がるが，下部がやや膨らんだ形状をとる。62は黄瀬戸の皿。削り出しの高台を有し，全体の様相は不明だが線刻により文様を描く。

【その他】

第１面上層土層除去中

この遺物は，第１面より上層の遺構・整地土掘り下げの際に出土した。63～68は美濃産の施釉陶器である。63・64は美濃産の鉄絵丸皿である。口径は63が11.2㎝，64が10.8㎝である。65は折縁ソギ皿。66・67は鉄釉の天目茶碗。68は志野焼の茶碗と考えられ，全体像は不明ながら鉄絵が確認できる。69は唐津の碗で，口径は10.4㎝。70は瓦器の鉢で，口径は15.7cm，底径は14.6cmである。

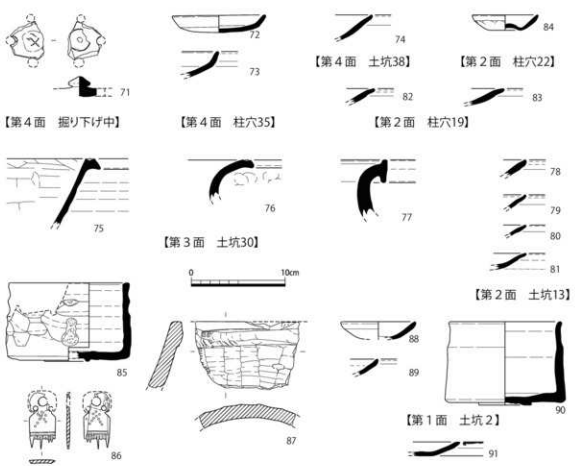


図22　２区出土遺物実測図（１：４）

（2）2区の出土遺物（図22～25）

【第4面】

掘り下げ中　71は緑釉陶器の香炉の蓋である。宝珠形のつまみが付き，つまみの内側には「×」形の刻みが確認できる。また，宝珠つまみを中心に三方に円形の穿孔が確認できる。平安時代の前

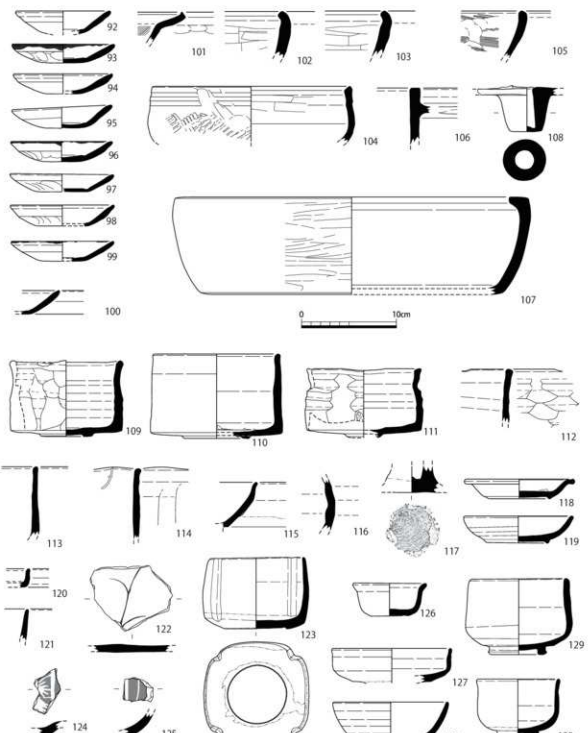


図23　2区落込み45出土遺物実測図1（1：4）

期の遺物と考えられる。

柱穴35　72・73は土師器である。72はⅢNで口径は9.8㎝である。

土坑38　74は土師器Ⅲ Sである。

【第３面】

土坑30　75は瓦器の鍋，76・77は焼締陶器の甕である。77は常滑産と考えられる。

【第２面】

土坑13　78～80は土師器Ⅲ Sである。81は白磁の皿である。

柱穴19　82・83はいずれも土師器Ⅲ Sである。

柱穴22　84は土師器ⅢNで，後掲は6.8cmである。

【第１面】

土坑１　85は瀬戸黒の茶碗である。貼付け高台を有し，腰部から口縁にかけてほぼ垂直に立ち上がる。胴部には面取りが確認できる。86は鹿角製の櫛払である。胴部には２㎜ほどの小さい円形のくぼみがあり，頭部には中央に１㎝ほどの円形の穿孔があり，その両斜め下にも0.5㎝程の円形の穿孔が認められる。87は石鍋である。

土坑２　88・89は土師器Ⅲ Sで，口径は88が7.8㎝。90は瀬戸黒の茶碗で器高は8.9㎝で口径が11.7㎝。腰部からほぼ垂直に口縁まで立ち上がる。高台は削り出しである。

土坑９　91は土師器Ⅲ S。口径は復元できない。

落込み45　92～104は土師器である。92～100はⅢ Sである。口径は92が9.8㎝，93が10.0㎝，94が10.2㎝，95が10.4㎝，96が10.6㎝，97が10.8㎝，98が10.8㎝，99が10.8㎝。101は焙烙，102・103は火鉢である。104は灰器で，外面下部にはタタキ痕があり，口縁部付近には沈線が巡る。端面は内傾する面を有する。口径は20.6㎝。

105～108は瓦器である。105は鉢，106は羽釜，107は火鉢の体部で108は火鉢の脚部である。107の口径は33.2㎝。109～114は瀬戸黒の茶碗である。いずれも腰部から口縁に向かってほぼ垂直に立ち上がり，高台は張り付けである。109・111・112・114のみ面取りされている。109は器高8.0㎝，口径11.4㎝，底径5.4㎝。110は器高9.5㎝，口径13.0㎝，底径6.8㎝。111は器高7.3㎝，口径11.8㎝，底径3.6㎝。

115～117は美濃産の施釉陶器で，いずれも鉄釉がかかっている。115が天目茶碗，116が壺の胴部，117は花瓶の脚部と考えられる。118は灰釉の折縁皿で口径は11.2㎝。119は二次被熱を受けており釉の色調等が変化しているが，長石釉の丸皿と考えられる。口径は11.4㎝である。削り出しの高台が付き，その内側に窯道具の痕跡が３点残る。120～122は，志野焼の皿と考えられる。122は内面のみ長石釉がかかっており，その下に鉄絵が確認できる。123は志野焼の角向付である。四隅が輪花状を呈する。底部は碁笥底である。器高は7.6㎝，底径は6.4㎝，一辺は9.8㎝。124・125は鼠志野である。小片のため器形は不明である。126は小杯である。器高は3.5㎝，底径4.0㎝，口径は7.6㎝。二次被熱を受けており，釉の色調等が変化しているが，器形などから黄瀬戸と考えられる。

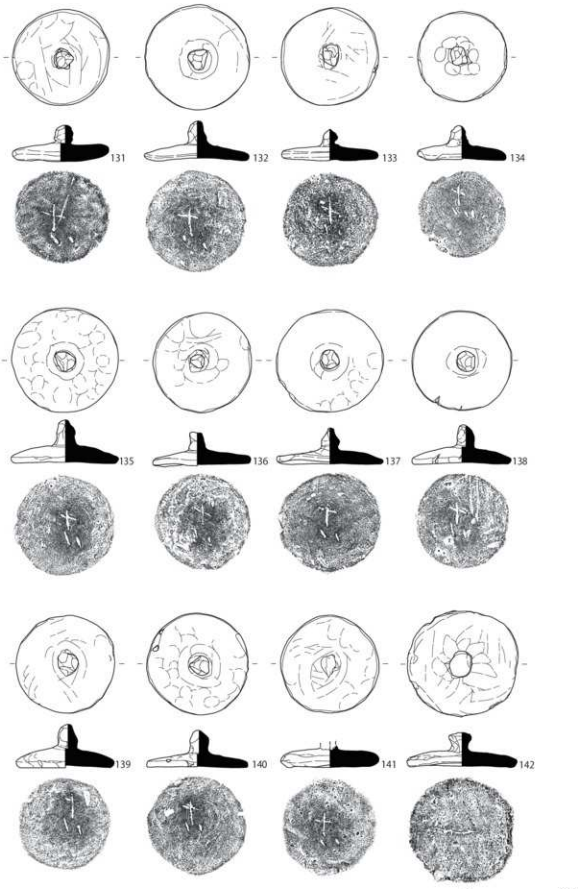


図24　2区落込み45出土遺物実測図2（1：4）

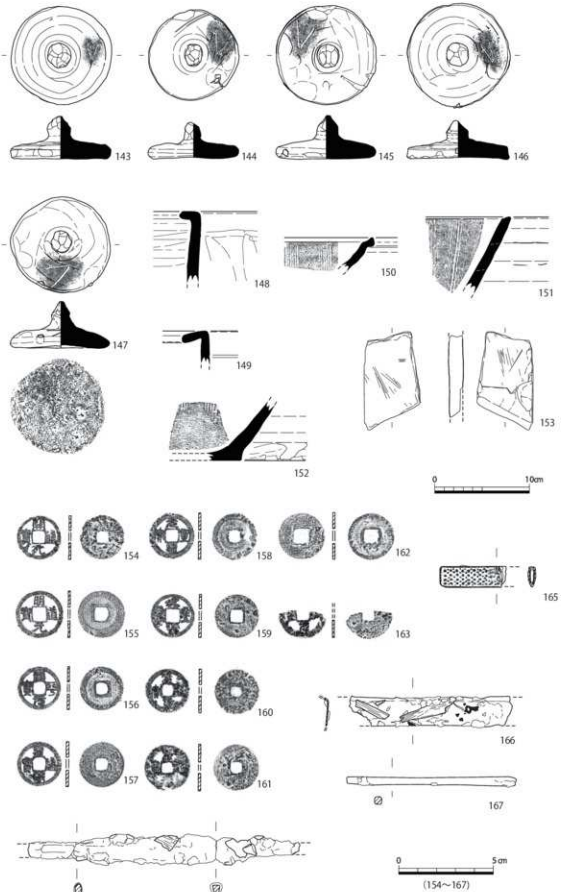


図25　2区落込み45出土遺物実測図3（1：4，1：2）

127・128は唐津焼である。127は皿で口径は12.4㎝。128は丸碗で口径は11.8㎝。

129・130は軟質施釉陶器である。129は高台の端部や内外側面をも含む全体に黒釉がかかっている。口径は10.0㎝，底径は5.6㎝，器高は8.1㎝である。130は，内面は黒色釉，外面は白化粧の上に緑釉で文様を描く。口径は8.5㎝，底径は4.0㎝，器高は6.5㎝である。

131～152は信楽焼である。131～147は水指の蓋で，131～141は「十」と「ハ」が組み合わさった様なヘラ記号が確認でき，143～147は「V」形のヘラ記号が確認できるが142のみヘラ記号がない。径は131が10.2㎝，132が11㎝，133が10.2㎝，134が9.4㎝，135が11.4㎝，136が11.6㎝，137が10.6㎝，138が11.2㎝139が10.4㎝，140が10.4㎝，141が10.6㎝，142が10.4㎝，143が10.4㎝，144が9.6㎝，145が10.5㎝，146が10.8㎝，147が10.0㎝である。148～152は信楽焼である。148・149は水指，150～152は擂鉢。153は砥石である。

154～163は銅銭である。154が唐の開元通宝，155が北宋の明道元宝，156が北宋の治平元宝，157が北宋の皇宋通宝，158～160が北宋の元豊通宝，161が北宋の宣和通宝。164・165は小柄である。164は鉄製品で錆膨れが激しいが，断面で三角形を呈する刃と思われる部分が確認できる。165は銅製品で片側のみ斑点状の模様が施される。166は全容が不明だが，鍍金が施されており，飾金具の可能性がある。167は銅製品で，箸や火箸と思われる。

6．まとめ

本調査では，2つの小規模な調査区を設けたが，平安時代後期から江戸時代までの遺構面が比較的良好に遺存しているのを確認し，各時期の土地利用の在り方を多少なりとも明らかに出来た。その中でも，2区の第1面で確認した落込み45は特筆される。

この落込み45は，立地や土層の堆積状況，規模，形状から敷地の整備等に伴う整地と考えられ，この中から安土桃山時代～江戸時代にかけての遺物が一定量まとまって出土した。周辺のいわゆる三条せと物や町付近では，これまでに多くの「桃山茶陶」の出土が確認されているが，いずれも宅地の裏側に位置する廃棄土坑から出土している。本調査では，それとは立地や性格が異なる遺構から遺物が出土しており，今後の周辺域での調査を行う上で注目される。

また，本調査では三条せと物や町の範囲内において，初めて御幸町通以東で関連する遺構・遺物を確認した点も大きな成果といえる。『洛中洛外図屏風』（富山・勝興寺本）では，寺町通と三条通の交差点の南西角付近に店先に焼き物を並べる店が2軒描かれているものの，これまでの周辺での調査では，御幸町以東でその展開を伺わせる遺構・遺物は確認されていなかった。しかし，本成果により，絵図に描かれた通りに三条せと物や町が御幸町通以東まで展開していた可能性が高まった。今後の周辺での調査の蓄積，そして絵図等との総合的な検討によって周辺域での更なる実態の解明が期待される。

（熊井　亮介）

註

1）土岐市美濃陶磁歴史館『洛中桃山のやきもの』，1997年。

Ⅲ　白河街区跡

１．調査の経緯と経過

調査地は左京区聖護院山王町に所在し，周知の埋蔵文化財包蔵地「白河街区跡」に該当する。当地において個人住宅の建設が計画され，令和３年５月21日付けで文化財保護法第93条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」がなされた。

届出を受理した本市文化財保護課は，令和３年６月24日に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施し，遺跡が遺存していることを確認したため，同年８月２日付けで記録保存のための発掘調査が必要な旨を通知した。事業内容に鑑み，本件は国庫補助事業として対応することとなり，10月４日から11月16日に発掘調査を実施した。実働日数は延べ30日間で，調査面積は200㎡である。遺構面は試掘調査の成果から３面とし，各面において遺構の図化，写真撮影等の記録を作成した。各面の遺構や遺物包含層からは平安時代後期から江戸時代の遺物が多量に出土しており，現地調査終了後の令和４年１月５日から，図面整理及び遺物の抽出と図化をおこない，報告書の作成を進めた。

２．遺　跡

（１）立地と歴史的環境

調査地は鴨川の東，いわゆる鴨東地域の一画に所在する。調査地周辺は白川と高野川が形成した複合扇状地であり，東から西へと緩やかに低くなっていく。白河街区跡一帯は平安時代中期には藤原氏など貴族の別業の地として開かれているが，本格的な開発は平安時代後期の承暦元年（1077），調査地南東の岡崎地域において，白河天皇による法勝寺造営を契機に開始される。岡崎

図１　調査位置図（１：10,000）

図２　調査前全景（北東から）

図３　作業風景（北西から）

には法勝寺を中心として，天皇や女院の御願寺が相次いで建立された。「勝」の字を名に持つ寺院が六箇寺並ぶことから，これらは六勝寺と総称される。この寺院群を核に，平安京の条坊街区に類似した方格街区が敷かれ，この中には白河上皇の院御所である白河北殿や白河南殿も造営された。白河北殿は今回の調査地の西に位置したと推定されている。保元の乱（保元元年〔1156〕）の際には，白河北殿が崇徳上皇の院御所であったことから，主戦場のひとつとなった。この街区が敷かれた推定範囲を埋蔵文化財包蔵地「白河街区跡」として周知している。また，岡崎地域では白河街区跡の下層遺跡として，弥生時代から古墳時代の集落遺跡も確認されており，「岡崎遺跡」として周知している。

この地域は幕末に再び歴史の表舞台に立つこととなる。付近一帯に有力諸藩の藩邸が築かれるのである。東方に所在する黒谷金戒光明寺に会津藩が本陣を置いたことは著名であるが，聖護院，岡崎地域にも多数の藩邸が置かれた。天保２年（1831）刊行の「京町絵図細見大成」（図４）では熊野神社の周辺は「畑」とされるが，慶応４年（1868）刊行の「改正京町御絵図細見大成」（図５）では「○○屋敷」と表記された敷地が多数描き込まれている。古絵図と現在の地割との対比は難しいが，聖護院周辺には阿波藩（蜂須賀家），三河吉田藩（松平家），盛岡藩（南部家），越前藩（松平家），彦根藩（井伊家），佐伯藩（毛利家），安芸藩（浅野家），加賀藩とその支藩である富山藩・大聖寺藩（前田家）などの屋敷を絵図に認めることができる。参照絵図によって，藩名の入れ替わ

図４「京町絵図細見大成」

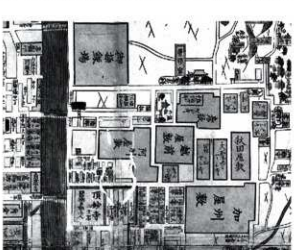


図５「改正京町御絵図細見大成」

りがあり，短期のうちに所有者が交代した屋敷地もあったようである。次項で触れるように，今回調査地の西側では，蜂須賀家の家紋瓦が出土しており，阿波藩邸が存在したと目される。「京町御絵図細見大成」においては，阿波藩邸の東，熊野神社の南である本調査地付近の敷地には「越前屋敷」と書かれており，越前松平藩邸があった可能性がある。

（2）周辺の調査

白河街区跡の域内では，法勝寺や尊勝寺などの六勝寺跡も含め，これまでに多数の発掘調査が積み重ねられてきた。近隣の調査事例に絞って，その成果を触れておく。

調査地の西側では京都大学文化財総合研究センターが2015年度に発掘調査を実施した（図6-調査9，以下「図6」を省略）。ここでは，縄文土器や平安時代以前の遺物が多数出土したほか，鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物を検出，さらに幕末の阿波藩邸に関連すると推定される遺構・遺物を検出している。阿波藩邸と確定まではできていないが，蜂須賀家の家紋瓦が1点出土し，また幕末期の大規模な溝が検出されたことは，ここに藩邸があったと判断するに足る材料である。

さらに西側の琵琶湖疏水に面した3箇所の調査（調査13・14・15）では，平安時代後期の建物基壇跡や地業を検出している。白河北殿推定範囲の南端部ではあるが，北殿がさらに南にも広がっていた，あるいは南殿が北に広がっていた可能性も示唆する。一方，南西の調査区（調査16）では，近世の土坑を多数検出し，平安時代後期から中世の遺構の遺存状況は芳しくない。

東大路通よりも東では平安時代後期の遺構面が良好に遺存しており，とりわけ調査18では尊勝寺の観音堂と推定される建物跡を検出している。基壇，階段，一部の礎石，壺掘り地業が検出されており，その遺存状況は六勝寺内でも極めて良好な部類である。

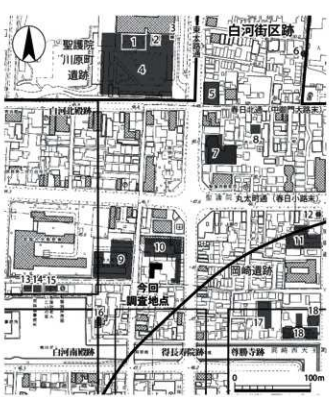


図6　周辺の調査地点（1：5,000）

以上のように，平安時代後期に活発な土地利用がなされたほか，先史時代の遺物や幕末の藩邸跡が注目される。なお，今回の調査区北東に隣接して，関西文化財調査会が発掘調査を実施した（調査10）。この調査は面積1,257㎡という比較的規模の大きいものであり，令和4年1月まで実施されたため，本報告書作成時点では整理作業が緒についたばかりである。おおむね今回の報告内容と同様の遺構・遺物を検出しているが，異なる様相を示す部分も多い。その具体的内容は整理作業の進行を待って詳らかになるだろう。

周辺調査事例に係る調査報告（調査番号は図６と対応）

調査１：浜崎一志・宮本一夫「京都大学病院構内AF19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和56年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，1987年。

調査２：千葉豊「京都大学病院構内AG20・AF20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1996年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，2000年。

調査３：阪口英毅「京都大学病院構内AF20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1999年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，2003年。

調査４：千葉豊ほか「京都大学病院構内AE19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2002年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，2007年。

調査５：梶川敏夫「白河街区跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成３年度』，京都市文化観光局，1992年。

調査６：百瀬正恒「白河街区１」『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1985年。

調査７：京都市埋蔵文化財調査センター「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成７年度』，京都市文化市民局，1996年。

調査８：石井明日香・小池智美『白河街区跡』イビソク京都市内遺跡調査報告第18輯，株式会社イビソク，2018年。

調査９：冨井眞・内記理「京都大学熊野構内ZZ18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2017年度，京都大学文化財総合研究センター，2019年。

調査10：報告書作成中（令和３年度　関西文化財調査会実施）。

調査11：持田透・小池智美『白河街区跡・岡崎遺跡』イビソク京都市内遺跡調査報告第５輯，株式会社イビソク，2013年。

調査12：尾藤徳行・竜子正彦「歓喜光院（96KS111・130）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成８年度』，京都市文化市民局，1997年。

調査13：報告書作成中（平成27年度　関西文化財調査会実施）。

調査14：財団法人京都市埋蔵文化財研究所「白河北殿跡」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2011年。

調査15：上村和直「白河北殿跡」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財発掘調査概要』，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1983年。

調査16：財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『白河南殿跡　文化庁国庫補助による六勝寺関連の発掘調査の概要』，京都市文化観光局，1980年。

調査17：上村和直「尊勝寺跡」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1991年。

調査18：水谷寿克・竹原一彦「尊勝寺跡発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第23冊，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター，1987年。

3．遺　構

（1）基本層序

調査区の東壁断面については，南側12ｍ分は東壁面を図化したが，調査区を縦断する断面図を作成するため，北側８ｍ分は第１面で東壁の延長線上に設定したアゼを利用した。そのため，東壁北側分については地表面から第１面までを図化できていないが，他の箇所と同様の堆積状況であった。調査地の現地表面は標高47.0～47.1ｍで，おおむね平坦である。厚さ0.4～0.6ｍ程度の盛土が全域に堆積し，その除去面で近世末から近代初頭の整地と思しき黒褐色砂泥層となる（北壁２層・東壁１層）。その除去面は黒色砂泥となる（北壁５層・東壁４層）。この層は下面の攪拌が著しいが，これは耕作に伴うものと考えている。攪拌を受けているオリーブ褐色泥砂層（北壁６層・東壁５層）を除去したGL-1.0～-1.2ｍ程度，標高46.0ｍ付近を第１面と設定した。この面の基盤となるのは，ほ

図７　調査区位置図（１：1,000）

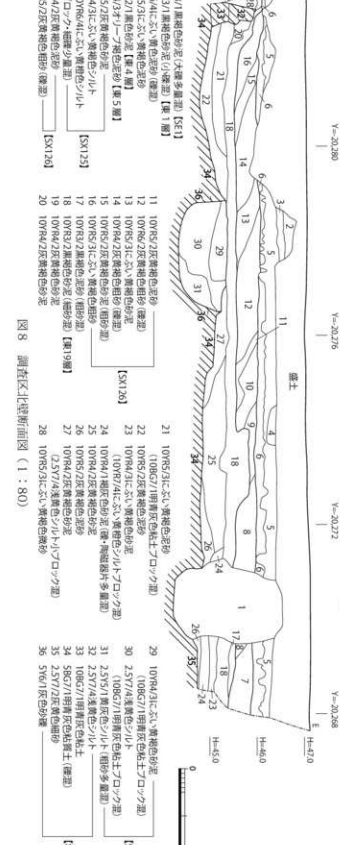


図８　調査区北壁断面図（１：80）

ぼ全域でSX125～129・133～138の埋土で，これらが地点によって砂質から固く締まったシルト質までの土質差がある。なお，調査区北西隅ではやや強めに表土剥ぎをおこなったため，第1面の検出時点で浅黄色シルトの地山（北壁32層）が見え始めており，中世以前も含めた本来的な遺構面は46.0mよりもさらに高いレベルにあった可能性が高い。第2面は上述したSX125～129・133～138の埋土除去面で，おおむね45.55m程度であり，細砂を含んだ黒褐色砂泥層（北壁18層・東壁19層）が全面に広がる。黒褐色砂泥層は土取り穴の埋め戻し土と判断しており，土取り埋め戻し土の除去面を第3面とした。第3面は地点により大きなレベル差があり，最も深くなった調査区南端では44.4m，浅くなった調査区北側では45.3mである。基盤となるのは礫をやや多く含んだ明青灰色粘質土（北壁34層・東壁39層）である。第1面段階で地山を確認できた調査区北西隅部では，本来の堆積状況を確認できる。ここでは46.0mで浅黄色シルト（北壁32層），45.4mで明青灰色粘土（北壁33層）と礫を含まない堆積土が確認でき，これが本来の堆積である。これらの土が採取の対象となり，礫が混じり始めた深さで採取をやめたのだと推測できる。

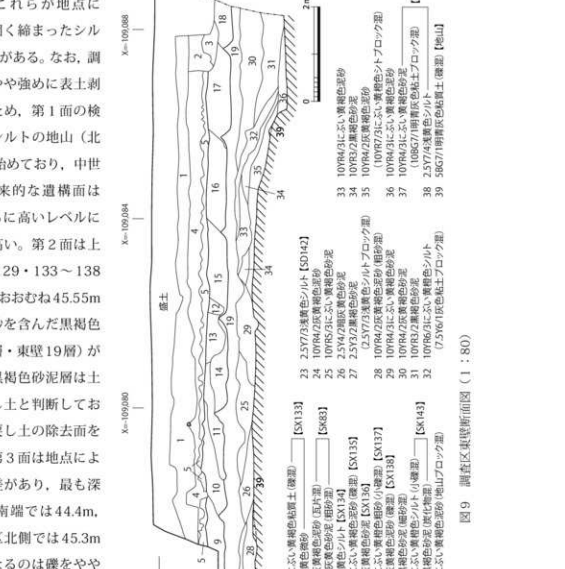


図9　調査区基準断面図（1：80）

（2）遺　構

合わせて３面の遺構面を設定し，遺構の検出・掘削をおこなった。その結果，平安時代後期から江戸時代までの遺構を多数検出した。大半は江戸時代以降の遺構である。以下にその概略を報告する。

表１　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代	SE144	
江戸時代中期	土取り穴及び埋め戻し跡（SX125 ～ 129・133 ～ 138），SE139，SK140，SK141，SK143，Pit146	
江戸時代後期以降	SE１，SK83，SD100	

第１面

小ピット群　第１面で検出した遺構は大半が小ピットである。柱当たりは検出できず，単層で直径0.3～0.4m程度のものがほとんどである。耕作土が第１面の上層に堆積しており，大半のピットの埋土は耕作土と同じ黒褐色砂泥であることから，これらは耕作土上面から打ち込んだ杭などの痕跡だと考えている。

SE１　調査区北東で検出した井戸である。第１面と設定した面よりも上面から掘り込まれている（図８）。壁際で検出した遺構であり，壁面の崩落を防ぐため，南半のみを完掘した。成立面から掘削底までの深度は2.3mで，標高44.2m付近，地山面よりも深くに到達している。石組み等は確認できなかったが，埋土中に拳大の礫が多量に含まれており，近世の瓦や陶磁器のほか，平安時代後期から鎌倉時代の瓦片も出土した。古い遺物を含むものの，遺構としては19世紀中ごろ以降のものと考えている。

SK83　調査区南半東壁際で検出した土坑である。東半は調査区外となるため，全体形状・規模は不明で，検出範囲では南北0.95m，東西0.5m，深さは検出面から0.4mである。出土遺物には瓦が多いが，すべて平安時代後期から鎌倉時代のもので，近隣の掘削に伴い土中から出土したものをまとめて廃棄したものか。遺物からの絞り込みができず，遺構の帰属面からの推定だが，19世紀以降のものと考える。

SD100　調査区南端で検出した東西溝である。東壁の堆積状況からは１層下面で成立していることが分かり（東壁２・３層），第１面とした面よりも上位からの掘り込みである。埋土には花崗岩片を多く含み，とりわけ溝の立ち上がり際に破片が多かったことから，花崗岩による石組み溝だった可能性がある。隣接する関西文化財調査会による調査区（図６-調査10）の南端付近，SD100のほぼ延長線上で同様の溝を検出しており，連続する可能性がある。道路側溝や区画溝として機能したものかもしれない。

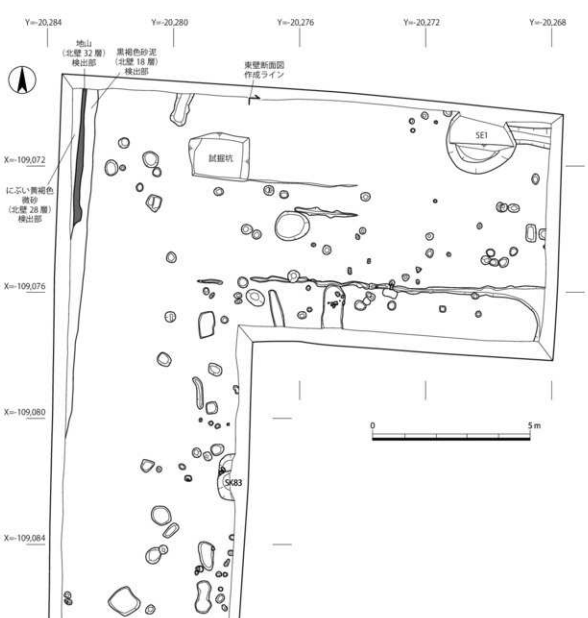


図10　第1面平面図（1：120）

第2面

SE139　調査区北東部で検出した井戸である。本来は1面に帰属するものと思われる。検出面での直径は約2.0mだが，北東側には掘方が広く，径約3.0mとなる。断面形状は逆凸字状に途中で一回り小さい直径1.5m強となり，掘削底は44.8mである。石組みなどは確認できなかった。埋土からの遺物は少ないが，18世紀後半以降のものと判断できる土師器皿が出土しており，少なくとも江戸時代中期以降に埋没した遺構である。

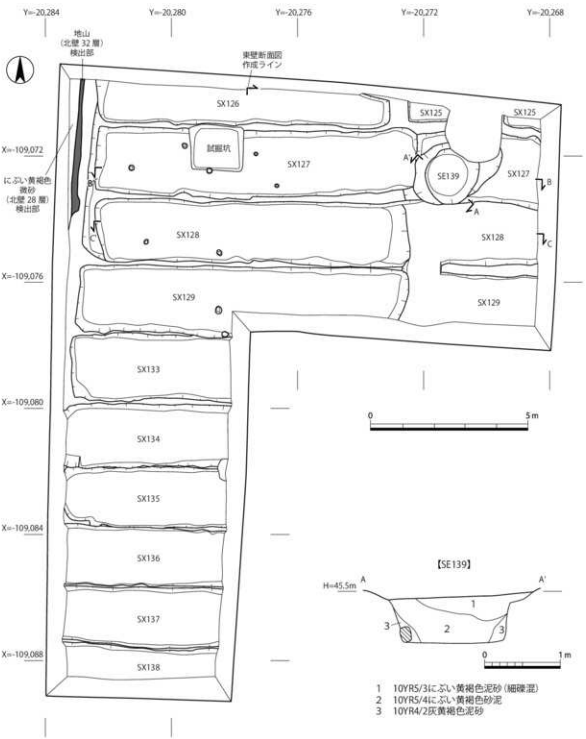


図11　第２面平面（１：120）・SE139断面図（１：50）

SX125～129・133～138　第１面時点で認識できた基盤土の違いを遺構として取り扱い，掘削を進めた。その結果，土の境目付近に下部の黒褐色砂泥が畔状の高まりとして残ることとなった。したがってSX125～129・133～138は第１面で認識できた土の違いであり，かつ畔状の高まりによって区画された単位でもある。礫質の土とシルト質の固く締まる土が交互に東西方向の帯状に堆積する。東壁で確認すると，これらは南から先に堆積し，北に向かって埋められていったことが分かる。おおむね畔状の高まりで土質が変わるが，一部高まりを越境する箇所もある（東壁17層

など)。SX127・128は東西方向にも堆積状況を確認した（図12)。ここでは西から東へと順に埋められていったことが確認できた。埋土からは平安時代から江戸時代までの幅広い時代の遺物が出土したが，最も新しいものは18世紀後半ごろに位置づけられる染付椀であるため，埋められたのは少なくともこの時期以降である。これらの土の違いは埋め戻しの過程を示すものであるが，このような埋め戻しが何を意図したものかは判然としない。礫質土とシルト質土を交互に積む工法は戦国時代の山科本願寺跡の土塁[1]や豊臣秀吉によって築かれた御土居の構築に用いられたことが判明しており[2]，これらは土塁構築上の崩落を防ぐことを意図したものとされる。礫質土とシルト質土を交互に埋め戻すことによって，地盤の安定が一定程度図れるのであろうか。土取り穴埋め戻し土における事例は確認できていない。これらの下面に堆積する黒褐色砂泥及びその下層堆積土から出土した遺物との年代差はなく，地山上面から第１面まであまり時を空けずに埋められたと判断している。そのため，「第２面」とした面は生活面といった類のものではなく，埋め戻しのある段階でごく短期的に形成された作業単位と認識している。

第３面

土取り穴　調査区のほぼ全面が土取り穴である。深度は地点によって異なり，南端がもっとも深いT.P.44.4mに達する。深度の違いは採取対象となった土の堆積深度の違いであろう。北壁断面（図８）で見たように，礫を含まないシルト・粘土を採取したのであろう。土取り穴は調査区西壁際で，北でやや東に振った傾きで平面直線状に立ち上がる。同様の立ち上がりは，隣接する関西文化財調査会の調査区（図６-調査10）でも検出できている。土取り行為について，地割による制約や直線

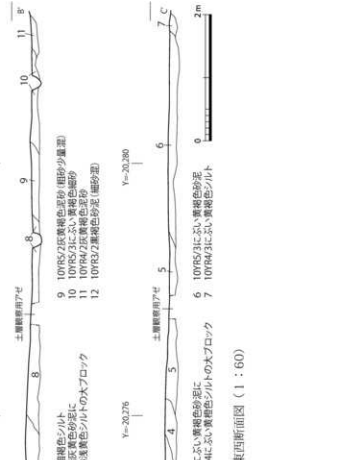


図12　SX127・128東西断面図（１：60）

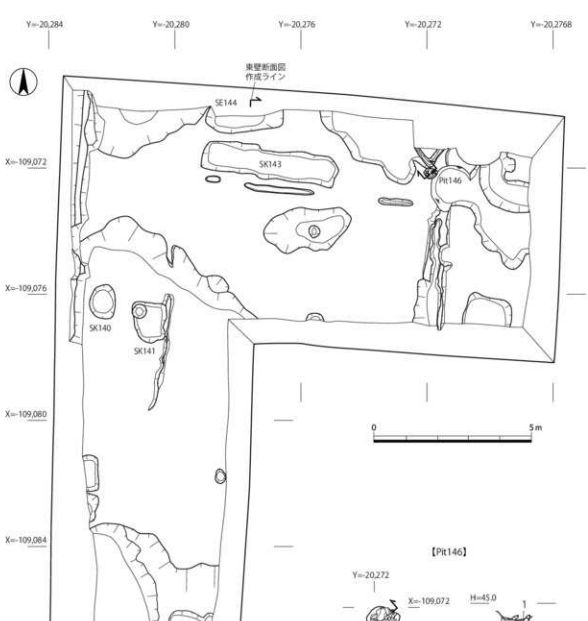


図13　第３面平面（１：120）・Pit146平・断面図（１：50）

的に区画された範囲内でおこなうなどの制約が課せられていた可能性がある。第２面のベースとなっていた黒褐色砂泥及びその下層堆積土から出土した遺物は「第２面掘り下げ」時のものとして取り上げ，これが土取り埋土の包含遺物である。土取り埋土はそれほど締まりのよくないものであったが，最下面には茶褐色の土が薄く固着するように堆積していた。掘削の後，すぐに埋め戻さず，口の開いた期間があったのかもしれない。

SE144　調査区北壁際で検出した遺構である。掘方は方形で，遺構北側が調査区外となるため，全

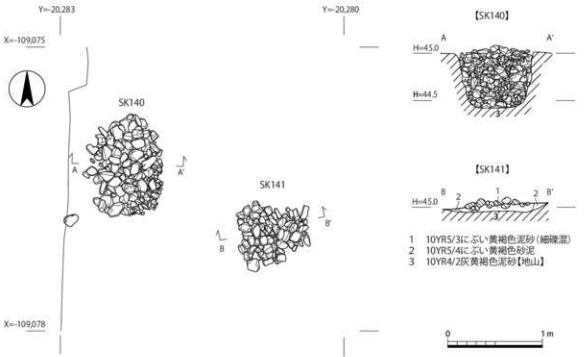


図14　SK140・141平・断面図（1：40）

体規模は不明である。東西方向は2.3mで，検出面からの掘削深度は約1.0mで，掘削底は44.35mである。掘方の形状と，掘削深度から井戸と判断した。出土遺物はわずかだが，12世紀前半ごろの土師器が出土しており，確実に13世紀以降と判断できる遺物が出土していないことから，平安時代後期の遺構の可能性が高い。

Pit146　調査区北東部で検出した直径0.37mのピットで，検出面からの深度は0.31mである。埋土には拳大の礫が多数含まれていた。

SK143　調査区北半中央付近で検出した南北0.95m，東西4.3mの長方形の土坑で，検出面からの深さは0.38mである。土取り埋土の下面で検出した。埋土には炭化物や焼土が含まれていた。18世紀後半から19世紀の遺構である。

SK140　調査区西側中央で検出した土坑である。土取り埋土の下面で成立する。南北1.1m，東西0.75mの楕円形で掘削深度の0.6mまで拳大の礫が充填されていた。平安時代後期から鎌倉時代の瓦片が多数含まれていたが，備前焼の灯明皿も出土しており，遺構そのものは18世紀以降のものと考えている。

SK141　SK140の東側で検出した土坑である。土取り埋土の下面で成立する。南北1.27m，東西1.0mの範囲に拳大の礫が多数含まれていた。0.1m弱の浅いレンズ状の堆積だが，北西部が直径0.4m，深さ0.3mのピット状にへこむ。18世紀以降のものと判断できる染付椀が出土した。

取り上げた遺構のうち，SE144の本来の成立面（平安時代後期の遺構面）は第3面より高く，土取りによって上部を作成された可能性が高い。しかし，他の遺構はその規模がそれほど大きくなく，今回の検出面が本来の成立面と大きく隔たっていないと推定できる。

4．遺　物

平安時代から江戸時代までの幅広い時期の遺物がコンテナで32箱分出土した（表2）。細片や丸瓦・平瓦片が多く，また整理作業期間の制約から，箱数に比して図化できた資料の数は少ないが，土器・陶磁器と瓦それぞれについて概略を記す。

表2　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
～平安時代中期	土師器，緑釉陶器，灰釉陶器，軒丸瓦，軒平瓦，丸瓦，平瓦		緑釉陶器１点，灰釉陶器４点		
平安時代後期～室町時代	土師器，須恵器，瓦器，陶磁器，軒丸瓦，軒平瓦，丸瓦，平瓦，鬼瓦		土師器９点，瓦器１点，白色土器１点，焼締陶器１点，軒丸瓦９点，軒平瓦17点，丸瓦１点，鬼瓦１点		
江戸時代	土師器，陶磁器		土師器12点，陶器11点，白磁２点，染付・色絵20点		
合　計		36箱	90点（３箱）	１箱	32箱

※　コンテナ箱数の合計は，整理に伴い，A・Bランク遺物を抽出したため，出土時より４箱多くなっている。

（１）土器・陶磁器

１～６は第１面のSE１から出土した。１は施釉陶器で灯明皿である。釉薬は灰色で貫入が目立つ。２は施釉陶器筒形椀で，釉薬は淡黄色を呈する。３は磁器の小椀で，口縁端部がわずかに外反する。外面には赤色で海老を描く。４は色絵の椀である。染付に赤絵，金彩を施しており，高台は外に開く。５は色絵の蓋で，花弁部分が赤絵である。６は青磁染付の鉢で，口縁部が外反する。SE１の出土遺物には，多量の陶磁器が含まれていた北壁24層の遺物が混じり込んでいる可能性が高く，18世紀代の資料を含むものの，遺構としては19世紀中ごろ以降のものと想定している。

７・８は第１面からの掘り下げ中に出土した遺物である。第１面の基盤層はSX125～129・133～138の埋土であるため，出土状況からは９～20と埋没時期に大きな開きはないと判断する。７は瓦器小壺である。丸みを帯びた体部から，口縁部をわずかに直立させる。鎌倉時代ごろのものか。８は灰釉陶器皿である。底部から体部への立ち上がり部分は，平面的に見ると直線的であり，耳皿の可能性が高い。９はSX127から出土した染付椀である。底部が厚く作られる。18世紀後半に帰属する。10～13はSX129から出土した。10は土師器皿N小で，鎌倉時代ごろ，11は土師器皿N大で，12世紀前半ごろのものと似通った形状である。12は灰釉陶器の底部で，いわゆる三日月高台である。13は備前産焼締陶器の擂鉢である。縁帯はさほど広くなく，15世紀前半ごろの所産と考える。14～17はSX134から出土した。14は素焼きで白色を呈する土器である。土師器皿Sの形状とするには違和感があり，白色土器高杯の口縁部とみる。内外面に墨書が残り，両面に黒色で方形の枠を，その内側に灰色で白抜きの「×」を描いている。意図等は不明である。口縁部のみであり，時期比定をためらうものの，13～14世紀ごろか。15～17は土師器皿Sの小皿で，３枚が重

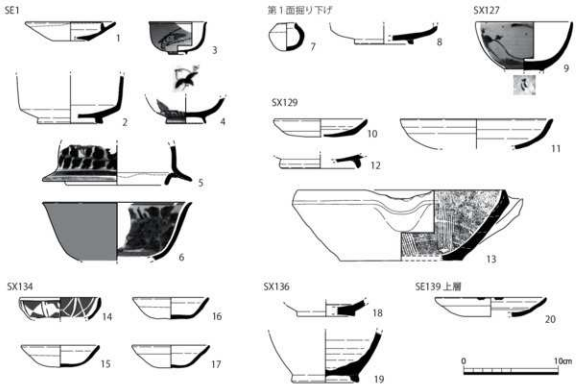


図15　出土土器・陶磁器実測図１（１：４）

なった状態で出土した（図版７－３）。上から15，16，17の順に重なっており，廃棄時にまとまっていたものだろう。口径は8.0cm前後で体部は外傾気味，口縁部がわずかに内湾するなどの特徴から14世紀中ごろのものとみる。18・19はSX136出土である。18は緑釉陶器椀で，削り出しの平高台，内面見込み部に沈線を引く。19は灰釉陶器の壺である。

20はSE139上層出土の土師器皿Sである。SE139は図化に足る資料に乏しく，年代の絞り込みには慎重とならざるをえないが，18世紀は遡らず，同世紀後半以降の所産であろう。

21～54は第２面掘り下げ時の出土遺物である。第２面を構成するのは，黒褐色砂泥層（東壁19層，北壁18層）を主とする。この層は前節で触れた通り，土取り穴の埋め戻し土と目される。21～30は土師器である。21～23は皿Nでいずれも口径6.0cm強と小ぶりである。24～29は皿Sで，見込みにはV字状の断面形状を呈する圏線を施している。資料によって形状にバラつきがあり，18世紀を主としてやや広い年代幅を持つと考えられる。27は体部がS字状に屈曲し，相対的に新しく見える。30は焙烙で，羽釜型を呈する難波分類A類のものである[3]。底部は外型を用いた型作りで，内面はナデにより平滑だが，外面は無調整で粗面を残す。鍔を貼り付け，口縁部は外折する。31～34は肥前系施釉陶器の椀である。31は明灰色の胎土に，灰緑色の釉薬を全面に掛ける。貫入が顕著で，高台は開き気味となる。32は灰白色の胎土で，外面には銅緑釉，内面には透明釉を掛け分ける。33は赤褐色の胎土に，緑を帯びた褐色の釉薬で，刷毛文を施す。34はそれよりも明るい黄橙色の胎土に赤みを帯びた褐色の釉薬を施し，内面見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎしている。35は施釉陶器の壺の類か。内面には褐釉，外面は露胎，底部は糸切り無調整である。36は施釉陶器の合子である。淡黄色の胎土で，内外面とも施釉している。底部に墨で「●」を描くが，意図は不

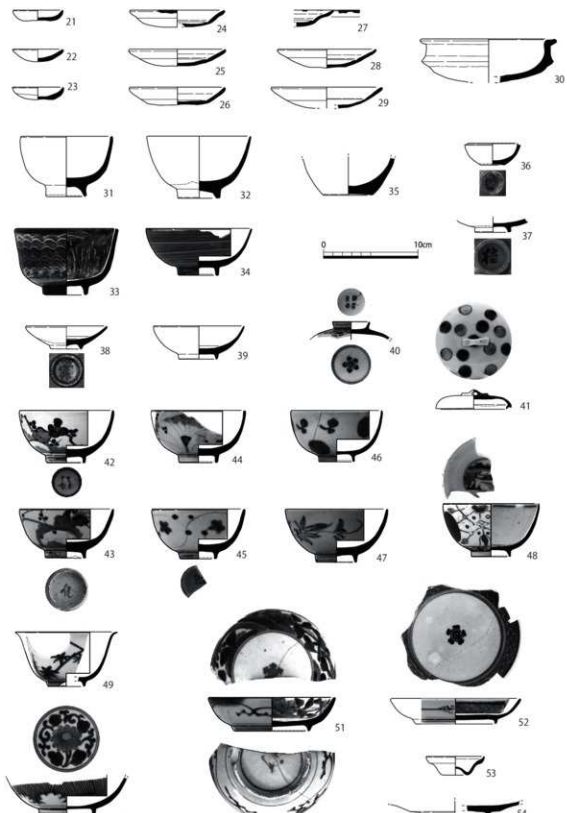


図16　出土土器・陶磁器実測図２（１：４）

明である。37は施釉陶器の椀（平椀か）で，灰緑色の釉薬，高台内に「桂」と墨書する。38・39は白磁の皿である。いずれも内面見込みを蛇ノ目状に釉剥ぎする。38は高台内に墨書が残り，「澤井□」と判読できる。40は染付の椀蓋である。高台内には「冨貴長春」の銘，見込みには五弁花を

描く。41も染付の蓋で，水玉模様を描く。42～49は染付の椀である。42～45は全体に器壁が厚く，とりわけ底部はかなりの厚さとなる。呉須の発色や胎土の色調もくすみが目立つ。46はコンニャク印判による施文で，器壁は相対的に薄い。47も染付の椀だが，釉調がわずかに緑みを帯びる。見込みを蛇ノ目状に釉剥ぎする。48は色絵の椀である。外面は赤と緑の上絵，見込みは呉須による山水文を描く。全体に器壁は薄く，地の部分も混りの少ない白色を呈する。49は染付の端反椀で，竹・タケノコを描く。50は染付の鉢である。高台は高く，底部は薄い。見込みには花文が描かれる。51・52は染付の皿である。51は見込みにコンニャク印判の五弁花，52は手描きの五弁花で，白抜きで波文を描く。53は土師器皿Sh，ほぼ完形である。８B段階に多く出土するものと形態が似通う。54は灰釉陶器の皿である。底部から大きく開く。これら２点は他の遺物との年代的な開きがかなり大きく，埋め戻し土への混入であろう。55は図化に耐えなかったため，写真で報告する。染付の椀で，十六弁の菊文を主文に，竹を従文様として描く菊御紋付染付，いわゆる禁裏御用品である。文様構成から18世紀代のものと考える。第２面掘り下げ時に出土した遺物は，年代幅を持ちつつもおおむね18世紀後半ごろに一定のまとまりを示す資料群であり，土取り後の埋め戻しがこの時期を大きくは下らないことを示唆するものである。

56～58はSK140から出土した。56は土師器皿Nで13世紀前半ごろ，57は皿Sで７段階後半から８段階前半（14世紀中ごろ）に出土するものとそれぞれ近い。58は備前産焼締陶器の灯明皿である。江戸時代のものだが，時期は詳らかにできない。

59はSK141から出土した染付の椀である。残存状況が悪く，遺存箇所をつなぎ合わせて復元したため，形状の正確性はそれほど高くない。

60はSE144から出土した土師器皿Nである。口縁部の調整は，4C～5A段階に出土するものに近い。SE144からの出土遺物はわずかだが，これよりも確実に時期の下がるものは含まれておらず，12世紀前半ごろの遺構である可能性が高い。

61・62はSK143から出土した。61は土師器皿Sである。体部から口縁部にかけて大きくS字状に屈曲する。14段階（19世紀）に出土する土師器皿と特徴が似通うものの，公家町以外では土師器の出土量が大きく減っている時期であり，単純に対比して時期決定をすることには慎重を期したい。62は施釉陶器の小壺で，淡黄色の胎土に，外面底部付近から口縁部内面まで褐釉を施す。

土取り埋土から出土した資料には広東椀や蛸唐草文の染付がなく，端反椀も少ない。遺構の埋没年代を19世紀まで下げるだけの積極的な根拠に薄いが，土取り埋土の底面で検出したSK143から出土した土師器は19世紀的な特徴を持っている。

図17　菊御紋付染付椀

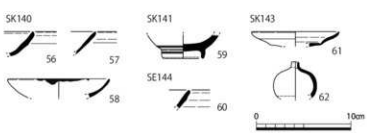


図18　出土土器・陶磁器実測図３（１：４）

（2）瓦

瓦1～9は軒丸瓦で，すべて山城産である。1は複弁六葉蓮華文で珠文帯に笵傷を認める。瓦当貼付けで，裏面から補足粘土を加えている。第1面の掘り下げ時に出土し，12世紀前半の所産である。2は複弁八葉蓮華文で，中房に「卍」を配している。瓦当貼付けで，裏面から補足粘土を加える。第2面の掘り下げ時に出土し，12世紀後半から13世紀のものである。3は複弁八葉蓮華文で，瓦当貼付け，第2面掘り下げ時に出土しており，12世紀後半から13世紀のものである。4～9は三巴文で，4・7・8・9は右巻き，5・6は左巻きである。4と5は外区に珠文が巡る。いずれも13世紀代のものである可能性が高い。4は瓦当貼付けで，SK140から出土した。5は接合部が欠損している。第2面掘り下げ時に出土した。6は瓦当貼付けで，第1面掘り下げ時に出土した。7も瓦当貼付けで，SX135から出土した。8は第2面掘り下げ時の出土で，瓦当貼付けの上，裏面から補足粘土を加える。9はSK140出土で，瓦当貼付けの上，裏面から補足粘土を加える。8と9は巴の尾の先端が接していることも共通した特徴である。

10は玉縁有段式の丸瓦である。胴部凸面に縄を巻き付けた叩き板の圧痕，凹面に布目が残る。SX129から出土し，12～13世紀の所産である。11は鬼瓦の破片である。珠文部のみが遺存しており，全体の大きさは不明である。平安時代後期から鎌倉時代の所産だが，それ以上に絞り込む材料には欠ける。SK141から出土した。

12～28は軒平瓦である。12～15は唐草文で，12のみ外区に珠文が巡る。12はSK140出土で，瓦当貼付け，山城産，11世紀後半から12世紀前半のものである。13は中心に上向きの唐草を配しており，12世紀前半の河内産である。瓦当貼付けで，平瓦部凸面には縄を巻き付けた叩き板の圧痕が残り，凹凸面に離れ砂が付着する。SX134から出土した。14も同じく12世紀前半の河内産で，中心に上向きの唐草を配する。SK140から出土した。15は12世紀後半から13世紀前半の播磨産であり，瓦当部は包み込み技法を用いて接合する。第2面の掘り下げ時に出土した。16～18は連巴文である。16は第2面掘り下げ時出土で，瓦当部を折り曲げ技法で成形する。産地は不明だが，12世紀代のものであろう。17はSK140出土で，中央に三巴を1つ，左右に二巴を3つずつ配し，さらに巴の間ごとに半截花弁を上下に配した文様構成を取る。段顎となるものも出土しており，平瓦凸面に縄を巻いた叩き板の圧痕が残るものもある。産地は不明だが12世紀中ごろのものと考えられる。18はSK141出土で，12世紀の山城産である。瓦当部は折り曲げ技法で成形しており，瓦当部にも布目が明確に視認できる。19は花弁文で，半截三葉花弁を上下交互に配する構成を取る。瓦当部は折り曲げ技法による成形で，山城産である。12世紀中ごろから後半のものか。第1面掘り下げ時に出土した。20は花弁文で，凹面側から凸面側に向かう花弁が左右に連続して配されている。瓦当部は折り曲げ技法による成形で，12世紀代の山城産である。第2面掘り下げ時に出土した。21～28は剣頭文である。21・22は中心に右巻き巴文を配し，瓦当部は折り曲げ技法，12世紀後半から13世紀前半の山城産である。21はSK141から，22は第2面掘り下げ時にそれぞれ出土した。23・24も折り曲げ技法で，12世紀後半から13世紀前半の山城産である。23は

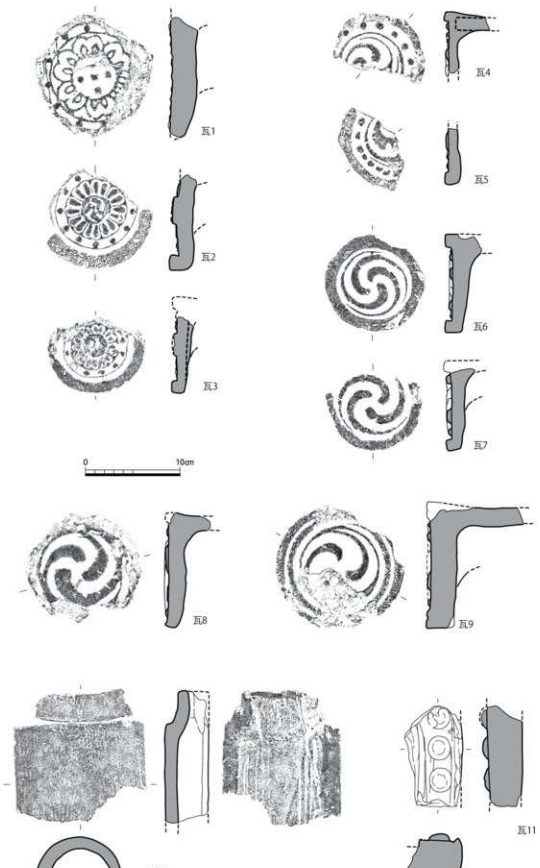


図19　出土瓦実測図（1：4）・拓影1

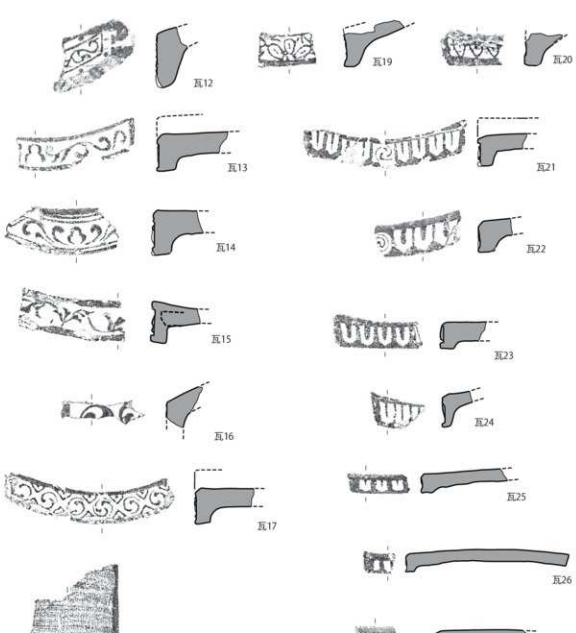


図20　出土瓦実測図（１：４）・拓影２

第２面掘り下げ時に，24はSK140からそれぞれ出土した。25・26・27も瓦当部折り曲げ技法で，山城産だが，瓦当部幅が縮小しており，13世紀代のものだろう。26は平瓦部が後端まで遺存しており，全長が13.7cmと判明する資料である。25は第１面掘り下げ時に，26・27は第２面掘り下げ時にそれぞれ出土した。28も剣頭文軒平瓦だが，中心に花弁状の文様を配している。瓦当部折り曲げ技法で，13世紀代の山城産である。SX129から出土した。

5. まとめ

今回の調査では，近世の大規模な土取り痕跡を確認した。土取り埋め戻し土には，平安時代後期から鎌倉時代の瓦や土器が多量に含まれていたほか，平安時代中期以前の緑釉陶器や灰釉陶器も出土した。大規模な土取りによって削平されているが，本来この地域は平安時代後期に六勝寺や白河北殿・南殿と一体で開発が進み，当地も密に遺構が展開したことを推し量るに十分な遺物量である。さらに遡る平安時代中期以前の遺物は，開発の本格化以前にも何らかの施設が存在した可能性を示す。平安時代中期以前の藤原氏別業の地としての鴨東は，現在までのところ発掘調査からはあまり具体像が示せていない。平安時代後期の発展を考えるためには，その下地となった中期以前も重要であり，今後も周辺の調査成果を注視したい。

土取り穴の埋め戻し土に含まれた遺物は18世紀後半を下限としており，埋め戻しの時期はそこから大きく遡らない可能性が高い。土取り穴埋め戻し土の除去面でも近世の遺構を確認した。埋土からは18世紀よりもやや新しく見える土師器皿も出土しているが，点数が少なく，埋め戻し土に含まれる遺物と時期が逆転しているとまでは言い切れない。現時点では，埋め戻し土に含まれた遺物から導かれた時期が埋め戻しの時期とみておきたい。

近世の大規模な土取りは，周辺の調査でも確認できている。図６で示した範囲では，調査16で近世の大規模土坑群を検出している。調査面積が狭く，報告書中では土取り穴とは確定していないが，今回の調査成果から，それらが土取り穴であった可能性を指摘しておく。調査１～４のさらに北側である，京都大学病院構内AJ18・AJ19区の調査[4]では，今回と同様の大規模な土取り痕跡を確認している（図21-SX5～11など）。ここでは黄灰色シルトを採取の対象とし，埋め戻し土中に含まれた遺物は18世紀後半を下限とする。さらに本調査区と同様に，平面が北で東に振る畔を複数残して土を採取しており，共通点が極めて多い。この畔は「既存の土地境界や水路，土手，畔などを破壊することな」いような「近世的な土地の管理状況が反映されたもの」とされる[5]。また，この調査では大規模土取り穴の底で小土坑を検出している。その性格については，掘削中に水脈に当たった際に穴底に水溜を作り，そこから水を汲みだしたのではないかとしている。今回土取り穴の底で検出したSK140やSK141は礫が充填されており，穴底の水を抜くためのものと考えると整合が取れる。ただし，京大病院構内AJ18・AJ19区では一部の土取り穴で，大規模区画の中に２～４m単位の小規模方形単位を検出し，作業単位とされているが今回の調査区では認められない。また，今回確認できたような，礫質土とシルト質土を交互に埋める工法は取られていないようである。近接した地域であり，おおよそ共通した採取法を採っているが，このような相違点もある。京都大学病院構内AJ18・AJ19区の報告中では，採取された土は粟田焼の原料となる「岡崎土」として売買されたと推測されている。一方，今回の調査区との間に位置する調査１～４でも近世の土取り穴群が検出されているが，上記AJ18・AJ19区や本調査区ほど大規模なものではないようである。この地点には二代目尾形乾山が工房を構えたことが分かっており，また熊野神社に近接するという条件から，土地の利用状況が大きく異なっていた可能性が高い。

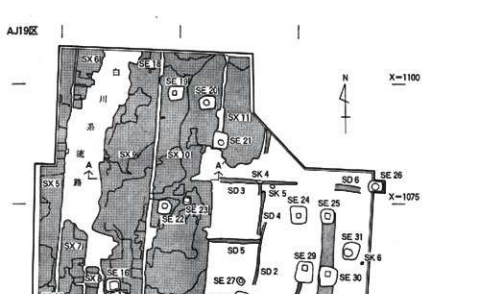


図21　京都大学病院構内AJ19区平面図（1：800）※註4文献より引用

土取り穴が埋め戻された後の19世紀中ごろ以降には，幕末の動乱の世相を受け，一帯に次々と藩邸が築かれていく。大規模に土を採取できるほど広く，人が居住していない土地があったことがその背景にあることは間違いない。藩邸であったことを直接的に示す遺構・遺物は検出できなかったが，藩邸が築かれるにいたる土地利用のあり方が判明したということは重要である。鴨川を挟んで御所が近くにあるにもかかわらず，洛中と異なり十分な広さの土地があった鴨東の地はにわかにその重要性を高めたのである。

鴨東地区には幾度も大規模開発の波が押し寄せている。発掘調査によってその痕跡を見つけ，つなぎ合わせていくことで，この地域のたどってきた歴史についての叙述もより奥行を持ったものになっていくだろう。

（新田　和央）

註

1）柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成23年度』，京都市文化市民局，2012年。

2）南孝雄「埋蔵文化財調査」『北野天満宮史跡御土居　史跡等・登録記念物・歴史の道整備事業　報告書』，宗教法人北野天満宮，2014年。

3）難波洋三「市坂の土器作り」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1986年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，1989年。

4）五十川伸矢・浜崎一志・伊東隆夫「京都大学病院構内AJ18・AJ19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1986年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，1989年。

5）五十川伸矢「土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ―京都大学病院構内遺跡の調査―』，京都大学埋蔵文化財研究センター，1991年。

Ⅳ　山科本願寺南殿跡　（第９次・第10次）

１　調査に至る経緯と経過

（１）調査に至る経緯

本件は，山科本願寺南殿跡（以下，南殿跡）において実施した発掘調査２件に係る報告である。

調査地は，ともに京都市山科区音羽伊勢宿町26-5に位置する（図１）。史跡山科本願寺跡及び山科本願寺南殿跡に接する区画で，南殿の内郭を囲む堀付近に推定される。

令和２年12月にこの区画において個人住宅の建設が計画され，埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当課は，上記により遺構の残存が見込まれることから本発掘調査が必要であると判断し，令和３年１～２月に，計画建物範囲を対象として発掘調査を実施した（第９次調査）。その際，掘削調査は計画建物の基礎深度までとしたが，その後，一部に地盤改良の必要が生じため，令和３年４月に改めて下層の追加調査を実施した（第10次調査）。調査年度が異なるため調査次数を分けたが，範囲が重複することから本稿にてあわせて報告する。

（２）調査の経過と調査方法

調査面積は，第９次調査が240㎡，第10次調査がこのうちの24㎡である（図２）。

第９次調査の現地調査期間は，令和３年１月25日～２月15日，第10次調査は令和３年４月27

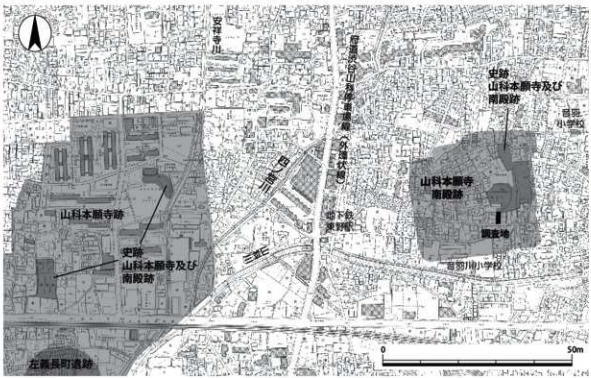


図１　調査位置図（１：10,000）

日～5月14日である。

第9次調査は調査区を南北に分割し，まず北半部にあたる1区を，続いて南半部にあたる2区の調査を実施した。1区では，重機（バックホウ）を用いて表土，盛土，近現代堆積土の除去を終えた後，人力にて遺構検出を行った。しかし，既存建物による撹乱が多く，遺構面の残存状態が不良であったことから再度重機を投入し，一段階深く掘り下げた（図3）。その後，人力掘削にて地山まで掘削を進め，計2面の遺構面を検出した（図4）。

一方，2区は土層の残存状態が良好であったため，重機掘削を近現代堆積層の除去に止め，近世包含層以下を人力にて掘削した。ここでは掘削深度の制限により，地山まで掘削を行わず，第1面のみの検出とした。

続く第10次調査では，第9次調査で未調査とした2区下層のうち遺構を確認した範囲を調査区とした。ここでは重機にて調査済み土壌を除去し，人力にて遺構検出と遺構掘削を行った。

検出した遺構面では，全景写真の撮影や検出遺構の個別写真撮影，平面図の作成，標高値の計測，遺構実測等，一連の記録作業を行った。また，直交する2方向の断面を図化し，土層堆積の記録保存を行った。出土遺物は，層序及び遺構ごとに収集し，登録した。なお，今回の調査では，1区第2遺構面においてUAVオルソ測量を実施した。

調査後の整理作業では，出土遺物の洗浄，選別（抽出），遺構図の精査，トレース，版組みを行い，報告書としての体裁を整えた。一連の作業は，本報告の刊行をもって終了した。

図2　調査区位置図（1：400）

図3　機械掘削状況（第9次）（北西から）

図4　遺構面検出状況（第9次）（北東から）

2　位置と環境

（1）遺跡の立地と地理的環境

山科区音羽伊勢宿町は京都市の東辺，山科盆地の北東部に位置する。音羽山の南麓に相当し，北東から南西へ緩やかに傾斜する地形にあたる。南には音羽川が西流しており，当地の南西にて四ノ宮川と，次いで安祥寺川と合流して山科川となり，宇治川から淀川へと繋がる。

かつては山城国宇治郡山科郷に属しており，平安京の近郷であることから，他国へ通じる複数の街道が設置された。東は近江国へ，西は京都盆地へ，南は宇治を経て大和国へと通じる主要な街道が交差する，まさに交通の要衝として発展を遂げた地域と言える。

古代から音羽という地名は存在したようであるが，その発祥は不明である。平安時代には「音羽荘」が設置され，中世以降は近隣の小山・竹鼻を合わせて「音羽郷」となり，山科七郷のひとつに数えられた。音羽郷は，応仁２年（1468）に清閑寺領となるものの，依然として山科七郷の領家的立場である山科家（藤原氏）の支配下にあったと考えられている。

南殿は，文明10年（1478）に山科盆地内の野村にて本願寺第８世蓮如が山科本願寺の造営を開始した後，延徳元年（1489）に蓮如の隠居所として設けられた邸宅である。本願寺の東にありながら南殿と称する由来は，東山大谷に本願寺が所在していた頃，本殿を北殿，隠居所を南殿と称したためと伝わる。蓮如の没後，南殿は天文元年（1532）におこった法華宗徒による焼き討ちにより，山科本願寺とともに焼失した。天文５年（1536），泉水山光称寺がその跡地に建てられたが，元亀元年から天正８年（1570～1580）に及ぶ織田信長との抗争の中で再び焼き討ちを受け，灰燼に帰した。光称寺はその後，南殿旧地の傍らに復興され，泉水山光照寺として現在に至るとされる。

（2）周辺の調査成果

昭和31年（1956），奈良国立文化財研究所庭園班により光照寺内に残る築山，苑池，建物基壇跡などの測量調査が行われた[1]。その結果，光照寺に残る「御在世山水御亭図」と一致する部分が極めて多いことが報告された。御在世山水御亭図は東を上にした縄張り図で，ここに描かれた南殿は，それぞれ堀と土塁に囲まれた内郭と外郭から成る。内郭には持仏堂や山水亭，これに連結する第二郭に事務所や井戸等が描かれる。二重の堀と土塁は外敵への備えを表し，この施設が中世の構えや館に共通する構造を持つことが窺える。

昭和62年（1987），周辺地域において広域水道工事が行われ，これに伴う立会調査において土坑及び２段積みの石積みが発見された（図５A地点）。これを物的証拠とし，絵図と光照寺の位置，現在の地形及び区画割を状況証拠として，現在の埋蔵文化財包蔵地は周知されている。以後，試掘調査が計20回（①～⑳），発掘調査が計８回行われている（第１次～８次調査）。

第１次調査は，平成13年度（2002）に外郭の北東部において実施された。その結果，現存する内郭土塁及び堀の延長部と，その北側に設けられた建物跡や溝，土坑等が確認された。遺構群は，室町時代後期に遡ることから南殿設営時のものと判断され，後の史跡指定へと繋がった。

表1　既往の調査一覧

次	調査番号	推定地	調査期間	種類	住所	調査遺構・出土遺物	調査機関	文献
1	01S241	内部土塁 内部堀 北外部	2001/11/12 ～ 2002/01/25	本調査	山科区音羽伊勢宿町 38-1　他	室町後期／土塁，堀，暗渠，建物，土坑，溝 江戸時代／土坑，溝，柱穴 出土遺物／土師器，瓦器，焼締陶器，施釉陶器，青磁，瓦，銭貨	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	出口 2003
2	06S016	南外部	2006/06/19 ～ 2006/07/13	本調査	山科区音羽伊勢宿町 26-6	室町後期／建物，土坑，溝 出土遺物／土師器，瓦質土器，須恵器，青磁，染付，弥生土器	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	平田 2007
3	13S429	南外部	2013/09/24 ～ 2013/10/31	本調査	山科区音羽伊勢宿町 26-3	室町後期／ピット，柱穴，土坑 江戸時代／ピット，土坑，溝 出土遺物／縄文土器，弥生土器，須恵器，瓦器，磁器，施釉陶器，焼締陶器，瓦	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	近藤 2014
4	14S279	内部土塁	2015/01/26 ～ 2015/02/20	本調査	山科区音羽伊勢宿町 32-102	室町時代／溝，瓦溜り，礫石 江戸時代／溝（湿地化） 出土遺物／土師器，焼締陶器，瓦，銭石	京都市文化財保護課	平田 2016
5	15S582	内部土塁	2016/05/09 ～ 2016/05/31	本調査	山科区音羽伊勢宿町 32-22	平安時代／ピット 室町時代／土塁，貼石 江戸時代／溝（湿地化） 出土遺物／土師器，焼締陶器，輸入陶磁器，国産施釉陶器，瓦	京都市文化財保護課	赤松 2017
6	18S578	内部土塁	2019/1/7 ～ 2019/1/18	本調査	山科区音羽伊勢宿町 32-11	室町時代／溝 江戸時代／溝 出土遺物／土師器，須恵器，白磁，施釉陶器，焼締陶器，染付	京都市文化財保護課	黒須ほか 2020
7	18S854	内部土塁	2019/04/08 ～ 2019/04/19	本調査	山科区音羽伊勢宿町 32-106	室町時代／溝 江戸時代／ピット，溝 出土遺物／須恵器，土師器，白磁，青磁，瓦器，瓦質土器，施釉陶器，焼締陶器，染付	京都市文化財保護課	黒須ほか 2020
8	18S815	内部土塁	2019/06/17 ～ 2019/07/05	本調査	山科区音羽伊勢宿町 35-52	室町後期／土坑 江戸時代／土坑，溝 出土遺物／須恵器，土師器，青磁，施釉陶器，焼締陶器，染付，銭貨	京都市文化財保護課	黒須ほか 2020
9	20H464	内部土塁	2021/1/25 ～ 2021/2/15	試掘	山科区音羽伊勢宿町 26-5	室町後期／土坑，溝，ピット，落込み 江戸時代／土坑，柱列，溝，ピット 出土遺物／土師器，陶磁器	京都市文化財保護課	本書にて報告
10	20H464	内部土塁	2021/4/27 ～ 2021/5/14	試掘	山科区音羽伊勢宿町 26-5	室町後期／溝 江戸時代／溝	京都市文化財保護課	本書にて報告
①	01003		2001/4/25	試掘	山科区音羽伊勢宿町 38-1,27-1	室町後期／整地層，ピット 出土遺物／陶磁器，瓦器	京都市文化財保護課	
②	02S053		2002/6/7	試掘	山科区音羽伊勢宿町 40 の一部	室町後期／落込み 出土遺物／土師器	京都市文化財保護課	
③	04S091		2004/6/28	試掘	山科区音羽伊勢宿町 32-19	室町後期／整地層 出土遺物／土師器	京都市文化財保護課	
④	05S305		2005/10/26	試掘	山科区音羽乙出町 12-3	江戸時代／包含層 出土遺物／縄文土器？	京都市文化財保護課	
⑤	06S749		2007/3/23	試掘	山科区音羽西林 33-2,33-5,33-10	時期不明／河川堆積 出土遺物／土師器	京都市文化財保護課	
⑥	07S314		2007.9.20	試掘	山科区音羽伊勢宿町 32-46	室町後期／整地層，土塁状の高まり 出土遺物／土師器	京都市文化財保護課	
⑦	08S264		2008/9/11	試掘	山科区音羽伊勢宿町 17,18-1,19-6	時期不明／土坑，ピット	京都市文化財保護課	
⑧	12S388		2013/2/22	試掘	山科区音羽 伊勢宿町 39-3	室町後期／整地層	京都市文化財保護課	
⑨	12S595		2013/2/21	試掘	山科区音羽伊勢宿町 39-2,40-5	室町後期／整地層，柱穴？，土坑 出土遺物／近世瓦	京都市文化財保護課	
⑩	12S596		2013/2/21	試掘	山科区音羽伊勢宿町 40-4	遺構・遺物なし	京都市文化財保護課	
⑪	12S597		2013/2/22	試掘	山科区音羽伊勢宿町 40-3	時期不明／河川堆積	京都市文化財保護課	
⑫	15S047		2015/5/7	試掘	山科区音羽伊勢宿町 32-104	室町後期／土塁状の高まり 出土遺物／土師器	京都市文化財保護課	
⑬	15S174		2015/9/7	試掘	山科区音羽伊勢宿町 14	遺構・遺物なし	京都市文化財保護課	
⑭	15S548		2016/1/25	試掘	山科区音羽初田町 4-1	室町後期／整地層，柱穴？，土坑 出土遺物／近世瓦	京都市文化財保護課	
⑮	16S497		2016/11/25	試掘	山科区音羽伊勢宿町 33-52	室町時代／整地層 出土遺物／土師器，施釉陶器	京都市文化財保護課	
⑯	17S744		2018/3/5	試掘	山科区音羽伊勢宿町 32-78	室町時代／包含層	京都市文化財保護課	

次	調査番号	推定地	調査期間	種類	住所	調査遺構・出土遺物	調査機関	文献
⑰	18S286		2018/12/20 ～ 2019/3/29	試掘	山科区音羽伊勢宿町 32-30,82	GL-0.25 mで室町時代包含層。	京都市 文化財保護課	
⑱	18S825		2019/3/29	試掘	山科区音羽伊勢宿町 32-54,32-85	GL-0.7 mで室町時代遺構面。 出土遺物／土師器	京都市 文化財保護課	
⑲	20S648		2021/1/29	試掘	山科区音羽伊勢宿町 32-54,32-85	GL-0.35 mで室町時代包含層，-0.45 mで地山。 出土遺物／施釉陶器，染付	京都市 文化財保護課	
⑳	21S043		2021/6/23	試掘	山科区音羽伊勢宿町 33-43	室町後期／溝 出土遺物／土師器	京都市 文化財保護課	
A			1987/04/01 ～ 1988/05/16	立会	山科区音羽伊勢宿町 地内	GL-1.4 mで土坑および2段積みの石垣を検出。 出土遺物／土師器，瓦質土器，須恵器，国産陶器，青磁，白磁，瓦	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	(財)京都市 埋蔵文化財研 究所1989

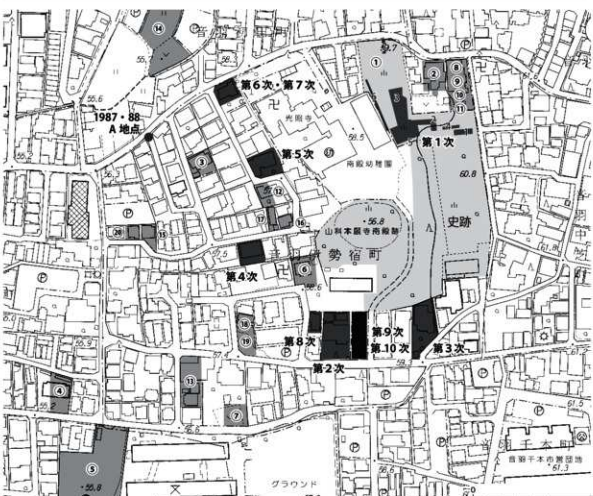


図5　既往の調査位置図（1：2,500）

第2次・第3次・第8次調査は内郭堀の南側において行われ，室町時代後期の建物，溝，土坑などが検出された。これにより，内郭の外（外郭内）にも居住空間が広がっていたことが明らかとなった。内郭北西角及び第二郭内郭で実施された第4次・第5次調査では，内郭の土塁と堀が屈曲して延びる状況が確認され，内郭の規模が南北約125m，東西約100mに及ぶことを示した。また，外郭を囲む土塁及び堀が想定された第6次・第7次調査では，屈曲して東西へのびる溝が検出され，外堀との関連が想定されている。

このほか試掘調査では，計11箇所で室町時代の整地層もしくは包含層が，計7ヶ所で溝や土坑，ピット等の遺構が確認されており，南殿の具体的な構造が明らかとなりつつある。

3．調査成果

（1）基本層序

現況の調査地は，南殿内郭に接する北から南へ向かって徐々に傾斜し，2区中央付近から南辺にかけて大きく下がる。また東から西へ向かって徐々に下がるため，階段状の宅地割がなされている。このため，北東部が最も高く，南西に向かって下がる微地形に立地している。現況地表面の標高は58.5～59.0mを測る。

基本層序は，近現代盛土，近世包含層，古代～中世包含層，河川堆積，無遺物層，地山である（図6）。古代～中世包含層は2区南半部にのみ残存しており，1区では確認できない。近世包含層の除去面が第1遺構面（近世遺構面），古代～中世包含層の除去面が第2遺構面（中世遺構面），黒褐色シルトの除去面が第3遺構面（時期不明遺構面）である。第1区では第2遺構面と第3遺構面を，第2区では第1遺構面と第2遺構面を検出した。

1区北半では，G.L.-0.45mまで盛土，-0.6mまで黒褐色粗砂混じりシルト，-0.9mまで拳大の礫を多く含む暗褐色礫混じりシルトが堆積し，以下，-1.4mまでにぶい黄褐色砂礫が続く。褐色粗砂混じりシルトを主体とする近世包含層は薄層で，遺構内にのみ存在する。黒褐色粗砂混じりシルト層はしまりが悪く，下層を巻き上げたブロック土と拳大の礫を少量含む。撹拌痕跡を僅かに認めるものの，混合物は僅かであり耕土とは考えにくい。続くオリーブ褐色砂礫はややしまりが悪く円礫を多く含む。河川の流入による堆積と推測されるが形成時期は不明である。

1区南辺では，G.L.-0.45mまで盛土，-0.55mまで近世包含層，-0.7mまで黒褐色粗砂混じりシルト，-1.15mまで暗褐色礫混じりシルトがあり，その下位ににぶい黄褐色砂礫が存在する。北半に比べていずれの遺構面も低く，第2遺構面がG.L.-0.6m，第3遺構面がG.L.-0.7m程度である。

この付近で下層確認を行ったところ，オリーブ褐色砂礫の河川堆積はGL-1.4mで途絶え，-2.0mまで褐色細砂混じりシルト，-2.3mまで固くしまったオリーブ褐色砂礫を確認した。いずれも水平堆積で遺物の出土は確認できなかった。自然堆積である。

2区中央ではG.L.-0.3mまで盛土，-0.6mまで近世包含層，-0.8mまで黒褐色粗砂混じりシルト，

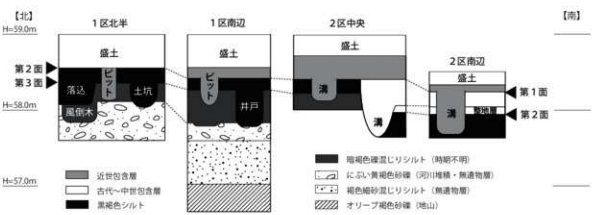
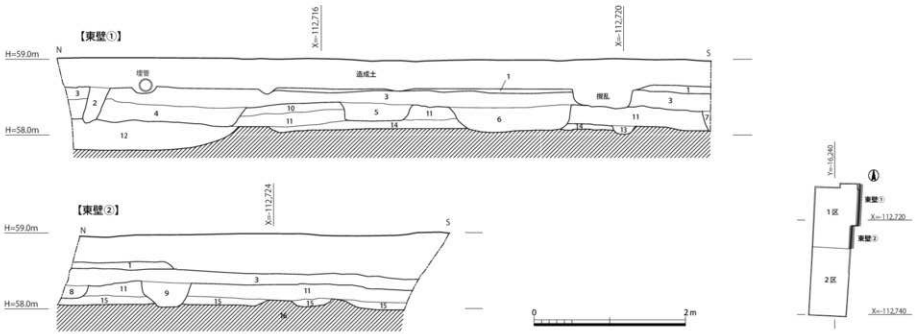
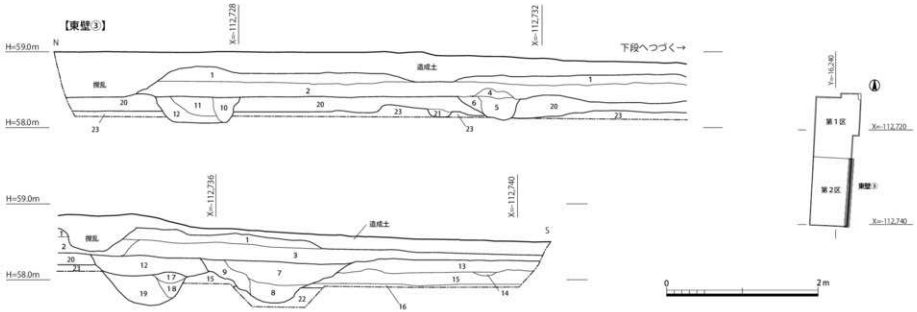


図6　基本層序模式図



1）10YR4/4　褐色粗砂混じりシルトに　10YR5/6　黄褐色シルトブロック2%程度入る
径5cm未満の礫少量入る　ややしまる［近世相当層？］
2）10YR4/4　褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る　しまり悪い（上面からの杭打痕）
3）10YR2/1　黒色粗砂混じりシルトに　10YR2/2　黒褐色シルトブロック10%程度入る
径10cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い　やや軟質
4）10YR2/3　黒褐色粗砂混じりシルトに　10YR4/4　褐色シルトブロック20%程度入る［溝40］
径10cm未満の礫少量入る　しまり悪い
5）10YR2/2　黒褐色粗砂混じりシルト　径10cm未満の礫少量入る　しまり悪い
6）10YR2/2　黒褐色粗砂混じりシルトに　10YR4/4　褐色シルトブロック5%程度入る
径10cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い
7）10YR2/2　黒褐色粗砂混じりシルトに　10YR4/4　褐色シルトブロック10%程度入る
径2cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い
8）10YR2/2　黒褐色粗砂混じりシルトに　10YR4/4　褐色シルトブロック2%程度入る
径10cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い
9）10YR2/3　黒褐色粗砂混じりシルト　径10cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い
10）10YR2/2　黒褐色粗砂混じりシルトに　10YR4/4　褐色シルトブロック5%程度入る
径3cm未満の礫少量入る　ややしまる
11）10YR3/3　暗褐色礫混じりシルト　径10cm未満の礫少量入る　ややしまる
12）10YR2/2　黒褐色粗砂混じりシルト　径20cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い
13）10YR3/2　黒褐色礫混じりシルト　径4cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い
14）10YR4/4　褐色礫混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る　しまり良い
15）10YR2/2　黒褐色粗混じりシルト　径5cm未満の礫多量入る　しまり良い
16）2.5Y4/4　オリーブ褐色砂礫［河川堆積］

図7　1区東壁断面図（1：50）



1）10YR4/4　褐色粗砂混じりシルトに　10YR5/6　黄褐色シルトブロック2%程度入る
　径5cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い
2）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る　土器片入る　しまり悪い
3）10YR3/2　黒褐色粗砂混じりシルトに　10YR3/4　暗褐色シルトブロック10%程度入る
　径2cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い
4）10YR5/4　にぶい黄褐色細砂混じりシルト　径1cm未満の礫微量入る　ややしまり悪い〔溝22〕
5）10YR3/3　暗褐色細砂混じりシルトに　10YR2/2　黒褐色シルトブロック10%程度入る
　土器片入る　径1cm未満の礫微量入る〔溝22〕
6）10YR3/3　暗褐色細砂混じりシルトに　10YR2/2　黒褐色シルトブロック30%程度入る　土器片入る〔溝22〕
7）10YR3/3　暗褐色礫混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い〔溝21〕
8）10YR3/3　暗褐色細砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　やや軟質〔溝21〕
9）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い　植物茎痕入る〔溝21〕
10）10YR4/4　褐色粗砂混じりシルト　径1cm未満の礫微量入る　しまり悪い
11）10YR3/3　暗褐色細砂混じりシルトに　10YR2/2　黒褐色シルトブロック30%程度入る　しまり悪い
12）10YR3/4　暗褐色礫混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い　掘削痕跡あり〔中世包含層〕
13）10YR2/1　黒色粗砂混じりシルトに　10YR3/4　暗褐色シルトブロック20%程度入る
　径2cm未満の礫少量入る　しまり悪い　土器片入る〔中世包含層〕
14）10YR3/3　暗褐色礫混じりシルト　径1cm未満の礫多量入る　しまり悪い
15）10YR3/4　暗褐色粗砂混じりシルトブロックと　10YR4/4　褐色シルトブロックの混合層
　径2cm未満の礫少量入る　しまり悪い〔中世包含層〕
16）10YR4/4　褐色シルトブロックと　10YR4/6　褐色シルトブロックの混合層〔遺構面基盤層〕
17）10YR4/4　褐色砂礫～礫混じりシルト　径5cm未満の礫多量入る　しまり悪い〔溝30〕
18）10YR3/3　暗褐色礫混じりシルト　しまり悪い〔溝30〕
19）10YR7/4　にぶい黄橙色礫混じりシルト～砂礫〔溝30〕
20）10YR2/2　黒褐色礫混じりシルトと　10YR2/3　黒褐色礫混じりシルトブロックの混合層
　径3cm未満の礫多量入る
21）10YR2/2　黒褐色礫混じりシルトブロックと　10YR2/3　黒褐色シルトブロックの混合層
22）10YR2/3　黒褐色礫混じりシルト　径10cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い
23）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルトに　10YR5/6　黄褐色シルトブロック2%程度入る
　径1cm未満の礫微量入る　しまり悪い

図8　2区東壁断面図（1：50）

以下，暗褐色礫混じりシルトとなる。この地点では地山は確認できていない。

２区では近世包含層が良好に残存し，一定の層厚を保つ。大きく褐色粗砂混じりシルトを主体とする上層と，暗褐色粗砂混じりシルトを主体とする下層に分別できる。両層ともに出土遺物は少ないものの，下層は染付片を含まないことから，近世前期の堆積である可能性が高い。この層を除去した段階で第１遺構面を検出した。

中世包含層は黒色礫混じりシルトと暗褐色シルトブロックの混合層で，上位は土壌化により黒色味が強い。この地点では掘削制限により中世遺構面を検出できていないが，調査区東際に設けた下層トレンチでは，遺構面が南へ向かってほぼフラットに連続することを確認した。

２区南辺では，G.L.-0.15mまで盛土，-0.25mまで近世包含層，-0.65mまで中世包含層，以下，黒褐色粗砂混じりシルトとなる。地山は確認できていない。

中世包含層の下面には，整地層と見られる褐色シルトブロックと褐色シルトブロックの混合層が存在する。中世遺構面はこの整地層の上面において成立している。

（２）遺構と遺物

第１遺構面（近世遺構面）

第１遺構面では溝とピット，礎石をもつ柱穴を検出した（図10）。

溝21　調査区南辺を東西方向に伸びる遺構で，調査区外へと続く。検出長8.0m，最大幅1.6m，最大深度0.5mを測る。断面形

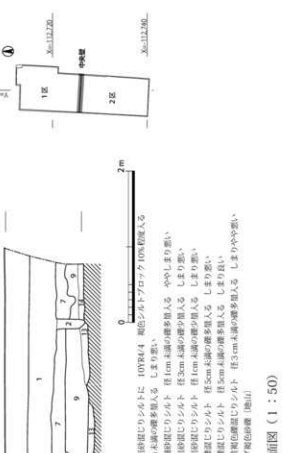


図９　中央壁断面図（１：50）

状は逆凸形を呈する。埋土は上下２層に分層でき，上層が暗褐色礫混じりシルト，下層が黒褐色粗砂混じりシルトを主体とする。断面形状と埋土の差異から，掘り直しがあったと推測される。

溝の底面は東から西へ僅かに傾斜しており，調査区東端で標高57.81m，西端で57.67mを測る。地形の傾斜に合わせた配水を目的とした施設であると考えられるが，埋土に顕著な流水痕跡が認められないこと，また下層の暗色化が進んでいることから，最終埋没期には滞水状態にあったと見られる。埋土からは，土師器甕，須恵器壺の小片が出土したが，いずれも基盤層からの混入であろう。層序の比較から中世末期～近世初頭に埋没した遺構と見られる。

溝22　溝21の北に位置する遺構で蛇行しながら東西へ伸び，調査区外へと続く。検出長8.1m，最大幅1.0m，最大深度0.58mを測る。断面形状は逆台形で両肩に崩落が見られる。埋土は褐色粗砂混じりシルトを主体とする上層と，暗褐色粗砂混じりシルトを主体とする下層に分層できる。上層は，近世包含層と同質である。下層はブロック土を多く含むことから，埋め立てられた可能性が高い。その後，肩部の崩落がおこっていることから，埋め立て後，窪地の状態で放置され，その後，自然に埋没したと見られる。

溝の底面はほぼフラットで，57.83m程度の高さである。排水施設ではなく区画溝と理解される。埋土の状況から，溝21とは埋没時期に差があり，こちらがやや遅れると見られる。遺構内からは，須恵器甕，土師器甕，皿，黒色土器椀等，古代の小器の小片が出土したが，溝21と同様，基盤層からの混入であると見られる。近世の遺構である。

柱列（柱穴25・26・27）　溝22の南側で検出した東西方向に並ぶ柱穴３基である。西端の柱穴25は，長径0.42m，短径0.35mの平面楕円形を呈する遺構で，断面形状は皿形，最大深度は0.07mを測る。底面中央に長辺0.23m，最大厚0.05mの平たい

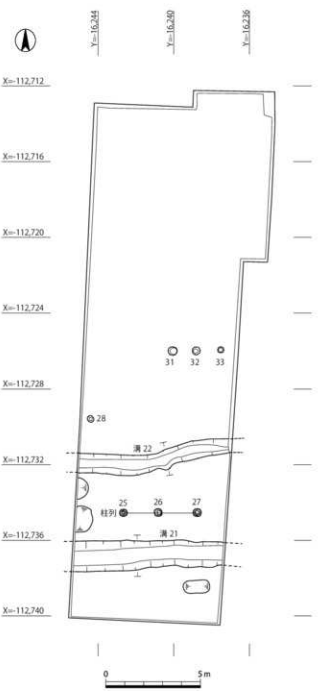
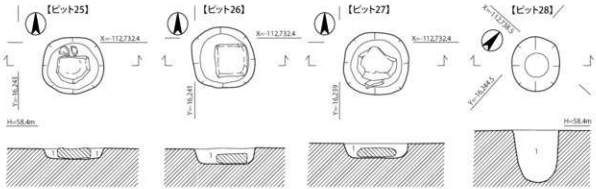


図10　第１遺構面全体図（１：200）

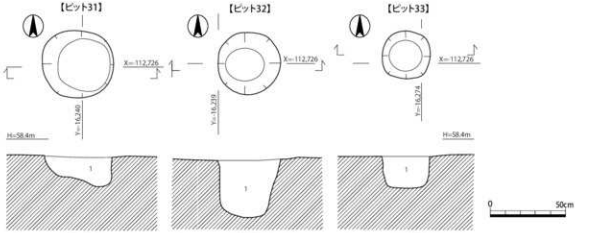


1）10YR4/4　褐色礫混じりシルト
径4cm未満の礫少量入る
しまり悪い

1）10YR4/4　褐色礫混じりシルト
径1cm未満の礫少量入る
やや軟質　しまり悪い

1）10YR4/4　褐色礫混じりシルト
径1cm未満の礫少量入る
やや軟質　しまり悪い

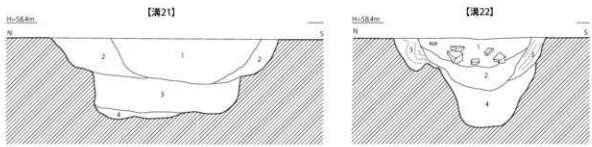
1）10YR4/4　褐色粗砂混じり
シルトブロックと
2.5Y5/4　黄褐色シルト
ブロックの混合層



1）10YR2/1　黒色礫混じりシルト
10YR4/4　褐色シルトブロック
少量入る　しまり悪い

1）10YR2/1　黒色礫混じりシルトに
10YR4/4　褐色シルトブロック
5%程度入る
径3cm未満の礫少量入る
ややしまり悪い

1）10YR2/1　黒色礫混じりシルト
10YR4/4　褐色シルトブロック
10%程度入る
径3cm未満の礫少量入る
しまり悪い



1）10YR3/4　暗褐色礫混じりシルトに
10YR5/6　黄褐色シルトブロック5%程度入る
径2cm未満の少量入る　しまり悪い
2）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い
植物茎痕入る
3）10YR2/3　黒褐色粗砂混じりシルト　径3cm未満の少量入る　しまり悪い
4）10YR2/3　黒褐色礫混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る　やや軟質
ややしまり悪い

1）10YR4/4　褐色粗砂混じりシルト
径5cm未満の礫多量入る　しまり悪い
2）10YR4/3　にぶい黄褐色粗砂混じりシルト
径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い
3）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルトブロックと
10YR2/2　黒褐色礫混じりシルトブロックの混合層
径1cm未満の礫少量入る　土器片入る　しまり悪い
4）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルト
10YR2/2　黒褐色礫混じりシルトブロック30%程度入る

図11　第1遺構面遺構平・断面図（1：25）

砂岩を礎石として置くほか，間隙に拳大の円礫を詰める。中央の柱穴26は長径0.42ｍ，短径0.35ｍの平面楕円形を呈し，断面形状は深みのある皿形，最大深度は0.09ｍを測る。底面東寄りに一辺0.23ｍの方形を呈する礎石を置く。東端の柱穴27は，直径0.43ｍの平面円形で，断面形状は皿形，最大深度は0.07ｍである。底面中央に長辺0.25ｍ，最大厚0.06ｍの礎石を置き，南側に角礫を詰める。埋土はいずれも褐色礫混じりシルトで，近世包含層と同質である。溝22とはほぼ同時期に埋没したと見られる。柱穴間の距離は1.9ｍで，さらに東西へ続く可能性がある。

第２遺構面（中世遺構面）

第２遺構面では落込み，ピット群，土坑，井戸，溝を検出した（図12）。

溝30　調査区南東部で検出した遺構である。検出長7.0ｍ，最大幅1.1ｍ，断面形状は深い椀形で最大深度0.45ｍを測る。北東－南西方向に直線的にのび，調査区外へと続く。埋土はにぶい黄褐色礫混じりシルト～砂礫で，径0.05ｍ未満の礫を多量に含む。底面はほぼフラットで，標高57.6ｍを測る。遺構の性格は不明であるが，礫が充填されることから暗渠等の可能性が考えられる。遺物の出土は確認できなかった。

落込み40　調査区の北東端で確認した落込みである。角度を持って北へ落ち，調査区外へと広がる。その比高差は0.2ｍ程度である。埋土は黒褐色粗砂混じりシルトに褐色シルトブロックを含む。流水痕跡や土砂の流入は認められない。当初，南殿内郭の堀の一部である可能性を考えたが，南へ湾曲すること，また堀とするには浅いことから現段階では落込みとした。なおこの下層には風倒木によると見られる大規模な窪みが存在する。遺物の出土は確認できなかった。

井戸54　調査区中央西辺で検出した遺構である。当初，大型土坑としたが，断面観察により井戸の貯水部と掘り方が識別でき

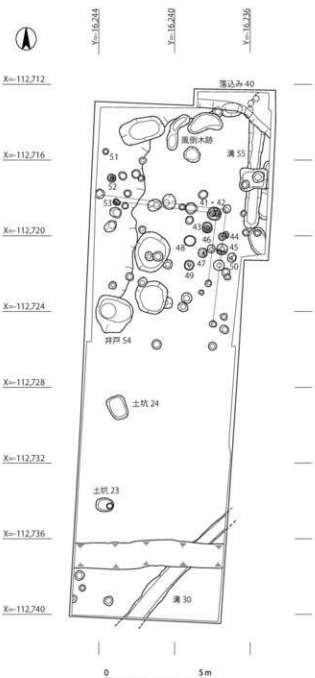


図12　第２遺構面全体図（1:200）

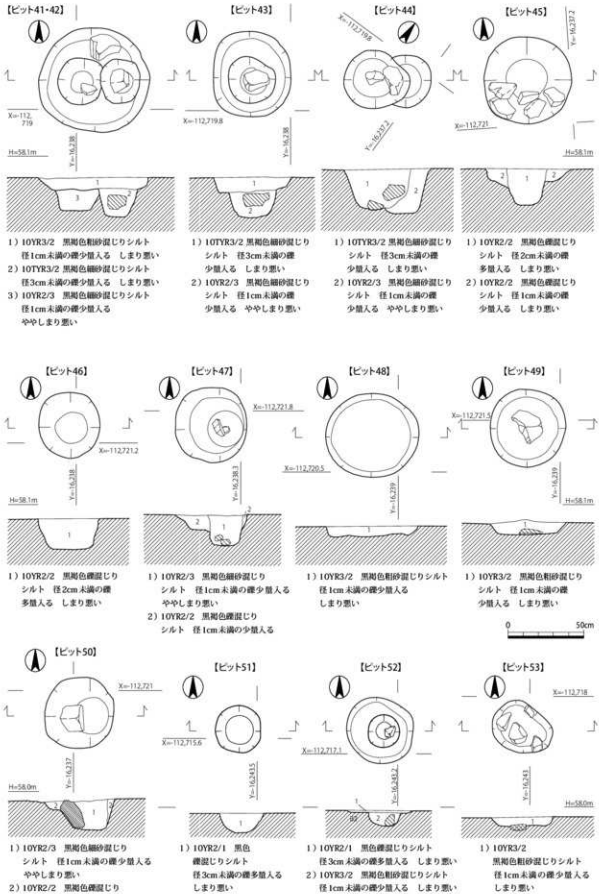


図13 第2遺構面遺構平・断面図1（1:25）

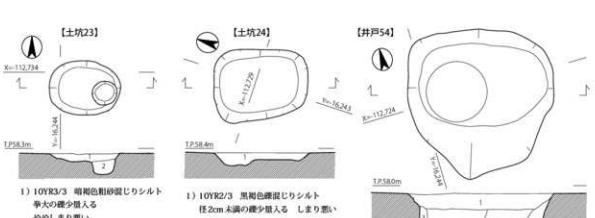


図14 第２遺構面遺構平・断面図２（１：50）

表２ 遺構概要表

時代	遺構	備考
中世以前	ピット，土坑，井戸，落込み	
中世	溝	
近世	柱列（柱穴），ピット，溝，土坑	柱穴は礎石を備える

表３ 遺物概要表

次	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
第９次	土師器，須恵器， 黒色土器，施釉陶器	1	0	0	1
第 10 次	土師器				
合計		1	０点（０箱）	0	1

ることから素掘りの井戸であると判断した。平面形状は不定形で，最大長2.0mを測る。掘り方の西寄りに貯水部があり，直径0.8 mの円形を呈する。最大深度は0.9mを測る。貯水部の埋土は黒褐色礫混じりシルトで拳大の礫を多量に含む。土質は単調で徐々に埋没したものではなく，短時間で埋め戻されものと見られる。埋土から遺物の出土は確認できなかった。

溝55 調査区北東端で検出した遺構である。検出長5.7m，最大幅0.8m，断面形状は皿形で，最大深度は0.15mを測る。溝の主軸は方位北に対して４度東へ振る。埋土は黒褐色シルトで，土質は単調である。基盤層である暗褐色シルト層に拳大の礫が多量に含まれることから，底面は礫敷と見紛う。遺構の性格は不明である。遺物の出土は確認できなかった。

4．まとめ

以上，山科本願寺南殿跡の調査成果を記述した。今回の調査では，土層の削平により遺構面の連続性が把握しにくかったこと，また出土遺物が極少量であるとともに混入品が多く見られたことから，各遺構面の存続時期を絞り込むことが困難である。このため，周辺の第２次・第３次・第８

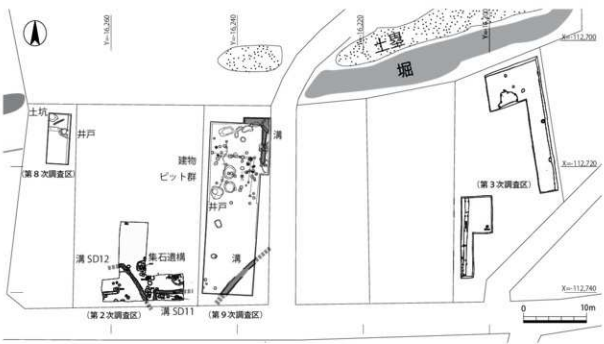


図15　周辺調査遺構面接合図（室町時代後期）（１：600）

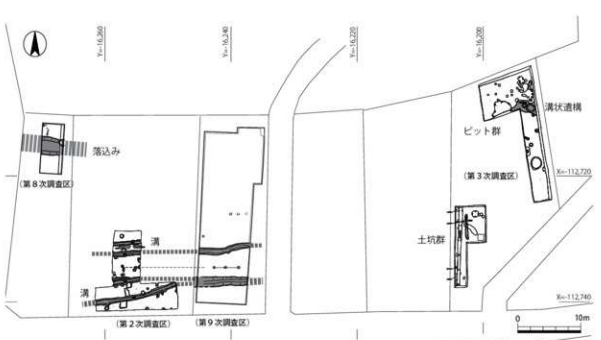


図16　周辺調査遺構面接合図（近世）（１：600）

次調査の成果を援用しながら，遺構の変遷について整理し，まとめとしたい。

今回確認した堆積層序には，いくつかの画期がある。確認しうる最も早いインパクトは古墳時代以前におこった自然河川の流入で，これによりもたらされた多量の砂礫が現地形の基盤層となる。第９次調査ではこの砂礫層に根を張った風倒木の痕跡が認められること，また第３次調査では砂礫の上部に自然堆積が発達することから，流入後しばらくは安定した環境が続いたとみられる。

やがて，平安時代に入ると人間の関与が顕著となる。遺物の出土量が急増するのは平安時代前期で，第２次・第３次・第８時・第９次のいずれにおいても須恵器，土師器の出土が一定量報告される。第９次調査では，この間に土坑やピット，井戸等が複数設けられている。細かい時期は不明であるが，当該時期の人々の起居を示す可能性があるといえよう。

室町時代後期には大規模な土地改変が行われる。第２次調査で検出された集石遺構や複数条の溝（SD11・12）は，15世紀の遺物を伴う遺構であり，南殿建設時のものと推測される。今回の調査では，SD11・12に類似する溝30を検出した。いずれも地形の傾斜に反して開削されており，給排水を目的とした施設とは考えにくい。溝30の内部には礫が充填されていたため本文では暗渠の可能性を示したが，遺構の連続性を重視するならば，地業等，開発に係るものである可能性も考慮すべきであろう。なお，南殿の内郭は礫を多量に含むシルトを搬入し，嵩上げして整形した平坦地上に展開する。今回の調査では堀等，南殿を構成する明確な遺構は確認できなかったが，大規模な造成痕跡は，南殿に係る造作のひとつとして捉えておきたい。

情勢が安定したと見られる近世には，当該地は居住域として利用された。今回の調査で検出した溝21・22は給排水を目的にしたと見られる施設で，第２次調査でも連続する遺構が確認されている。柱列も連続する可能性があり，より広い範囲にわたる遺構の確認が待たれるところである。

今後の調査成果に期待したい。

（黒須亜希子）

引用文献

森　蘊『中世庭園文化史』奈良国立文化財研究所学報第６冊，奈良国立文化財研究所，1955年。

出口　勲「Ⅰ山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成14年度』，京都市文化市民局，2003年。

平田　泰「Ⅳ山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成18年度』，京都市文化市民局，2007年。

近藤奈央「Ⅹ山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成25年度』，京都市文化市民局，2014年。

赤松佳奈「Ⅶ山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成27年度』，京都市分化市民局，2016年。

赤松佳奈「Ⅲ山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成28年度』，京都市文化市民局，2017年。

黒須亜希子・廣冨亮太「Ⅷ山科本願寺南殿跡（第６～８次）」『京都市内遺跡発掘調査報告　令和元年度』，京都市文化市民局，2020年。

（財）京都市文化財研究所『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』，1989年。

参考文献

濱崎一志「第13章　山科寺内町の構と本願寺」『都市空間の変遷に関する歴史的考察』1994年。

Ⅴ　下三栖城跡

1．調査経過

調査地は伏見区横大路下三栖梶原町65番地に所在し，周知の埋蔵文化財包蔵地「下三栖城跡」に当たる。当該地において個人住宅建て替えが計画され，令和２年12月８日付けで文化財保護法第93条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。

これに対し文化財保護課は，当該地が旧下三栖集落の建物が並ぶ微高地に位置していることから，調査件数が少なく詳細がまだ分かっていない下三栖城跡の中心域の可能性もある重要地点であると判断し，記録保存のための発掘調査を指導した。

新築建物の基礎設計を踏まえて調査範囲について検討した結果，旧建物（明治年間に建築と伝わる）が建っていた微高地部分を中心に調査をすること，基礎底に掘削を留め必要に応じてトレンチ調査で断面を確認することが方針として決まり，令和３年７月７日から８月６日まで発掘調査をおこなった。

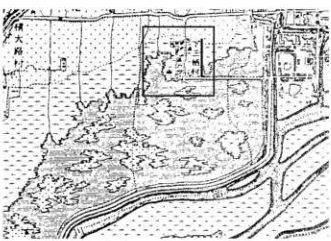


図１　明治時代の下三栖村（1：20,000）
大日本帝国陸地測量部明治23年仮製図「淀」を抜粋・加工

図２　調査位置図（1：5,000）

2. 遺跡

（1）立地と歴史的環境（図1～5）

下三栖城跡は、現在の下三栖集落につながる中世城館跡である。下三栖庄を前身とし、室町幕府の家臣で横大路地域を拠点としていた横大路被官衆の一人が築いた城館跡だと推定されている。ただし調査事例が少なく詳細は不明な点が多い。

図3　三栖神社（東から）

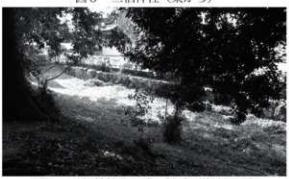


図4　三栖神社北に残る堀跡（南東から）

図5　隣地建物（南東から）

図6　調査前風景（南から）

現在の下三栖集落は，中書島の西に位置する横大路地域に所在し，南には宇治川が流れている。集落の南には，土地の産土神である三栖神社が鎮座している。三栖神社は，創建の詳細は不明なものの「壬申の乱において大海人皇子（天武天皇）が三栖地域を通過された際にかがり火を灯し暗夜を照らして歓迎した」という伝承を持ち，伝承に因んだ炬火祭が知られている。少なくとも中世には現在の位置にあったようで，三栖神社の南北には東西方向の堀跡が今も残っている。

下三栖城跡の推定範囲は1986年京都大学の山下正男氏によって提示された[1]。山下氏によれば，江戸時代に作られた村地図には「土居畷」という記載があり，その記載と当時の地形から堀の範囲を推定している。

調査は平成19年の試掘調査が最初で，推定範囲東部で堀の一端が確認された[2]。同報告では，この成果と大正11年測図・昭和10年修正の京都市土木局都市計画課作成3000分の1図に残る水路跡をもとに詳細な復元図を提示した。

平成29年には域内南西部で発掘調査が行われ，中世の水田と近世の蔵・柱穴などが検出された[3]。この調査では近世前期の洪水以降，人為的な盛土による嵩上げによって現在の地形が形成されていることが確認されている。

下三栖の集落は現在も中心域が旧集落と合致し，古い木造家屋は1段嵩上げされた高台の上に営まれている。数十年に一度は洪水がおこる土地であったという。

（2）調査経過（図7・8・10）

明治頃に建設されたという旧母屋の歴史性を重視し，重機掘削は現代表土のみに留めた。地層は主に人力で掘削を行った。また新築建物基礎の影響を考え，北側では掘削をGL-0.6ｍに留め江戸時代の礎石跡を検出した。

敷地南側は一段低い地形になっており北側と南側の段差境界で堀を検出した（図10）。このため堀部分については一部断ち割りを行った。検出された遺構を記録し，今回工事で影響を受ける範囲については完掘を行った。また堀と段差の範囲を確認するため調査区を一部拡張して（2区・3区）追加の記録を取った後埋め戻した。埋め戻しに当たっては機械による踏み固め作業を行った。調査面積は合計140㎡である。

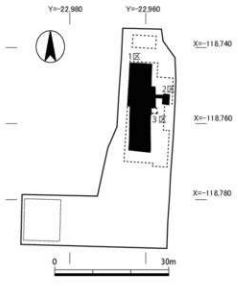


図7　調査区位置図（1：1000）

図8　埋戻し風景（北東から）

3．遺構

（1）基本層序（図9）

当該地は南北に長い敷地で南側の前面道路と敷地北端との比高は約1.5ｍあった。このため敷地内には大きく2段の段差があった。この地形は東西の隣家と共通のもので特に母屋部分は嵩上げされていることが予想された。

基本層序は，北側が地表面から順に，現代盛土，灰黄色シルト～極細砂の整地層，にぶい黄色砂礫による盛土であった。南側は現代盛土下に洪水由来のにぶい黄色砂礫があり，GL-1.8ｍで暗褐色泥砂，-2.0ｍで灰色シルトを確認した。-2.0ｍ以下のシルト層は湿地状堆積層であった。北側の嵩上げ部は砂礫による盛土で構成されており，洪水砂を盛り上げた人為的な営力の賜物である。

（2）遺構（図版10・11，図9～12，表1）

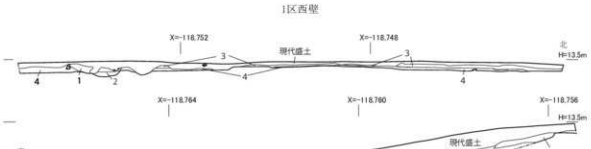
北側の高まりで礎石建物を検出し，南側から敷地東端にかけて堀を検出した。

建物1　南北9ｍ以上，東西6ｍ以上の建物で，南北は7間，東西は3間以上の柱間がある。現代盛土直下で検出した。直上を覆う地層（東壁1）から明治十年の一銭が出土したことから江戸時代末の建物であると推測される。南半の礎石は大半が抜き取られていた。残存していた礎石は1辺

表1　遺構概要表

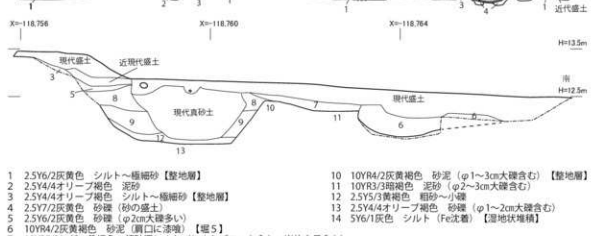
時　代	遺　構	備　考
江戸時代	礎石建物，堀	

1区西壁



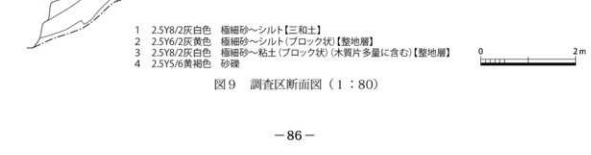
1　2.5Y7/3浅黄色　シルトブロック（極細砂多量に含む）
2　10YR5/4にぶい黄褐色　泥砂（木片含む）
3　2.5Y6/2灰黄色　シルト～極細砂【整地層】
4　5Y6/4オリーブ黄色　極細砂
5　2.5Y7/2灰黄色　シルト～極細砂【整地層】
6　10YR3/3暗褐色　泥砂（小礫多量に含む）
7　2.5Y6/3にぶい黄色　砂礫
8　2.5Y6/2灰黄色砂礫　（φ1～5cm大礫含む）　【堀4】
9　2.5Y6/4にぶい黄色　粗砂～礫
10　2.5Y5/3黄褐色　粗砂～小礫
17　10YR4/3にぶい黄褐色　砂泥（φ2～3cm大礫，炭含む）
18　10YR3/3暗褐色　泥砂（φ2～3cm大礫含む）
19　2.5Y5/2暗灰黄色　砂礫（φ2～5cm大礫多い）
16　2.5Y5/3黄褐色　砂泥（小礫，土師器片少量含む）
11　10YR5/2灰黄褐色　泥砂（粗砂～小礫多量に含む）
12　10YR3/2黒褐色　泥砂（粗砂多量に含む）【近世整地層】
13　2.5Y7/3浅黄色　粗砂～小礫
14　2.5Y6/3にぶい黄色　粗砂～極粗砂
15　2.5Y4/2暗灰黄色　泥砂
20　10YR4/2灰黄褐色　砂泥（土師器細片，炭含む）
21　2.5Y6/3にぶい黄色　砂礫（φ2～3cm大礫多い）
22　5Y6/1灰色　シルト（Fe沈着）【湿地状堆積】

1区東壁



1　2.5Y6/2灰黄色　シルト～極細砂【整地層】
2　2.5Y4/4オリーブ褐色　泥砂
3　2.5Y4/4オリーブ褐色　シルト～極細砂【整地層】
4　2.5Y7/2黄色　砂礫（砂の盛土）
5　2.5Y6/2灰黄色　砂礫（φ2cm大礫多い）
6　10YR4/2灰黄褐色　砂泥（腐口に漆喰）【堀5】
7　10YR5/3にぶい黄褐色　粗砂混シルト（シルトブロック含む、炭片少量含む）
8　2.5Y6/3にぶい黄色　砂礫（φ2～3cm大礫，砂が多い）
9　2.5Y6/2灰黄色　砂礫（φ3～5cm大礫多量に含む）
10　10YR4/2灰黄褐色　砂泥（φ1～3cm大礫含む）【整地層】
11　10YR3/3暗褐色　泥砂（φ2～3cm大礫含む）
12　2.5Y5/3黄褐色　粗砂～小礫
13　2.5Y4/4オリーブ褐色　砂礫（φ1～2cm大礫含む）
14　5Y6/1灰色　シルト（Fe沈着）【湿地状堆積】

2区南壁



1　2.5Y8/2灰白色　極細砂～シルト【三和土】
2　2.5Y6/2灰黄色　極細砂～シルト（ブロック状）【整地層】
3　2.5Y8/2灰白色　極細砂～粘土（ブロック状）（木質片多量に含む）【整地層】
4　2.5Y5/6黄褐色　砂礫

図9　調査区断面図（1：80）

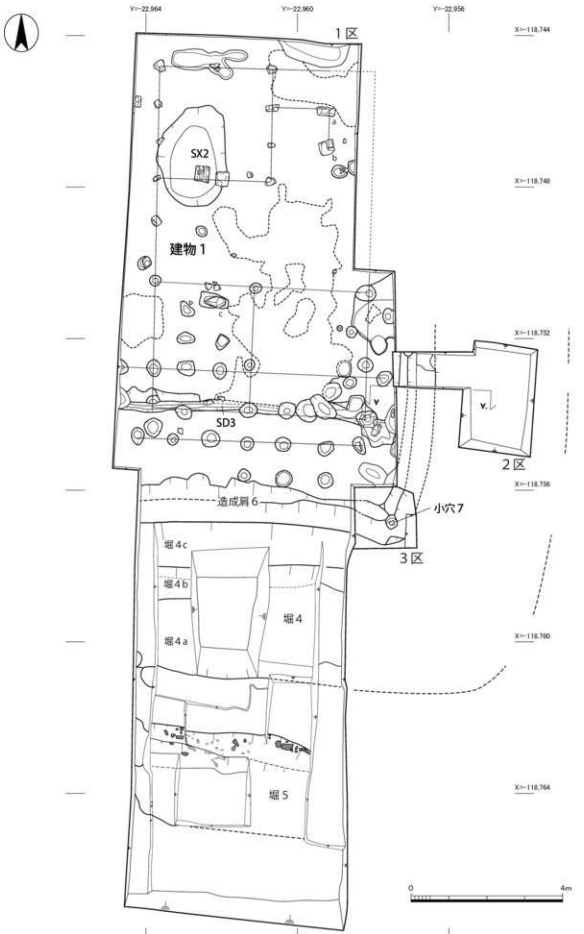


図10　調査区平面図（1：100）

約30㎝のものから１辺約60㎝のものがあった。特に礎石ａ・ｂ・ｃは大きく建物の主要な柱の礎石であった可能性もある。北西端SX2は用途は不明だが１辺30㎝の方形の石の西隣に１辺約40㎝の方形の板が据えられていた。この周囲を南北３間，東西２間（３ｍ×３ｍ）で比較的小振りな礎石が囲っていたことから部屋割りの一端を検出したと推定される。

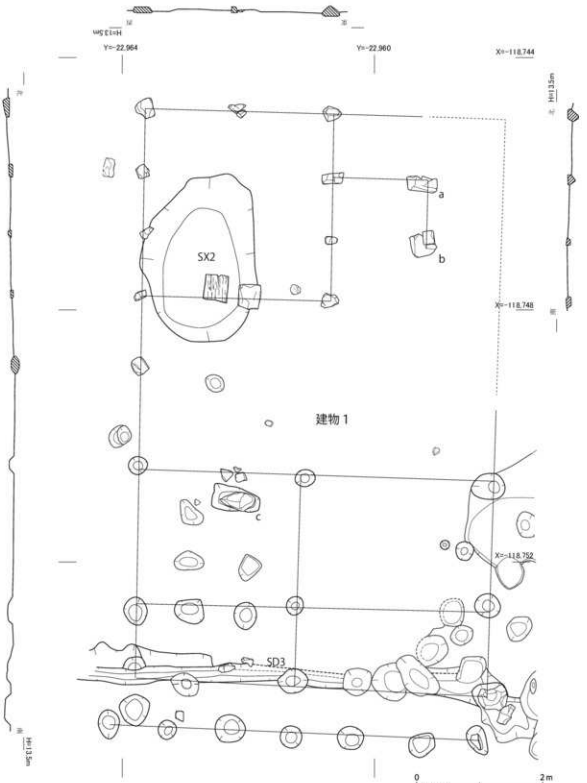


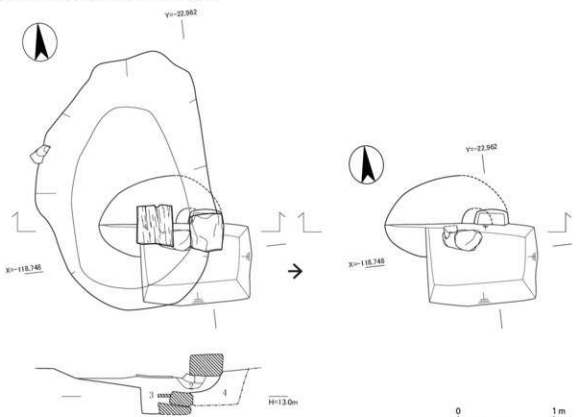
図11　建物１平面・エレベーション図（１：60）

SX2　南北約2.5ｍ東西１.８ｍの不定円形の範囲に一辺約30㎝厚さ25cmの方形の石と一辺40cm厚さ２㎝の板が並んでいた。石と木の下には長辺1.3m短辺0.8mの楕円形の掘り方があり，深さは約0.2mで底部に３石の石が積まれていた。埋土は黄褐色極細砂とシルトブロックからなり固くしまる。下段の石は長辺約40㎝短辺約25㎝の長方形で平坦面を上に向けて据えられていた。その上に長径約30㎝の楕円形の石が重ねられ，その東に一辺約10㎝の割石が配置されていた。地盤は砂で構成されているため地盤沈下を防ぐための構造物である可能性があるが具体的な用途は不明である。

SD３　建物の南端で検出した東西方向の溝で幅0.3m深さ0.1m、調査区の端から端まで検出した。建物の雨落溝あるいは区画溝の可能性がある。埋土はオリーブ褐色泥砂であった。

堀４　調査区の中央で検出した東西溝で対象地の東側で北に向けて曲がっている。少なくとも２回の掘り直しが認められたためａ・ｂ・ｃに分けて記述する。

堀４ａ：幅2m深さ1.0m，埋土は暗褐色泥砂（西壁層６）であった。ｂを掘り直して作られた溝である。**堀４ｂ**：幅2.8m深さ1.2m埋土はにぶい黄色砂礫（同層７）で人為的な埋土の可能性もあるｃを切り，ａに切られている。**堀４ｃ**：幅3.6ｍ深さ1.2ｍ高台側の整地層との関係から最初に造られた堀と推定される。埋土は西壁層８～10で主にラミナが観察される灰黄色砂礫で埋まっている。洪水によって埋まったと考えられる。



1　2.5Y5/2暗灰黄色　極細砂とシルト（小礫少量含む，整地層）
2　2.5Y7/3浅黄色　砂礫　固くしまる
3　2.5Y5/3黄褐色　極細砂とシルト（ブロック状，整地層，固くしまる）
4　2.5Y6/3にぶい黄色　砂礫

図12　SX２平・断面図（１：40）

堀5　堀4の南側で検出した堀で検出した範囲では東西方向を向いていた。幅1.5m深さ1.0mで埋土は灰黄褐色砂泥であった。堀4南肩と堀5北肩の間で検出した整地層中（西壁層18・東壁層11）から細片ではあるが肥前陶磁器が出土したため，堀は江戸時代の遺構と考えられる。

造成肩6　建物1が広がる高まりは，人為的に嵩上げされたもので，建物1南端より約1m南で堀5に向けて段差を呈していた。段差肩部には灰黄色シルト～極細砂からなる整地土（西壁層5・東壁層3）が張られている状況を確認した。この肩部の検出を目的として広げた拡張区2・3区でも同様の段差肩部と整地層（2区南壁の層3）を検出した。堀4と造成肩6は共に敷地東端で曲がり北に伸びていく。建物を囲う堀であったと想定される。

小穴7　3区で検出した小穴で直径0.2m，深さ0.1mで根石が据えられていた。

4．遺物（図13，表2）

遺物は基本的に建物1を覆う整地層から出土した。明治十年の硬貨を含むことから幕末から明治にかけてのものと考えられる。

1・2は肥前磁器染付である。1は皿，2は椀である。3は土製品で窪みに穿孔がある。ミニチュア盆栽鉢である。4は泥メンコである。5は雛甲の髪留めである。6～21は銭貨である。6～18が「寛永通宝」であった。17・18は鉄製で錆のため摩滅がすすんでいる。19は「文久永宝」，20は明治十年の「半錢」，22は明治十年の「1錢」である。

20は銅製金具，23は銅製の小柄でわずかに鍍金が残る。24・25は真鍮製の金具で24は掛け金具，25は飾り金具である。26はキセルである。27は鉄製品である。用途不明であるが工具のたぐいか。

この他に小型の黒板・蝋石などが出土した。

表2　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
江戸時代・明治時代	染付，銭貨，金属製品		肥前磁器2点，銭貨16点，土製品2点，金属製品6点，その他1点		
合　計		3箱	27点（1箱）	1箱	1箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後，Aランクの遺物を抽出したため，出土時より1箱多くなっている。

5．まとめ（図14）

今回の調査では，洪水砂を盛り上げて造成した高台の上に立つ江戸時代末の建物と建物を囲う堀を検出した。堀は砂で埋まっており洪水の度に掘り直されたと考えられる。工事に影響のある深さまでの調査であったので，下層についての詳細は不明だが，確認できた最下層は湿地状堆積層であったことから，当該地の高まりは江戸時代の造成である可能性が高い。検出した堀肩部6は西隣家の石垣（増築前）の延長線上に位置しており，周辺の地形を含めると，洪水対策として嵩上げし

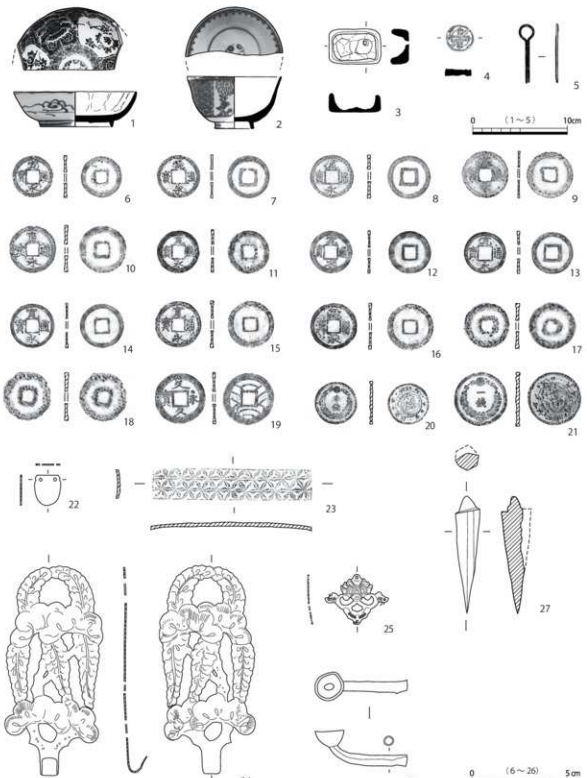


図13　出土遺物実測図（1：4・1：2）

た高台に母屋が建ち周囲を堀が巡る景観が想起される。下三栖城跡の推定復元の下図となった大正の地図にも水路が巡っていたことから，少なくとも江戸時代にはそうした景観が整っていたのであろう。中世の下三栖城跡についてはわからなかったが北西端の当該地の中世段階は湿地であった可能性が高い。今後の調査に期待したい。　　（赤松　佳奈）

註

1）山下正男『京都市内およびその近辺の中世城郭―復元図と関連資料―』，京都大学人文科学研究所，1986年。

2）馬瀬智光「Ⅴ-7下三栖城跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』，京都市文化市民局，2008年。

3）黒須亜希子「Ⅵ下三栖城跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成29年度』，京都市文化市民局，2018年。

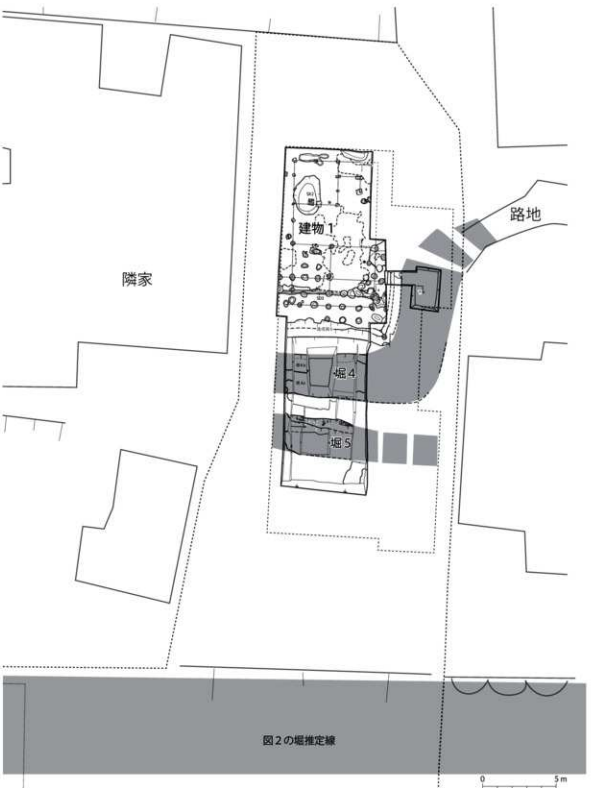


図14　当該地における堀の推定線（1：250）

Ⅵ　周山城跡

1　調査経過（図１～５）

調査地は，京都市右京区京北下熊田町大迫に所在し，周知の埋蔵文化財包蔵地である「周山城跡」に該当する（図１）。周山城跡の周辺で林道造成が行われている近況に鑑み，平成28年度に現地踏査や，航空レーザー測量による詳細測量図（赤色立体地図）の作成を行った[1]。その後も継続的に踏査を実施してきた結果，近年の台風や積雪の影響等で多くの石垣が傷んでいることが判明した。令和２年度の踏査で，周山城跡の中でも特に残りの良い石垣に崩落の危険性がある箇所を確認したため，現況を記録するためのオルソ測量と，石垣の崩落防止対策を行うこととした。まず，測量前に石垣周辺の清掃を行い，その後写真撮影とオルソ測量，崩落防止対策を実施した。令和２年11月24日から開始し，12月12日に現地での全ての作業を終了した。調査面積は199㎡である。

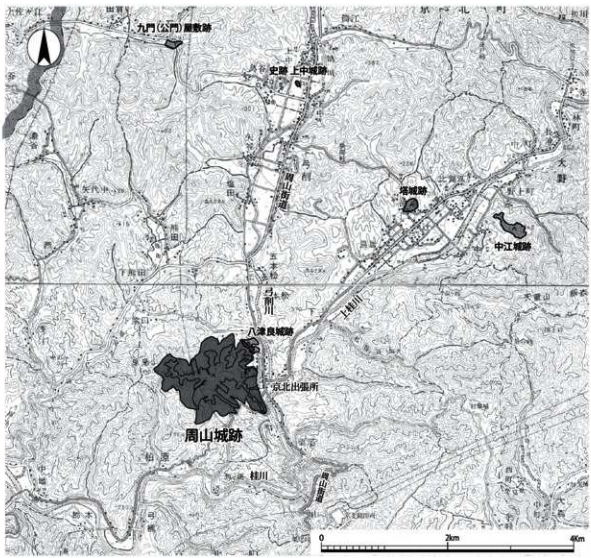


図１　周山城跡と周辺城郭関係遺跡位置図（１：60,000）

図２　調査前全景（北西から）

図３　調査前全景（北西から）

図４　石垣清掃作業風景（北西から）

図５　石垣清掃作業風景（北から）

２．遺　跡（図６，表１）

（１）位置と環境

周山城跡は，北東から流れる桂川と北北西から流れる弓削川の合流点西側，標高509.4mの黒尾山に至る丘陵尾根上に展開する山城である。城の南山麓を，京都と日本海側を結ぶ長坂街道（現在の周山街道）が通り，現在も交通の要衝になっている。また，城の北東には禁裏御料地であった山国荘，北側の弓削川上流には中世後期に天龍寺領になった弓削荘が存在する。

周山城跡には，尾根を東西に分断するように二つの大きな堀切があり，堀切の東側を「東城」，西側を「西城」とする[2]。東城は標高約480mをピークとする丘陵頂部を「中心部」として，８つの支尾根に放射状に郭が構築されており（図６），個々の尾根上に展開する郭の特徴については平成29年度報告書でまとめられている[3]。また，中心部と支尾根間，郭間，また支尾根間を行き来できるような「道（城道）」の存在も明確になり，相互の連絡についても推定できるようになった。

一方の西城は，東西200mに渡って広がる郭群で，西端，中央，東端に主要な郭が分布する。東城と異なり，現状では石垣は確認されておらず，「石垣を多用」した東城に対して，西城は「土の城」と言われてきた。ただし，赤色立体図を検討したところ，東城と類似した成形が行われていることが確認できたことから，今後石垣の有無を検討する必要がある。

図6　周山城跡縄張図（1：6,000）

表１　周山城跡及び丹波国関連年表

年号．	西暦	月日	事　項	史料名
永禄12	1569	4/18	丹羽長秀ら織田信長家臣より，宇津頼重の丹波国山国荘に対する違乱停止の連署状が出される。	丹波宇津頼重宛明智光秀等連署状
		9	丹波国衆，織田信長を摂津芥川に訪ねる。	永禄以来年代記
元亀４	1573	1/27	大阪本願寺の顕如が朝倉義景に対して，萩野直正の京都進撃の計画を聞いたが，丹波は不和の国なので信用に足りない，と語る。	顕如上人文案
天正３	1575	6/7	信長が丹波の内藤氏，宇津氏を征伐するため，明智光秀を差し向ける旨を小畠左馬介，川勝継氏に伝える。	小畠文書／記録御用所本
		6/19	光秀，小畠左馬進の知行安堵と忠節によっては新地を与える旨も伝える。	小畠文書
		8月	光秀，信長の越前攻略に従軍。	信長公記
		8/21	光秀，越前豊原より小畠左馬進へ書状を送り，戦が終われば丹波に攻め込み，宇津氏を討伐する旨を伝える。	小畠文書
		9月	信長から，諸将に対して出陣命令が出される。	細川家文書
		11/24	八木豊信，吉川元春へ，光秀が黒井城に萩野直正を包囲し，丹波衆の過半が光秀に一味していると報告する。	吉川家文書
天正４	1576	1/15	波多野秀治が裏切り，明智軍の黒井城攻めは失敗する。	兼見卿記
		1/21	光秀，京都に帰る。	兼見卿記
天正６	1578	4/10	光秀，波多野氏家臣・荒木氏綱の居城（荒木城）を取り巻き水の手を止め，城を落とす。	信長公記
		12/11	光秀，波多野秀治の館（八上城）を取り巻き，堀・塀・柵を幾重にも付け攻囲する。	信長公記
天正７	1579	2/28	光秀，亀山に向かう。	兼見卿記
		5/18	吉田兼見，八上城攻め陣中の佐竹定実の小屋を訪ねる。八上城陥落迫る。	兼見卿記
		6/1	八上城落城。四百人討死。波多野兄弟捕まり，亀山へ。	兼見卿記
		7/19	光秀，「宇津構」を退いた者を討ち取る。さらに鬼ヶ城を攻撃し，付城の要害を構える。	信長公記
		8/9	黒井城落城。	信長公記
天正９	1581	4/9	津田宗久が亀山から丹波奥部へ進む。	津田宗久茶湯日記
		4/10	宗久，光秀・細川父子とともに福知山城で秀満の振舞いを受ける。	津田宗久茶湯日記
		4/17	光秀が丹波宇津城の井戸を掘るため，吉田兼見に河原物山の派遣を求める。	兼見卿記
		8/14	**津田宗久，丹波周山へ行き，光秀と十五夜の月見を楽しむ。**	津田宗久茶湯日記
天正10	1582	6/2	本能寺の変。	兼見卿記
		6/13	山崎の合戦。	兼見卿記
		6/15	坂本城自焼。	兼見卿記
天正12	1584	2/4	**秀吉，周山城へ赴く**	兼見卿記

太字は，「周山」「周山城」の登場記事。

年表は，福島克彦「明智光秀の丹波支配年表」『明智光秀　周山城物語』（財）京都ゼミナールハウス，1995年・坂田聡編『禁裏領山国荘』高志書院，2009年を参考に作成。

（2）周山城の歴史（表1）

周山城の築かれた丹波地域は，元亀4年（1573）2月に将軍足利義昭と織田信長が決裂した頃から，反信長勢力が伸張する。天正3年（1575）3月から信長の丹波攻略が始まり，同年9月以降に明智光秀が参加している。しかし，天正4年（1576），丹波八上城主・波多野秀治の裏切りにより，赤井（荻野）直正の籠もる黒井城（兵庫県丹波市）攻めに失敗するなど，丹波攻略には時間を要した。光秀は再度の丹波攻略のため，余部城（京都府亀岡市），ついで天正5年（1577）に亀岡城の築城を開始する。その後，天正7年（1579）5月末に八上城，8月に黒井城を落城させた[4]。

当時京北地域には反信長勢力として宇津氏が勢力を張っていた。宇津氏は山国荘の西部・宇津郷の土豪で，16世紀初頭に近隣の荘園村落に侵入を繰り返していた。天文9年（1540）7月，11月，天文13年（1544）4月には，幕府から細川晴元，六角定頼らに宇津氏の山国荘違乱を停止する命令が出されており，その後も違乱を再発していたようである。また，永禄5年（1562），宇津頼重は小野山[5]代官職補任を自称し，現地へ入部しようとした。

永禄12年（1569）には光秀を含む織田家家臣が，宇津頼重に対して，禁裏領である山国荘に対する違乱を止めるよう連署状を出した。また，天正3年（1575）には，信長が宇津氏征伐のため光秀を差し向けた。宇津氏は「宇津構（宇津城）」を拠点として抵抗したため，光秀が宇津構を攻略したのは天正7年7月であった。光秀はその後，宇津城の改築を手掛ける一方で，周山城を築城したと推測されており，同時並存の可能性も考えられている[6]。

周山城について記述のある史料は極めて限られているが，『津田宗久茶湯日記』天正9年8月条に，津田宗久が明智光秀に招かれて月見をした記録が残る。また，京の吉田神社の神職である吉田兼見の日記『兼見卿記』天正12年（1584）2月4日条から，羽柴（豊臣）秀吉が周山城に向かったことが分かる。このことから，周山城は天正9年頃に築城され，光秀が天正10年（1582）6月13日の山崎の合戦で敗れた後も，少なくとも天正12年頃までは存続していたと考えられる。

（3）既往の調査・研究

周山城跡での埋蔵文化財調査は，これまで小規模な工事に伴う詳細分布調査が2件[7]実施されているのみで，発掘調査は1度も行われていない。また，福島克彦・高橋成計氏が作成した縄張り図や，京都府教育委員会が実施した中世城館跡の調査等[8]によって城の様相は示されていたものの，正確な測量調査などは行われていなかった。そのため，京都市は平成29年度に航空レーザー測量による調査を実施し，赤色立体図を作成した。その結果，周山城は東西約1.4km，南北約0.7kmに及ぶ山城であることが明らかになったとともに，各郭の正確な位置や規模，各郭を結ぶ「道（城道）」などを把握することが可能となった。以降は継続的に踏査を実施しており，令和元年度には赤色立体図によって明らかになった新たな平場の確認を行い[9]，令和2年度には赤色立体図上で道状遺構として視認できるものの未踏査だった部分について現地確認を行った[10]。合わせて採集瓦の報告も行っており，周山城に関する基礎的な資料の収集に努めている。

3．遺　構（巻頭図版２～４，図版12～14，図７～19，表２）

図７　石材採寸図

今回測量調査の対象としたのは，東城の西尾根に存在する郭５・６の石垣・石塁の一部である（図８）。測量範囲全体の平・立面図を図10に，断面図を図19に示した。なお，個々の石の寸法を述べる場合は，小口部分の長辺を長径，短辺を短径とし，奥行きの長さを長軸，これに直交する長さを短軸（図７）とする[11]。

今回の測量範囲において共通するのは，野面積みである点，基本的に周辺から採取された自然石を用いていると推測できる点である。なお，矢穴や刻印は確認できない。以下，個々の石垣・石塁について述べる。

郭５北面石垣　Ａ－Ｃ（図11～13）　高さ最大3.9mの北面石垣である。今回はＡ－Ｃ部分の東西約20mを測量した。残存部の高さは，断面１で1.45m，断面２で3.6m，断面３で3.9mである。また，天端からの高さは，断面１で2.5m，断面２で4.5m，断面３で4.85mである。断面２東側より東は，上部の石が崩落した箇所が目立つ。

郭５北西部の隅角部には，長辺が80cm前後の比較的大きな角石を重ねて積む。長辺と短辺が互い違いになるよう積み上げる箇所もあるが不統一である。勾配は，断面１で73°，断面２で69°，断面３で65°である。

築石は，長径が40～60cm，短径が20～30cmのものが多い。大きいもので長径が70～95cm，短径が40～45cmである。間詰石には，直径10cm程度の円礫と，長径が10～15cm，短径が５～10cmほどの角礫が用いられている。基底部には，長径が30～50cm，短径が10～15cmの扁平な角礫を用いる傾向がある。

郭５西面石垣　Ｃ－Ｄ（図14）　郭５北面石垣西端と接続する西面石垣である。今回はＣ－Ｄ部分の南北約９mを測量した。断面４で，残存部の高さは2.0m，勾配は76°である。

築石は，長径が40～60cm，短径が20～30cmのものが多い。大きいもので長径が70～95cm，短径が40～45cmである。間詰石には，直径10cm程度の円礫と，長径が10～15cm，短径が５～10cmほどの角礫が用いられている。基底部には，長径が30～50cm，短径が10～15cmの扁平な角礫を用いる傾向がある。

郭６北側石塁　Ｅ－Ｉ（図15～17）　郭５北面石垣西端と接続する東西方向の石塁である。東側は郭５北面・西面石垣のコーナー部に取り付き，西側は郭６北面石垣のコーナー部に取り付く。東西長は約21mあり，天端の幅は約1.3mである。高さは，断面５で1.0m，断面６で1.6m，断面７で1.6mである。勾配は，断面５で77°，断面６で79°，断面７で78°である。

築石は，長径が30～50cm，短径が20～30cmのものが多い。大きいもので長径が70～95cm，短径が40～50cmである。１箇所墓石とみられる長径20m，短径15cmの転用石が用いられている。間詰石には，長径が10～15cm，短径が５～10cmほどの角礫が用いられる。ただし，現状では空洞部も多い。基底部には，長径が30～50cm，短径が10～15cmの扁平な角礫を用いる傾向

表2　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
安土桃山時代	郭5北面・西面石垣，郭6北面石塁，北面石垣	

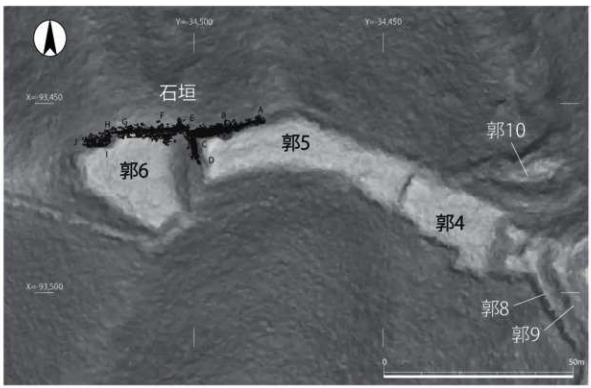


図8　遺構位置図（1：1,000）

がある。

郭6北面石垣との接続部分H－Iは，折れを形成し西面で南北長約2.7mである。残存部の高さは1.7mである。隅角部にあたるHでは，長辺が50cm前後の角石を重ねて積む。

郭6北面石垣　I－J（図17・18）　郭6北側石塁東端と接続する北面石垣である。今回はI－J部分の南北約7mを測量した。H－Iと接続し郭6北側石塁の北側より約2.7m南に形成され折れ部となる。

残存部の高さは，断面8で1.2mである。また，天端からの高さは1.8mである。勾配は，断面8残存部で83°だが孕み出しが顕著で崩落箇所も多い。

築石は，長径が40～50cm，短径が20cm前後のものが多い。大きいもので長径が70～80cm，短径が30cmである。崩落部分で宝篋印塔の基底部を確認しており（図9），部分的に転用石を用いていたことが分かる。間詰石には，長径が10～20cm，短径が5～10cmほどの角礫が用いられている。

図9　宝篋印塔検出（北から）

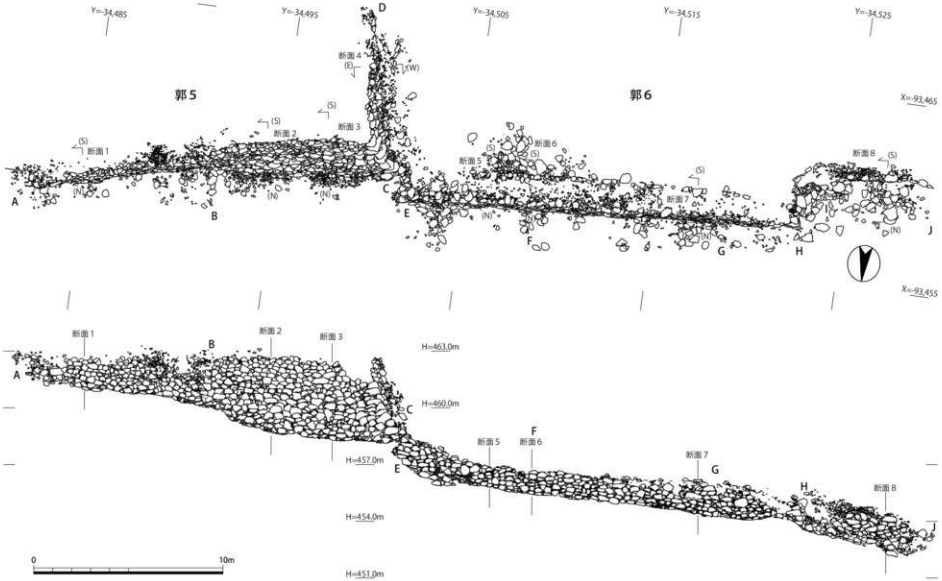


図10　測量石垣・石塁　平・立面図（1：200）

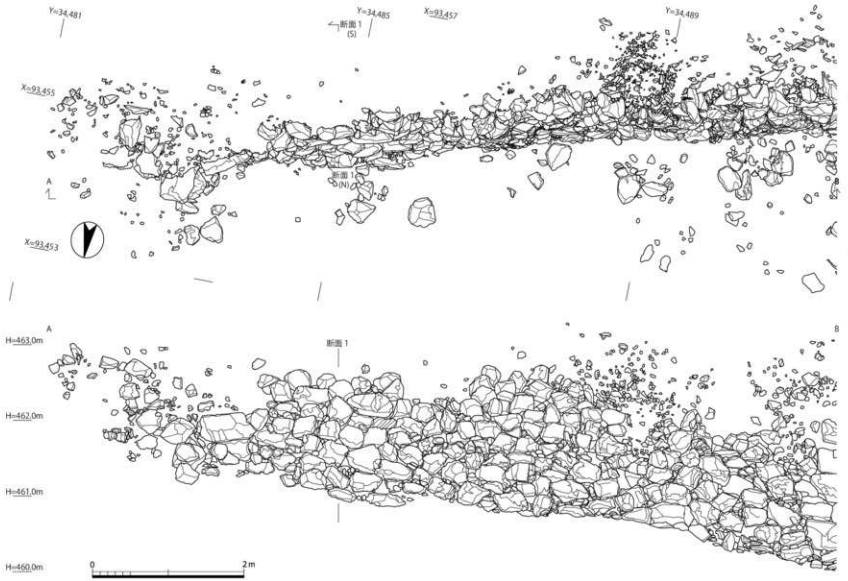


図11　郭5北面石垣A－B平・立面図（1：50）

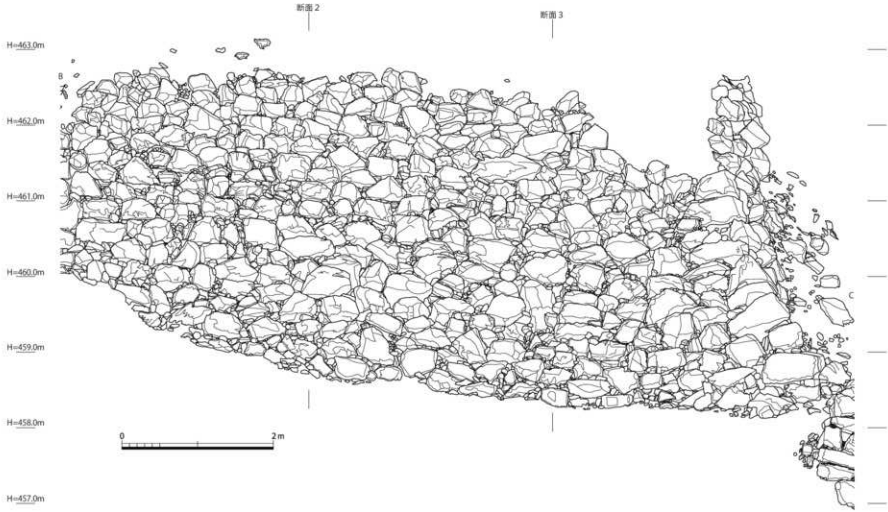


図12　郭5北面石垣B－C立面図（1：50）

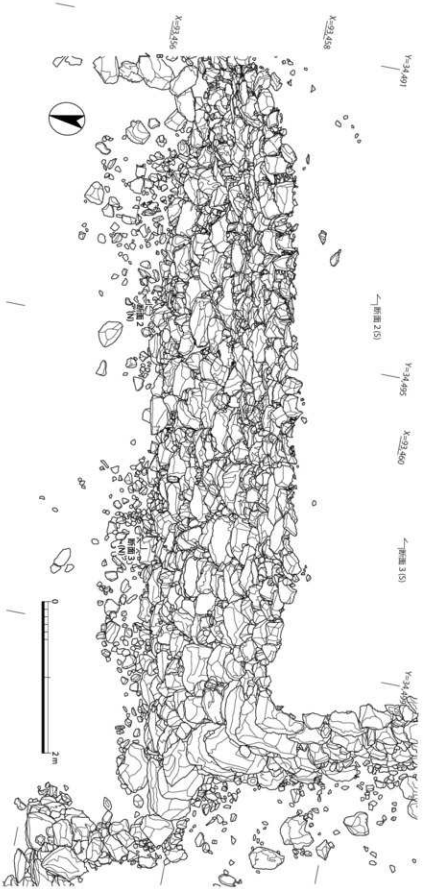


図13　郭5北面石垣B－C平面図（1：50）

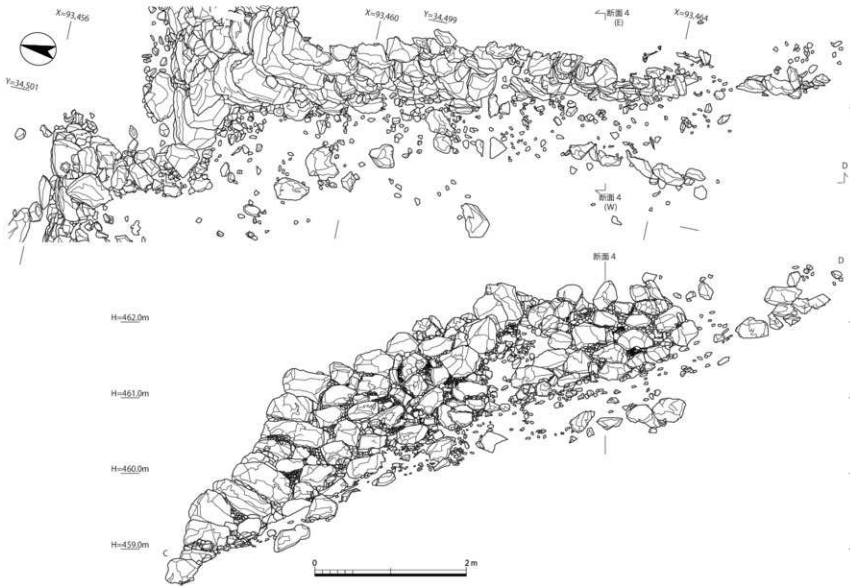


図14　郭5西面石垣C－D平・立面図（1：50）

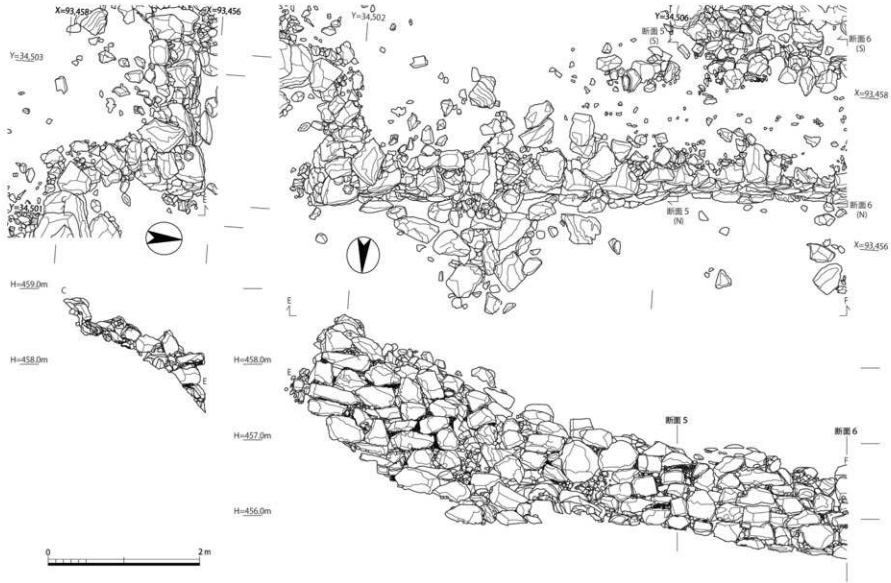


図15　郭6北側石塁C－E・E－F平・立面図（1：50）

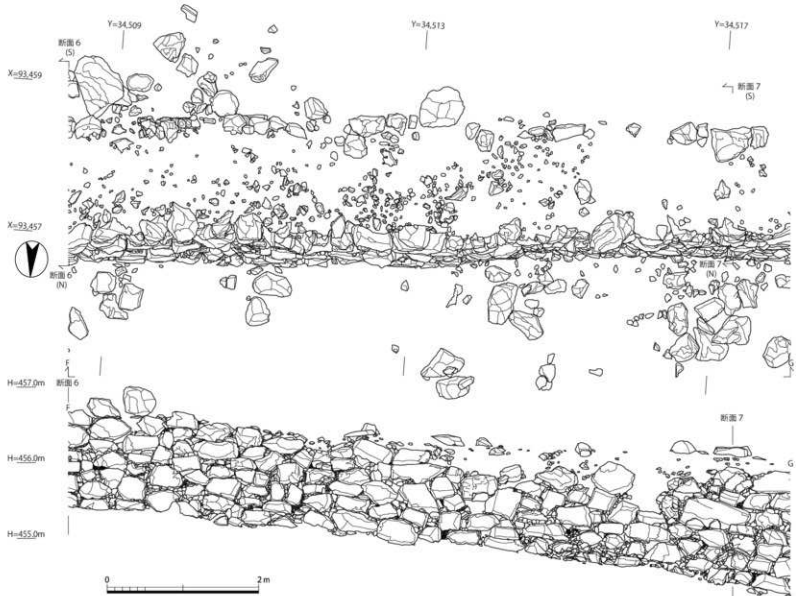


図16　郭6北側石塁F－G平・立面図（1：50）

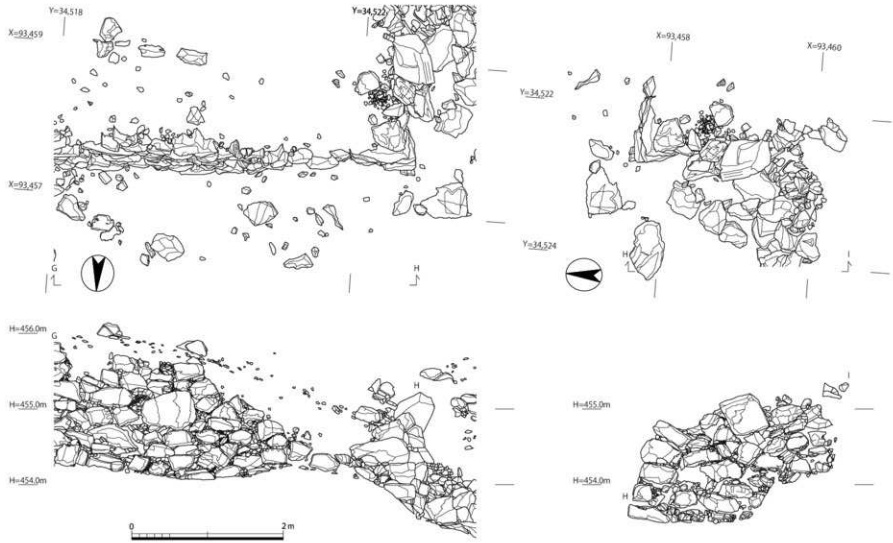


図17　郭6北側石塁G－H・H－I平・立面図（1：50）

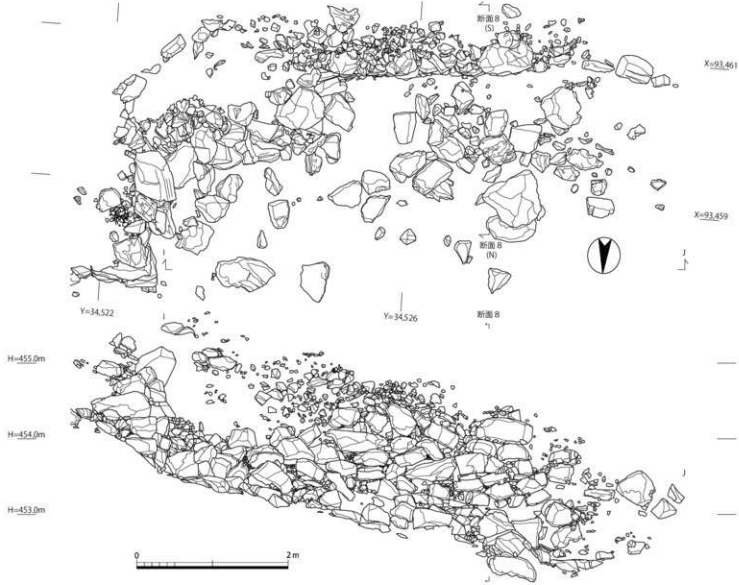


図18　郭6北面石垣I－J平・立面図（1：200）

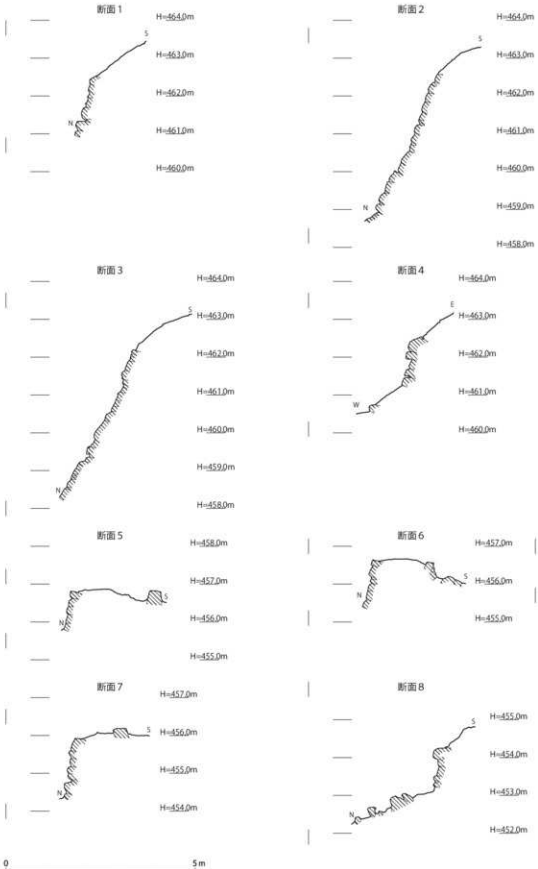

断面1
H=464.0m
H=463.0m
H=462.0m
H=461.0m
H=460.0m
S
N
断面2
H=464.0m
H=463.0m
H=462.0m
H=461.0m
H=460.0m
H=459.0m
H=458.0m
S
N
断面3
H=464.0m
H=463.0m
H=462.0m
H=461.0m
H=460.0m
H=459.0m
H=458.0m
S
N
断面4
H=464.0m
H=463.0m
H=462.0m
H=461.0m
H=460.0m
E
W
断面5
H=458.0m
H=457.0m
H=456.0m
H=455.0m
N
断面6
H=457.0m
H=456.0m
H=455.0m
S
N
断面7
H=457.0m
H=456.0m
H=455.0m
H=454.0m
S
N
断面8
H=455.0m
H=454.0m
H=453.0m
H=452.0m
S
N
0
5m

図19　断面図（1：100）

4．遺　物（図9・20・21，表3）

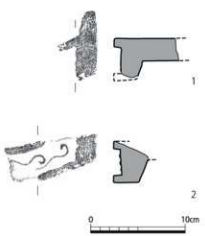


図20　軒平瓦実測図（1：4）

今回の測量範囲である郭5・6では，清掃中に土器類，瓦類などをごく少数確認した。土器類では焼締陶器2点，施釉陶器1点，瓦類では丸瓦1点を確認したが，いずれも細片である。その他，石製品などを確認した。また，東城中心域の郭1周辺で軒丸瓦1点，軒平瓦2点を表採し，合計コンテナ1箱分を採集した。このうち郭1出土の軒平瓦2点と，郭6北面石垣付近出土の宝篋印塔を図示した。

1は水切り付き軒平瓦，2は唐草文軒平瓦である（図20）。平瓦凹面はナデ，凸面はケズリを施す。

3は宝篋印塔の基礎部分である（図21）。底部幅21.8cm×22.8cm，高さ16.3cm，上部に複弁蓮華文，下部三面に格狭間が彫られる。本来は郭6北面石垣に用いられた転用石と考えられるが，原位置は留めておらず北側に落下していた（図9）。

表3　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
安土桃山時代	焼締陶器・施釉陶器・瓦類		軒平瓦2点，宝篋印塔台座1点		
合　計		2箱	3点（1箱）	1箱	

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

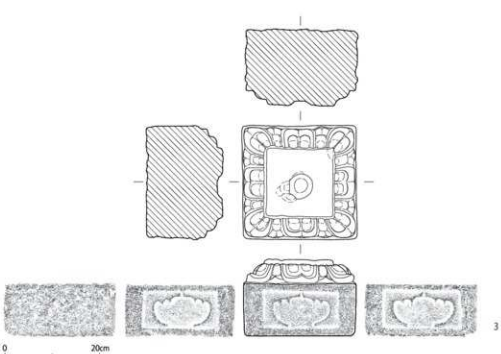


図21　宝篋印塔基礎部分実測図（1：8）

5．石垣崩落防止対策（図22～26）

今回，石垣崩落防止対策を行った箇所は郭５西面石垣の計２箇所である（図22）。緊急的な措置であるため，現地に存在する落下した築石を用いて積み重ねながら，モルタルで固めて対策を行った。

１箇所目は，郭５北西隅部の隅角部である（図23）。隅角部の下部の角石が抜け落ちていたため，抜け落ちた箇所に角石を入れ，間詰石とモルタルで固めた（図24）。

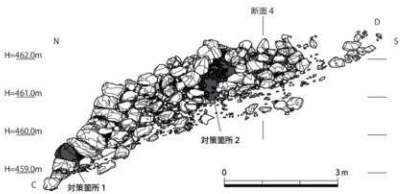


図22　補修箇所立面図（郭５西面石垣 Ｃ－Ｄ間）（１：100）

２箇所目は，郭５西面石垣の中央付近である（図25）。今回は人力での作業であったため，大きな築石を補修に用いることが厳しい状況であった。そのため，実際の築石よりも小ぶりの石を選んで，モルタルで固めながら積み重ねて対策を行った。

いずれも緊急的な仮の措置であるため，今後の経過を見ながら必要に応じて，より良い方法で石垣崩落防止対策を検討する必要がある。

図23　補修箇所１（補修前）（北西から）

図24　補修箇所１（補修後）（西から）

図25　補修箇所２（補修前）（西から）

図26　補修箇所２（補修後）（西から）

6．まとめ（図27）

今回の調査では，初めて周山城の石垣の測量を実施した。特に残りの良い郭５北面石垣，郭６北側石塁の特徴を整理して，まとめとしたい。

郭５北面石垣について

郭５北面石垣は，現在周山城で確認できる石垣の中で最大規模の石垣である。その特徴を整理すると以下の通りである。

１．築石部には長径が40～60cm，短径が20～30cm程度の自然石を用いる。

２．残存石垣の高さは最大3.9m，天端からの高さは4.85mである。

３．石垣の勾配は70°前後を基本とする。

４．北西隅部の隅角部は「角石の積み重ね」が確認でき，縦積みをまじえたものである。また，長辺と短辺が互い違いになるよう（角石の控えが交互になるよう）積み上げる「算木積み」は一部のみで，角脇石は築石などで代用する。

５．角石は，隅角をもつ自然石から選択して，勾配となる稜線をつくる。

成立時期を推測する大きな要素の一つである隅角部に着目すると，郭５北西の隅角部では「角石の積み重ね」が確認できる。隅角部の「角石の積み重ね」については，近江・宇佐山城[12]などで確認できる[13]。一方，構造的にも安定した角石に角脇石を組み合わせた「算木積み」が出現するのは，天正４年（1576）に構築が始まったとされる安土城の本丸天守台や二ノ丸周辺部であることが指摘されている[14]。

また，門脇石が築石や複数の小石を入れることで代用される，角石が隅角をもつ自然石から選択されて勾配となる稜線をつくるなどの特徴は，天正，文禄年間の特徴とされる[15]。

以上のことから，郭５北面石垣は周山城が築城されたと推定される天正年間の特徴を備えていると指摘できる。

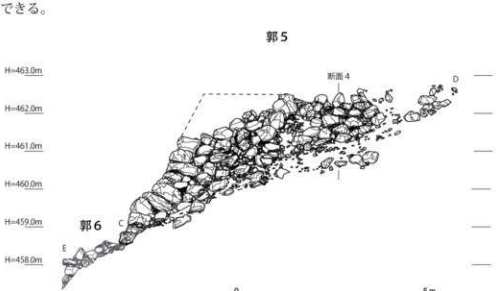


図27　E－C－D間立面概念図（１：100）

郭６北側石塁について

郭６北側石塁は，郭５北面及び西面石垣の直下に位置する。ただし，塁線が明確にずれており，郭５の塁線から北に突き出た形状となっている（図10）。この形状については，構築された時期差の問題が指摘されている[15]。時期差について現状では明らかにし難いが，郭６北側石塁の突出部分は郭５西面石垣の北西隅に接続していること，郭６の石塁上部には築地塀などの遮蔽物が存在していた可能性が高く，石塁内側塁線は郭５北面石垣塁線の延長線上にあることからも，同時期の築造ととらえた方が説明がつきやすいと考えられる（図27）。むしろ自然地形の高度の変化に応じて石垣や石塁の高さがある程度規定されてしまうため，防御方法に工夫をこらしたと考える。

まとめ

周山城は文献史料などから天正９年（1581）頃に築城され，少なくとも天正12年（1584）頃まで存続していたとされる。築城から廃城までの期間が短く，その後も大規模な改修が見受けられないことから，天正10年前後の築城技術を検討できる貴重な城であると言える。

今回は石垣の崩落防止対策に伴う緊急的な調査であったが，今後も周山城の保全とともに，継続的に調査を行って基礎データを積み重ねていくことが重要である。　　（熊谷　舞子）

註

1）馬瀬智光「Ⅳ－８　周山城跡（16A011）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成29年度』京都市文化市民局，2018年。

2）本報告では，註１文献に依って「東城」「西城」とするが，「東の城」「西の城」という表記もある（馬瀬智光「丹波支配の拠点～周山城跡～」『天下人の城』京都市文化財ブックス第31集，京都市文化市民局，2017年）。

3）註１文献。

4）山本浩樹「明智光秀の丹波支配」『平成28年度　京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書（丹波編）』京都府立京都学・歴彩館，2017年。

5）山城国葛野郡小野山。京の七口の一つで，周山・若狭へとつながる長坂口が存在する。

6）福島克彦「丹波周山城について」『城館史料学』第５号，城館史料学会，2008年。

7）NHK中継基地撤去に伴う詳細分布調査（馬瀬智光・新田和央『天下人の城』京都市文化財ブックス第31集，京都市文化市民局，2017年。）と，NHKの送電線布設に伴う詳細分布調査（『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和元年度』京都市文化市民局，2020年。）の２件。

8）中居和志・高橋成計「347 周山城跡」『京都府中世城館跡調査報告書－丹波編－』第２冊，京都府教育委員会，2013年。

9）馬瀬智光・鈴木久史「Ⅴ－８　周山城跡（19A006）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和元年度』京都市文化市民局，2020年。

10）鈴木久史・新田和央「Ⅴ－８　周山城跡（19A009）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和２年度』京都市文化市民局，2021年。

11）南　孝雄・辻　裕司『勝持寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-5，2012年。

12）宇佐山城は「多聞院日記」によれば，永禄13年（1570）に織田信長の命を受けた森可成が築いた（滋

賀県教育委員会『大津市・宇佐山城跡調査概要』，1972年）。

13）北垣聰一郎「中世石積み技能者「穴太」の本貫地と，近世の「穴太」」『武田氏研究』第63号，武田氏研究会，2021年。

14）北垣聰一郎「城郭石垣の構造的変遷と釜山近郊の倭城石垣－石積み技能者「穴太」の技能を中心に－」『釜山城郭』釜山博物館 2016年（北垣聰一郎の傘寿を祝う会『北垣聰一郎先生著作目録』，2019年に再掲）。

15）北垣聰一郎「石垣研究の歩みと現在」『城郭石垣の技術と組織』金沢城史料叢書16，石川県金沢城調査研究所，2012年。

16）註６文献。

参考文献

『明智光秀　周山城物語』（財）京都ゼミナールハウス，1995年。

『日本荘園史大辞典』，吉川弘文館，2003年。

亀岡市文化資料館『第35回特別展「丹波決戦と本能寺の変」』，2020年。

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく　れいわさんねんど
書　名	京都市内遺跡発掘調査報告　令和3年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子・清水早織
編集機関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所在地	〒604-8571　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地
発行所	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
発行年月日	西暦2022年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
へいあんきゅう 平安宮 だいりないかくかいろあと 内裏内郭回廊跡・ じゅらくていせき 聚楽遺跡	きょうとし　かみぎょうく 京都市上京区 なかつかちょう 中務町486-9	26100	2 237	35度 01分 10秒	135度 44分 42秒	2021年9月 3日～2021 年10月6日	88㎡	個人住宅 兼共同住宅
へいあんきょううきょう 平安京左京 さんじょうしほうじゅうさんちょうあと 三条四坊十三町跡・ さんじょうもりちょうあと 三条せと物や町跡	きょうとし　なかぎょうく 京都市中京区 べんけいいしちょう 弁慶石町55	26100	1 478	35度 00分 31秒	135度 45分 59秒	2021年6月 16日～2021 年8月4日	48㎡	個人住宅 兼店舗
しらかわがいそあと 白河街区跡	きょうとし　さきょうく 京都市左京区 しょうごいさんのうちょう 聖護院山王町1	26100	417	35度 00分 59秒	135度 46分 39秒	2021年10月 4日～2021 年11月16日	200㎡	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安宮 内裏内郭回廊跡・ 聚楽遺跡	宮殿跡 集落跡	江戸時代	土取穴	土師器・陶器・陶磁器・瓦類	
平安京左京 三条四坊十三町跡・ 三条せと物や町跡	都城跡 商業遺跡	平安時代～ 安土桃山時代	柱穴・ピット 土坑・整地	土師器・須恵器・施釉陶器など	三条せと物や町に 関わる遺構・遺物を確認
白河街区跡	寺院跡 邸宅跡	平安時代～ 江戸時代	土坑・ピット・ 土取穴・井戸	土師器・染付・施釉陶器 焼締陶器・瓦類	大規模な土取とその 埋め戻し痕跡を確認

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく　れいわさんねんど
書　　名	京都市内遺跡発掘調査報告　令和3年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	馬瀬智光・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子・清水早織
編 集 機 関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所 在 地	〒604-8571　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地
発 行 所	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
発行年月日	西暦2022年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やましなほんがんじなんでんあと 山科本願寺南殿跡 （第9次・10次）	きょうとし　やましなく 京都市山科区 おとわいせじゅくちょう 音羽伊勢宿町26-5	26100	146	34度 59分 01秒	135度 49分 20秒	2021年1月 25日～2021 年2月15日	240㎡	個人住宅
						2021年4月 27日～2021 年5月14日	24㎡	
しもみすじょうあと 下三栖城跡	きょうとし　ふしみく 京都市伏見区 よこおおじ　しもみすかじはらちょう 横大路下三栖梶原町 65	26100	1185	34度 55分 45秒	135度 44分 45秒	2021年7月 7日～2021 年8月6日	140㎡	個人住宅
しゅうざんじょうあと 周山城跡	きょうとし　うきょうく 京都市右京区 けいほくしもくまだおおさこ 京北下熊田大迫 4, 6-2	26100	2088	35度 09分 24秒	135度 37分 22秒	2020年11月 24日～2020 年12月12日	199㎡	自然崩壊

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山科本願寺南殿跡 （第9・第10次）	邸宅跡	室町時代 江戸時代	溝・ピット・柱列 土坑・落込	土師器・陶磁器	
下三栖城跡	城跡	江戸時代	堀	明治時代の一銭硬貨	
周山城跡	城跡	安土桃山時代	石垣	瓦類・石製品	崩落防止対策